



352
1384

総社町要覧

総社町

會



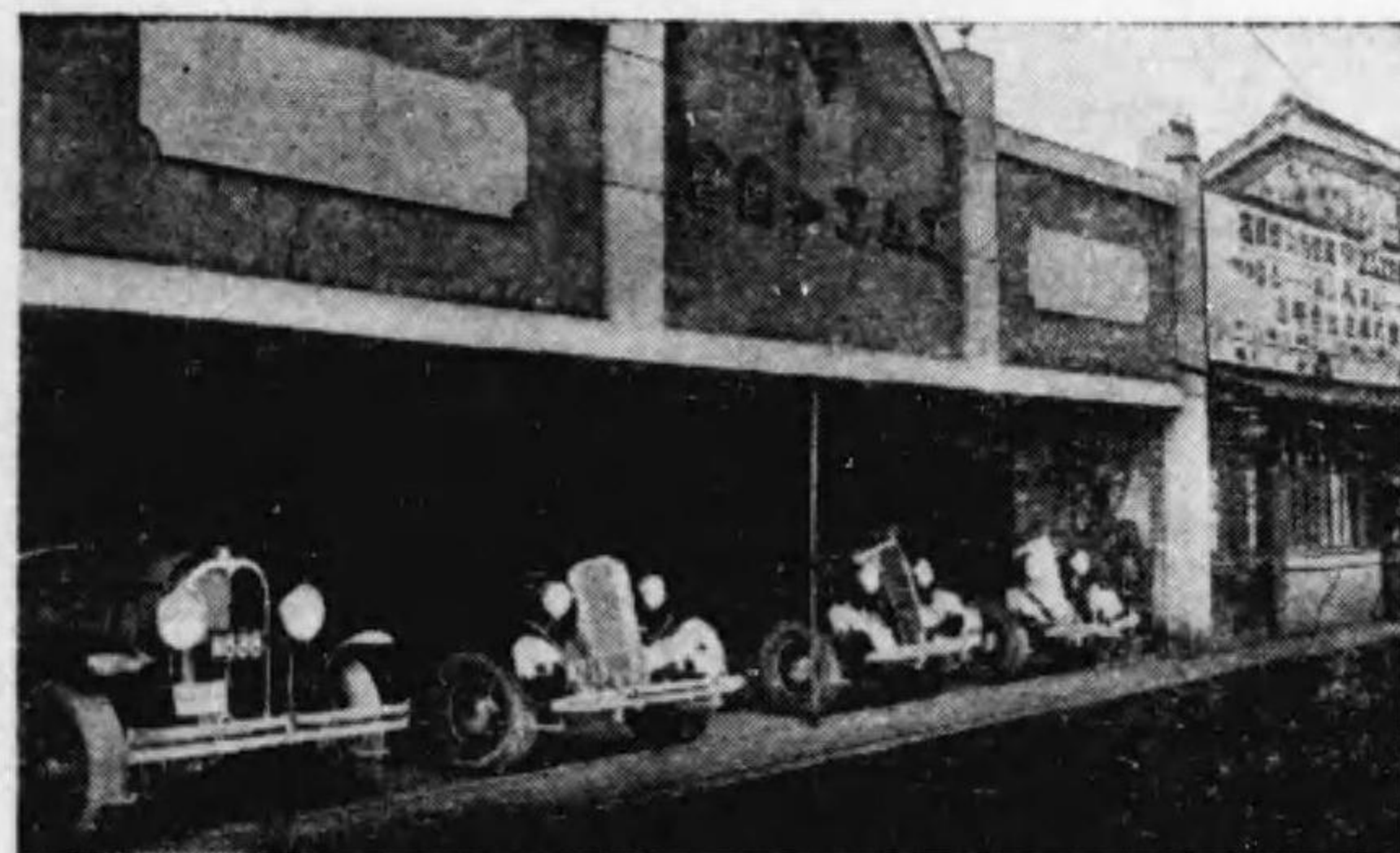
始



物234
9



社
要
覽



會商車動自エムエ

番九五話電。町本宮町社總

颯爽たる流線型
ハイヤトの乗心持は
絶対に他の追従を許しません!!



ハイヤトの御用は
安原商會へ!!

會商車動自原安

番一七話電。前驛西町社總

序

晩近交通文化の發達に伴ひ總社町の發展眞に見るべきものあり、豫ねて之れが過程と現勢を詳述し、之れを赤裸々に掴み得る、此の種要覽の必要を痛感したるも未だ其の機を得ず在昔今日に及びしが偶々本年五月十七日本町に於て、縣下産業の中核に參與する人士の集ひたる、岡山縣商工團體聯合總會の開催せらるゝに方り、遂に之を好機として本要覽を編纂し廣く江湖に頒たん事を企圖し、先づ副會長井頭康男氏に之が編纂機構の總てを委ね、更に書記平田政一氏その材料蒐集に、清水邦治氏專ら其の編輯執筆に努め茲に約一ヶ月間の日子を費して漸くにして之が完成を見たり。

今之を通覽するに短時日間に可能な限り各般に亘つて詳細を記述し、史實に遡りて町の淵源を極め、或は廣く舊蹟を訪ねて溫古知新の一端となし、或は町の産業狀態の核心を衝きて余す所なし。克く本要覽の目的を達成し得たるものと信ず。幸にして總社町の全般が本書に依りて把握し得るならば予の最も欣幸とする所にして敢て諸賢の一

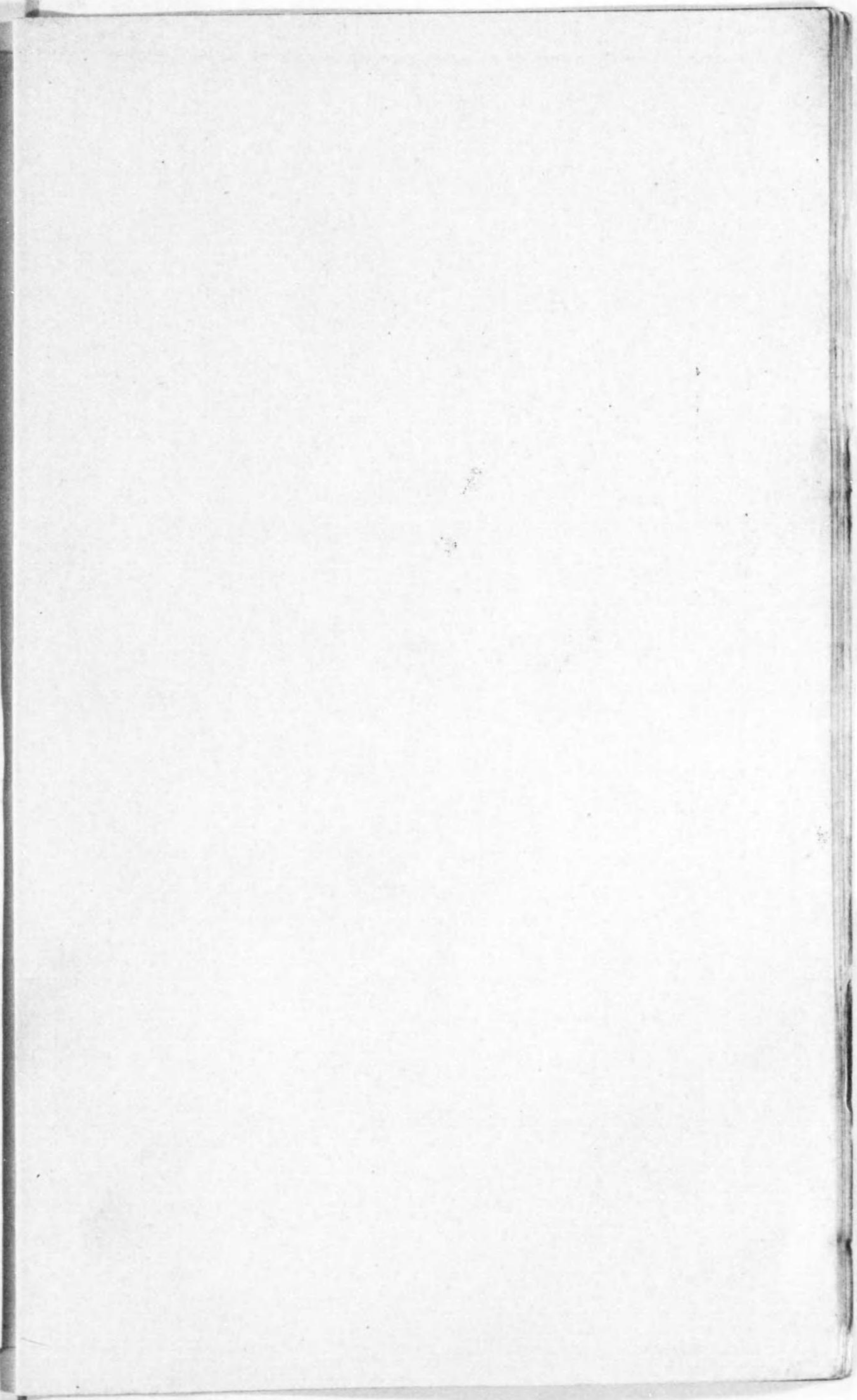
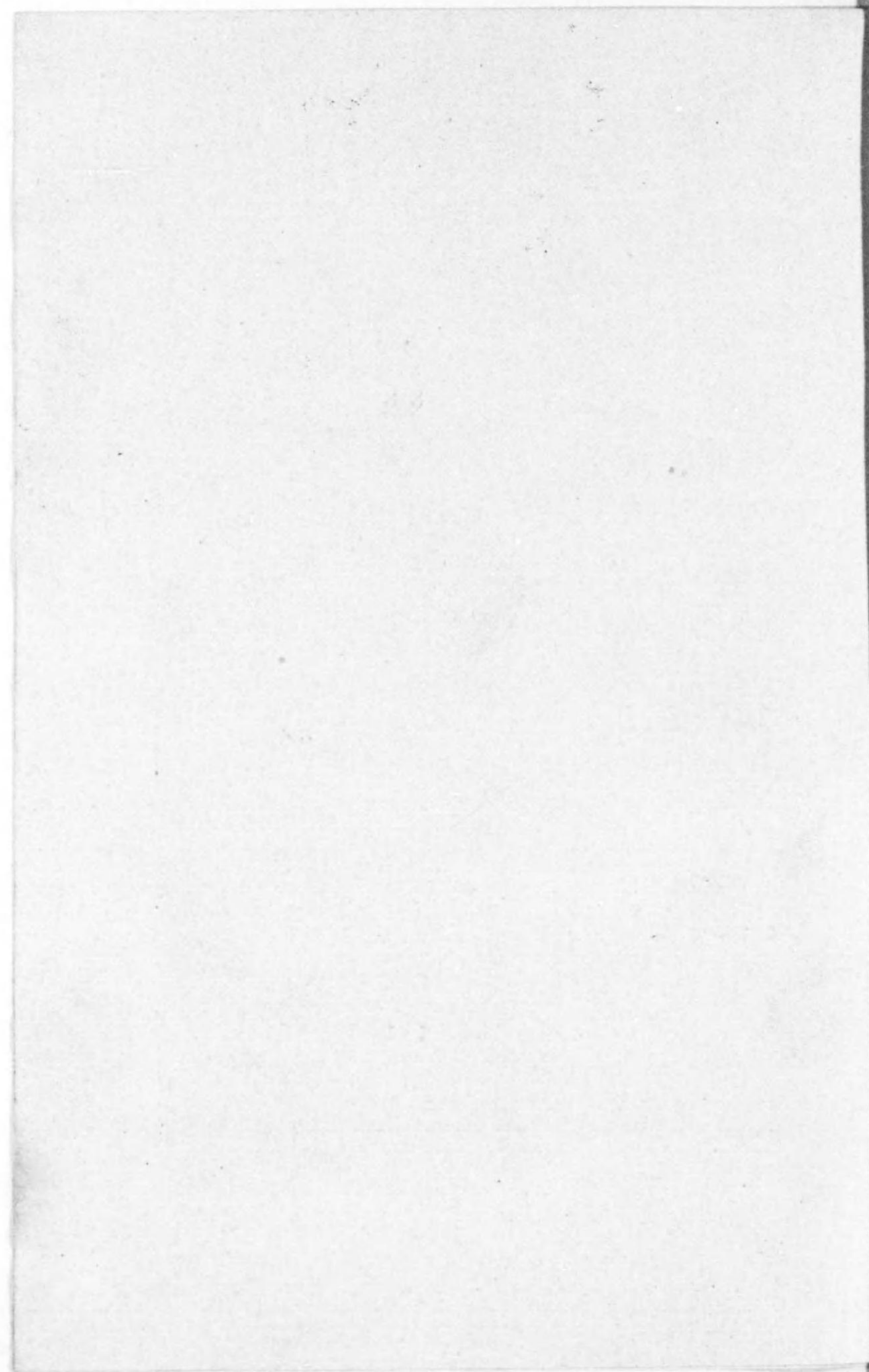
讀を願ひ近代的裝備の下に飛躍的躍進の途上にある我が総社町の爲め更に一段の御援
助を賜らん事を希求して序に代ふ

昭和十一年五月十日

総社商工會長 仙石佐吉

安久多
心勉

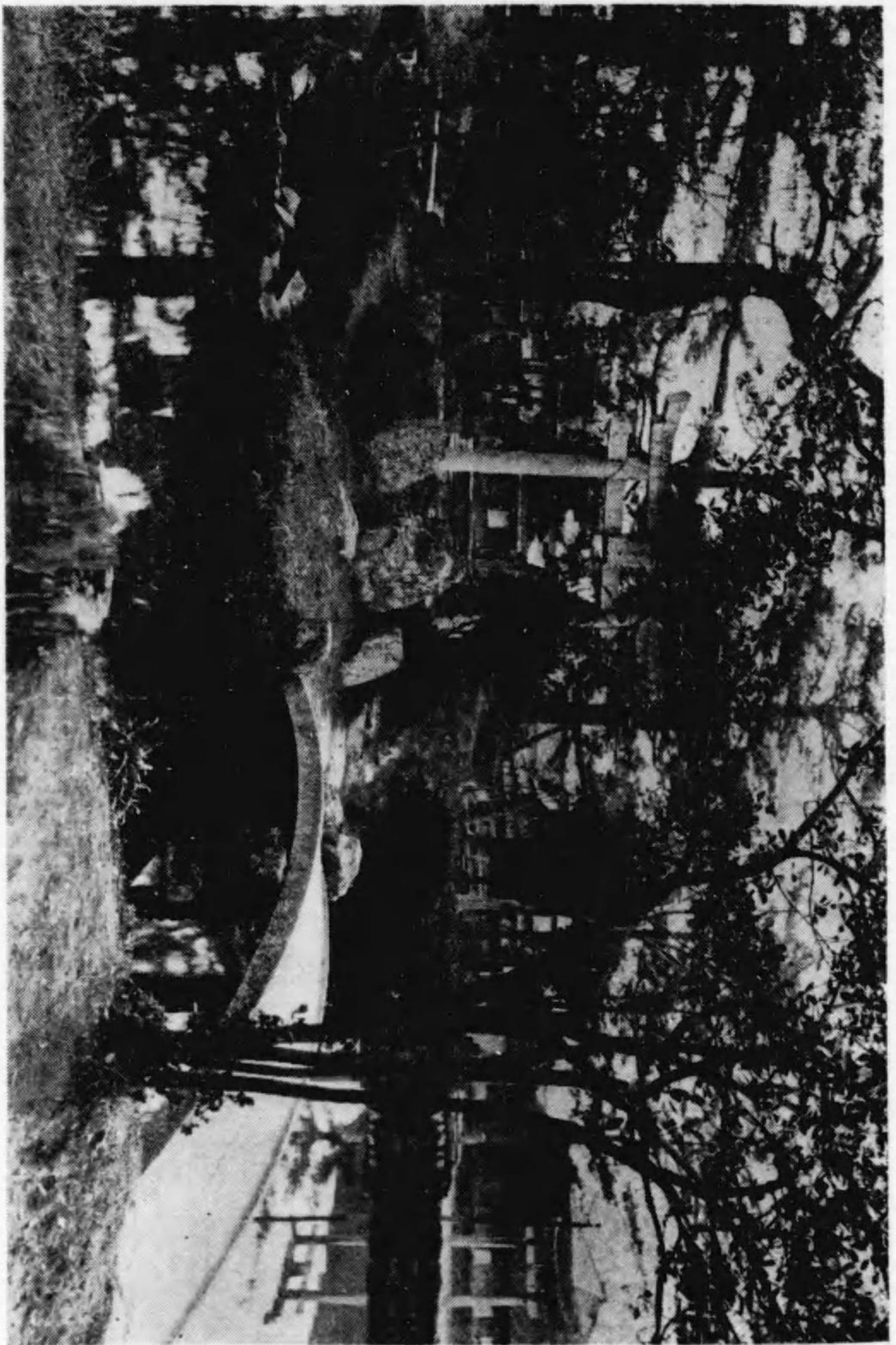
【字題下関信安久多 事知縣山岡】



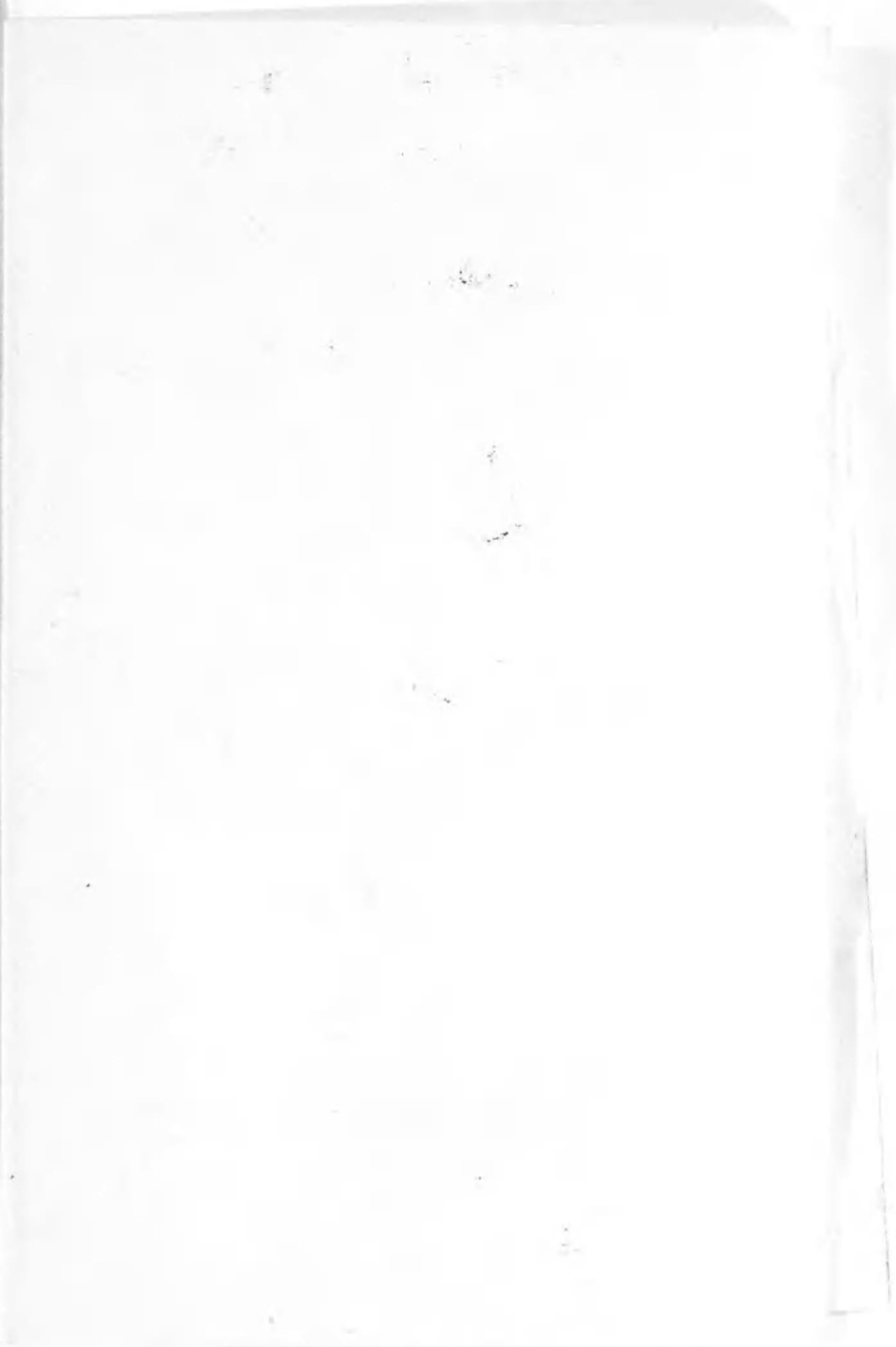


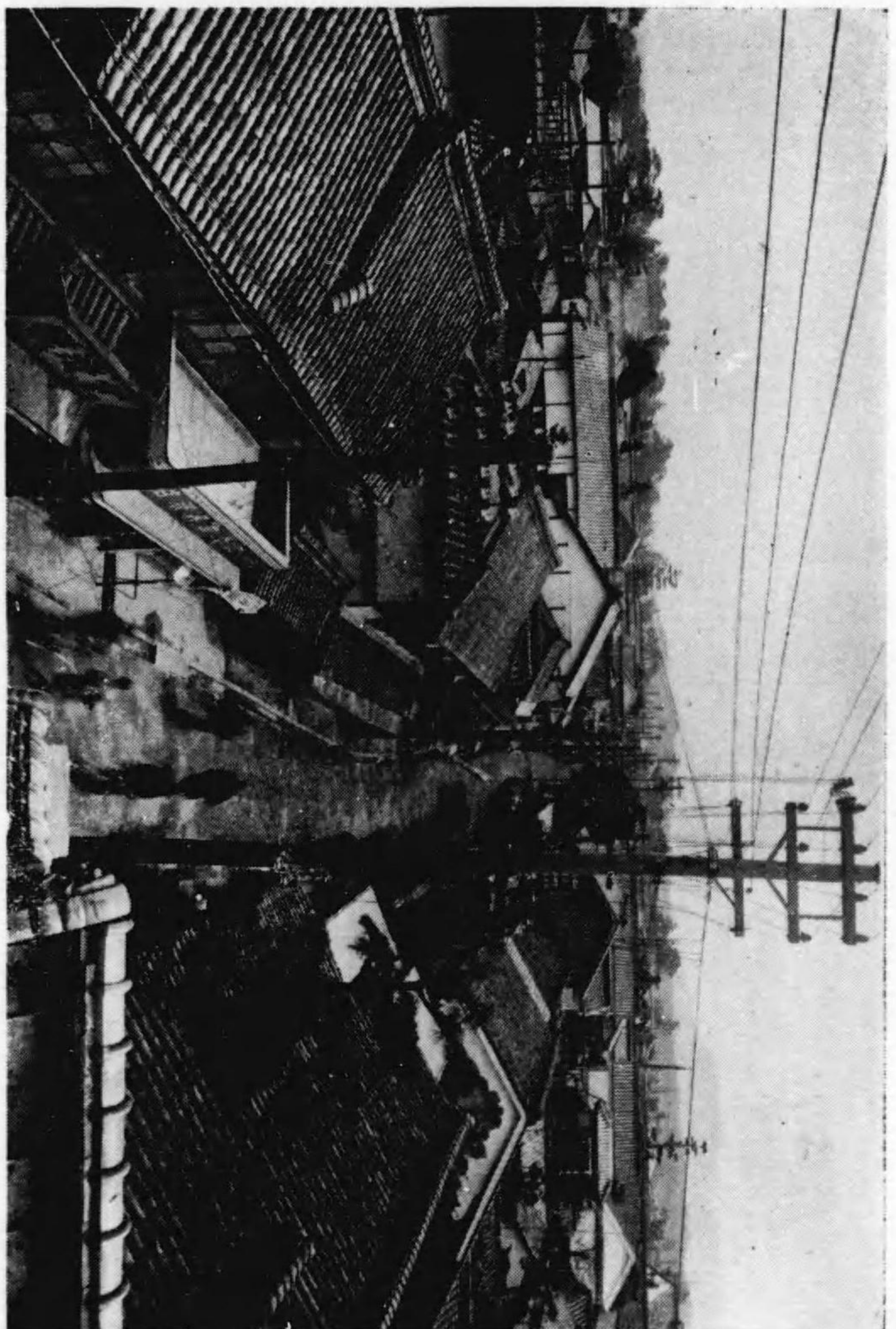
【景全町社總】



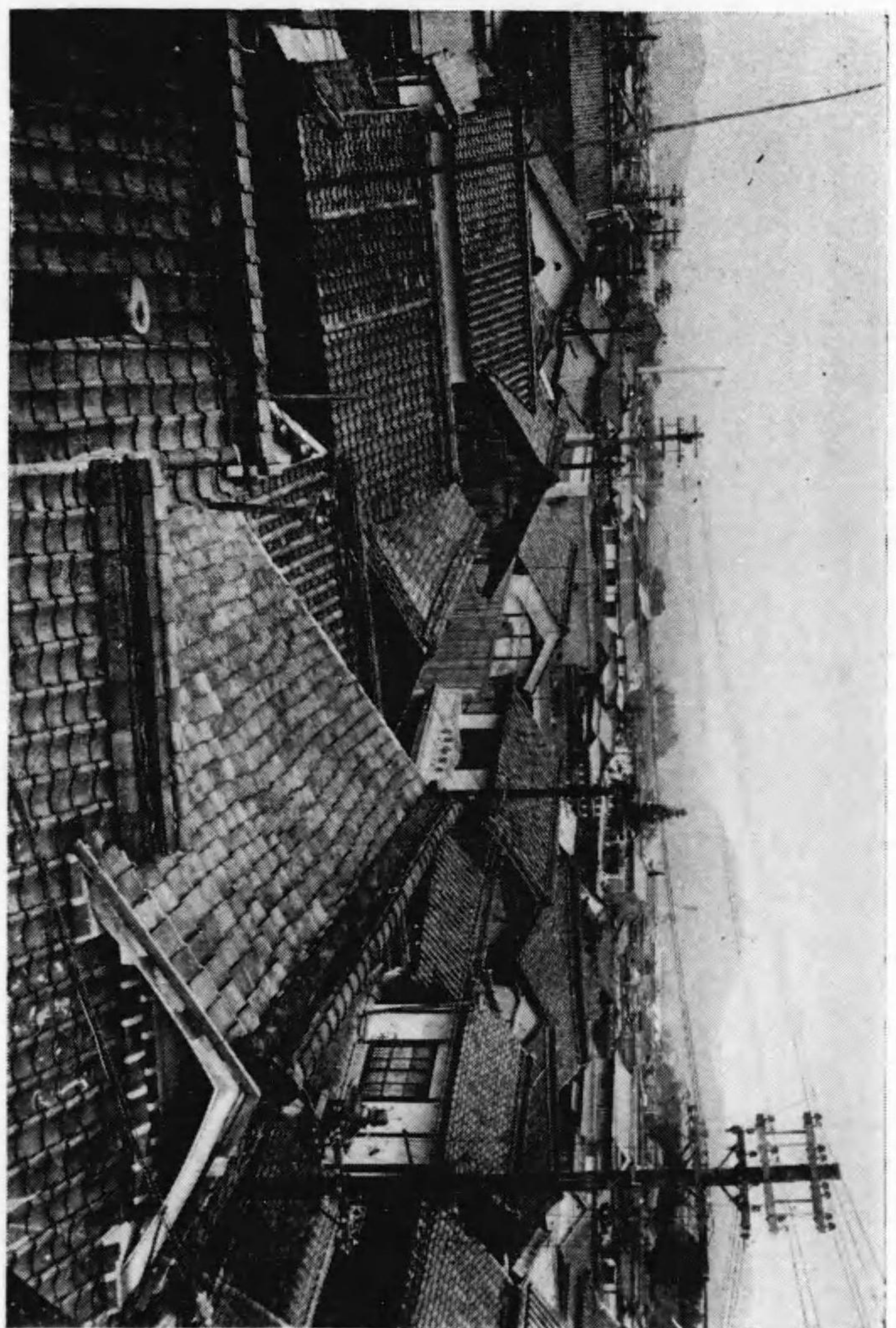


【部一ノ苑神宮社總】





【一ノ其街市社總】

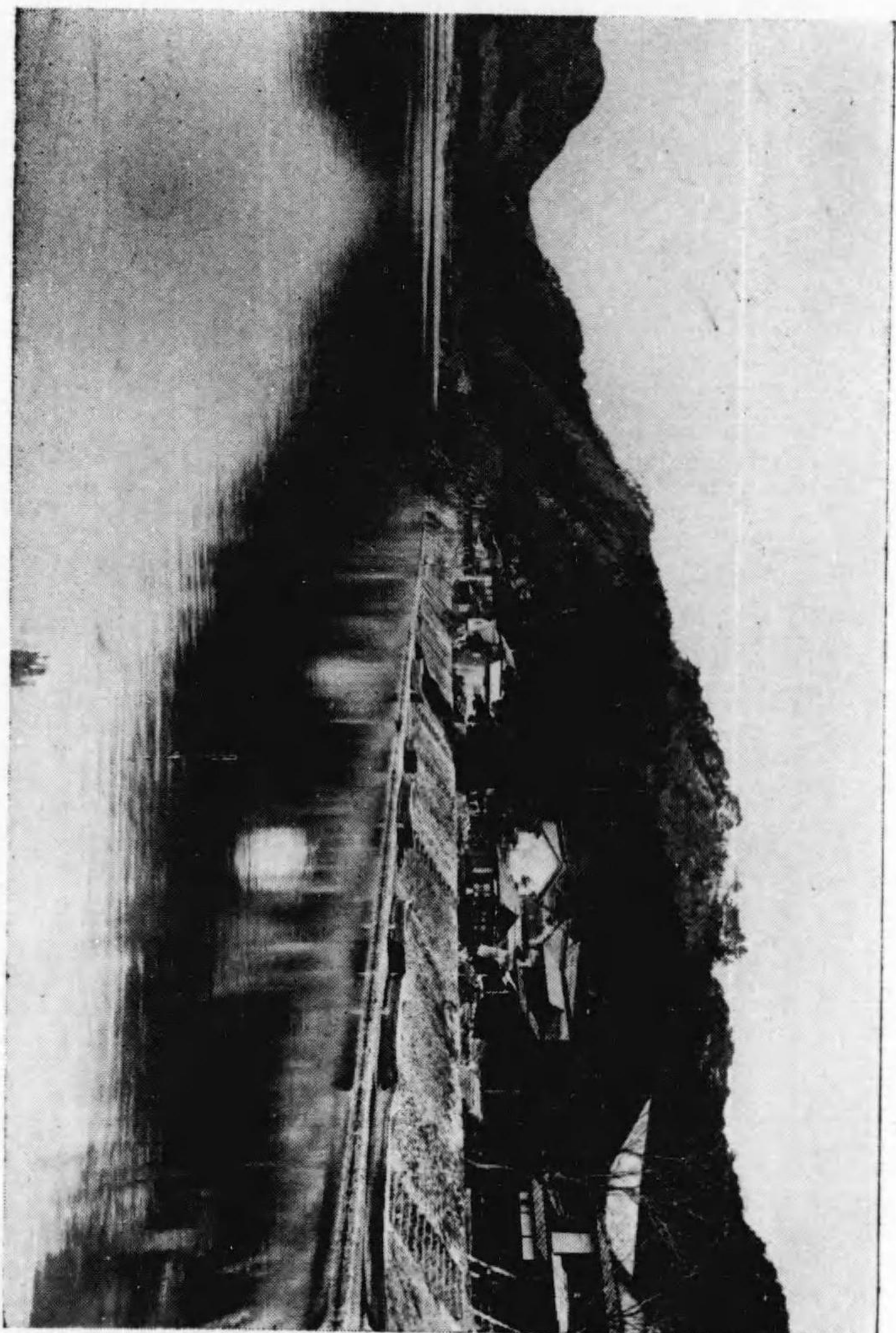


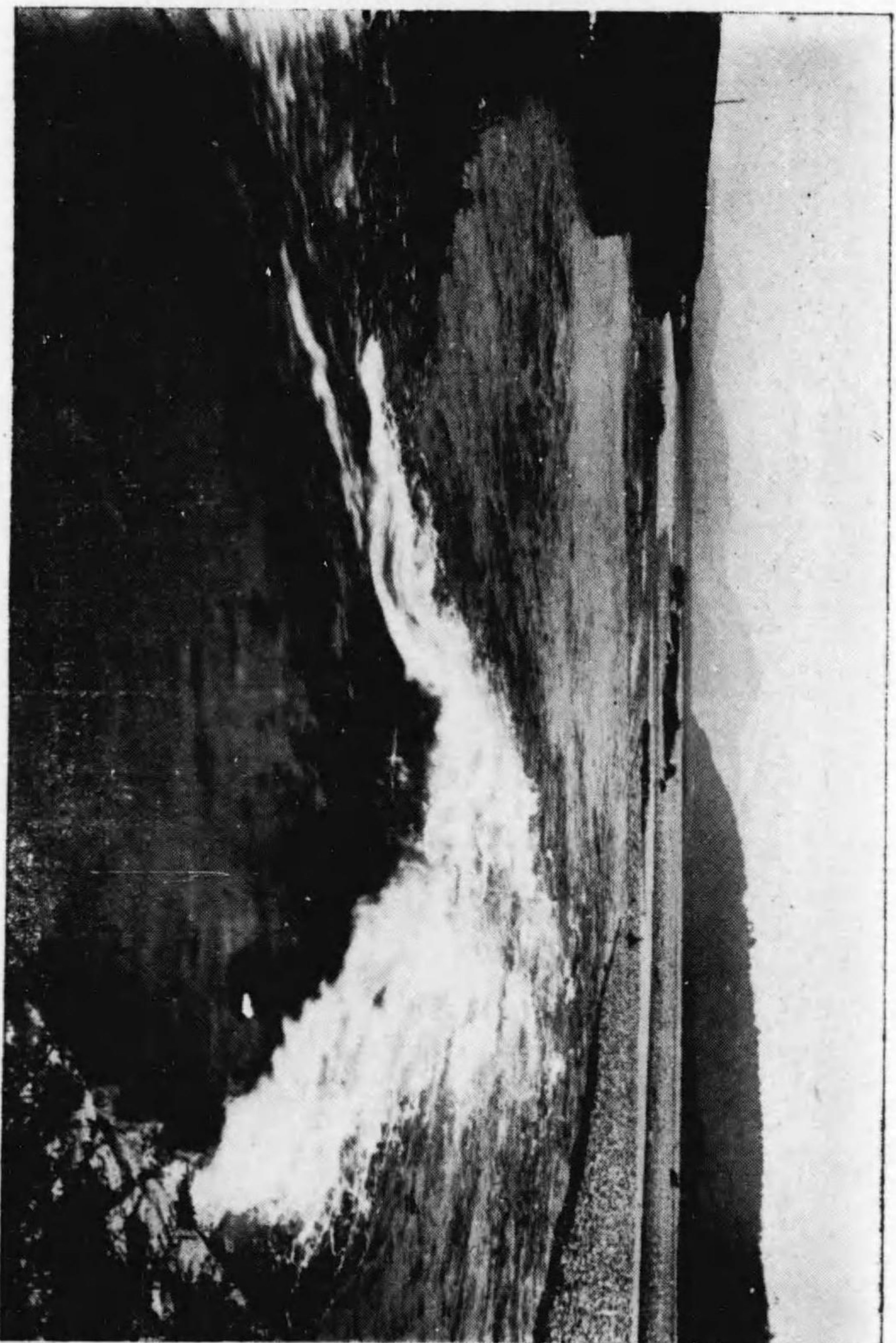
【二ノ其街市社總】



【塔重三寺福寶物造建護保別特】

【一ノ其郷水ノ井港】

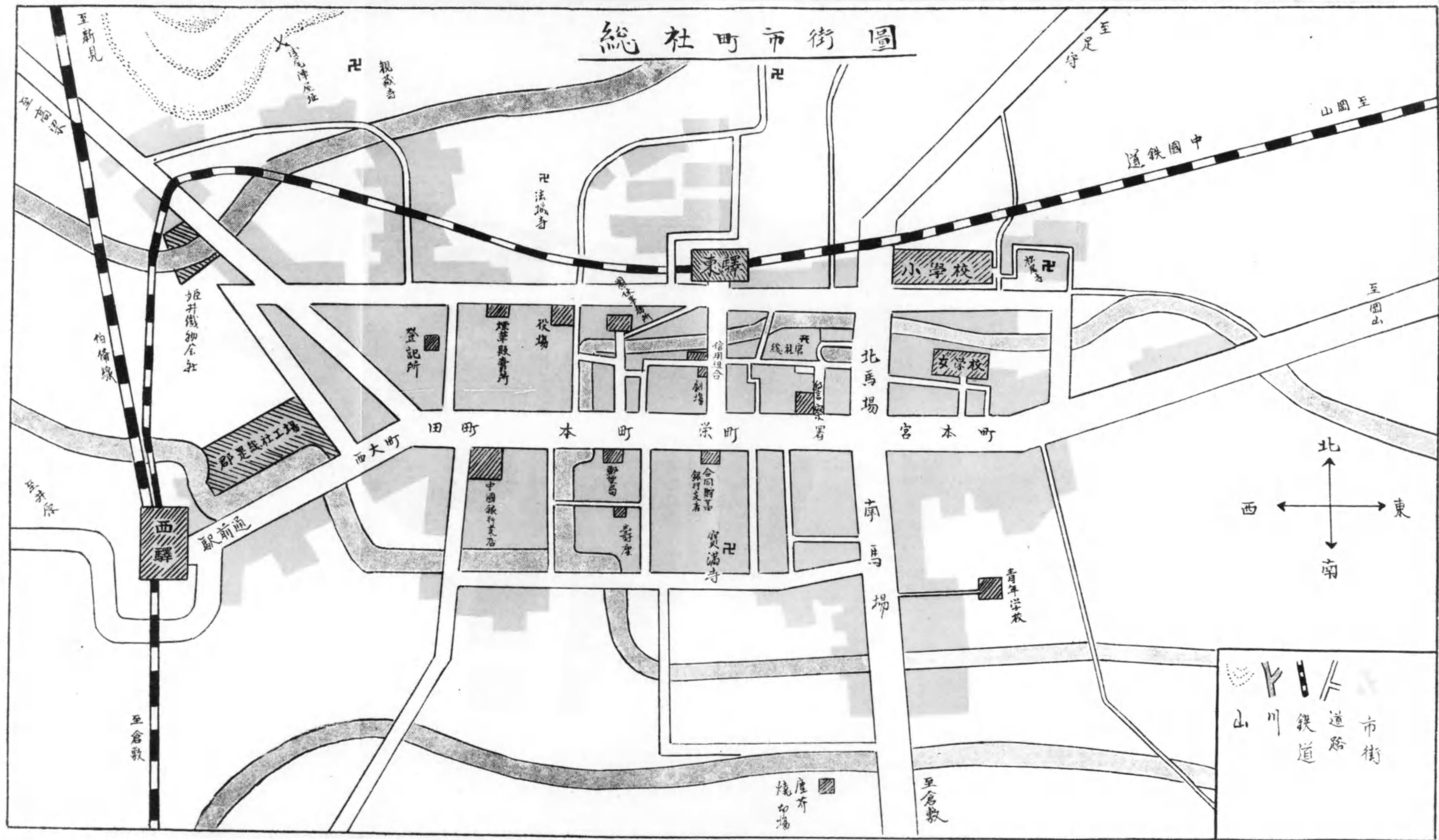


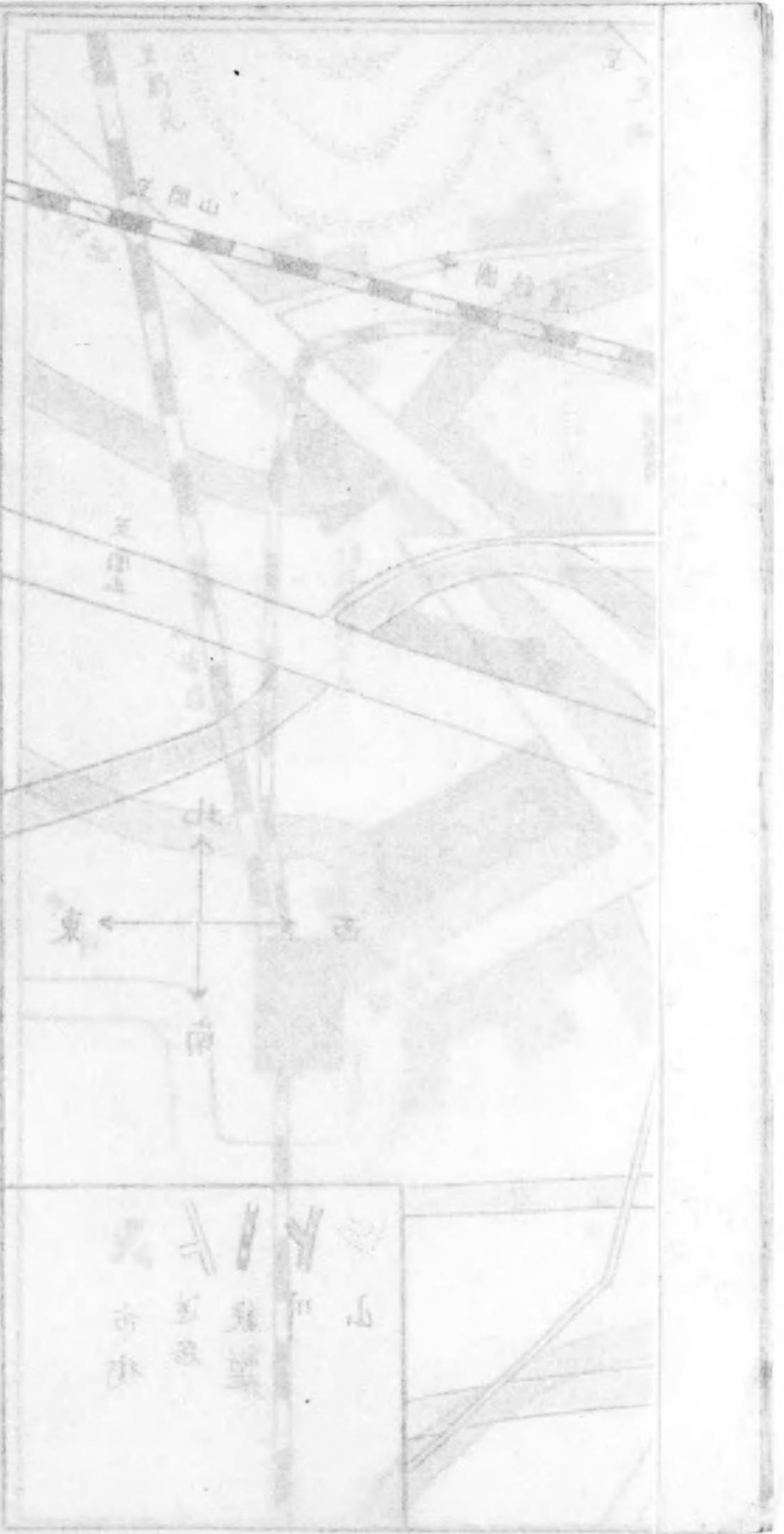


【二ノ其郷水ノ井湛】



總社町市街圖





目次

第一章 総説	
一、総社町の概観	一頁
二、総社町の沿革	五頁
第二章 総社町政の沿革及現勢一般	
一、町の構成	九頁
二、土地	二〇頁
三、人口	二〇頁
四、総社町の沿革	三頁
五、町政一般	
イ、町政機關	二六頁
ロ、町の財政状態	二六頁
第三章 産業	
一、職業別状態	三三頁
二、生産状態	三三頁
三、総社町の農業	三四頁

四、總社町の商業	三頁
五、總社町の工業	三頁
金融機關	五頁
交通、運輸其他	四二頁
第六章 官公署並に各種團體	
官公署	四頁
各種團體	五頁
第七章 教育社會施設	六頁
第八章 社寺、宗教	
一、神社	七頁
二、寺院	八頁
三、宗教	八五頁
第九章 名勝、舊蹟	八七頁
第十章 先哲、遺賢	
一、先哲、遺賢	一〇三頁
二、先覺者、遺烈	一〇七頁
三、郷土の先輩	一三頁

第十一章 總社町の名産	二七頁
第十二章 娯樂と慰安	二九頁
第十三章 旅館、料亭、カフェー	三三頁
ハイキングコース案内	三三頁
總社商工會附總社商工名鑑	
總社商工會	
一、總社商工會の沿革	一頁
二、事業並に施設	一頁
三、初期以來の商工會役員	三頁
四、會計を通じて見たる商工會の現状	八頁
總社商工名鑑	一四頁

第一章 總説

一、總社町の概観

岡山を起点として縣道へ沿ふて西方へ約二〇軒乗合バスへ乗れば約五十分で總社町へ着く。

吉備郡の首都と謂はるゝ總社町は、郡の南部に位し、東は服部村、北は阿曾村、池田村と境を接し、西は悠久に流るゝ高梁川の清流を距てゝ秦村と相對し、此の地は應神天皇の即位十四年、秦始皇帝の十二世の孫融通王が百二十七縣の民を率ひて歸化し、其子普洞王が秦姓を賜はりて農耕、養蚕、機織に従事し往古文化の發祥地として名高い。尙南部は都窪郡三須村、常盤村と界し、東西五・三四四軒、南北四・四七二軒總面積約一三・二五平方軒、人口約八、〇〇〇名 備中路有數の大邑である。

(1) 此の附近には往時の文化の中心地たる事を如實に示す幾多の遺跡、古墳が散在し、宛然、古墳叢とも謂ふべきものを形成せるは、往古に於てすら此の地方が如何に交通

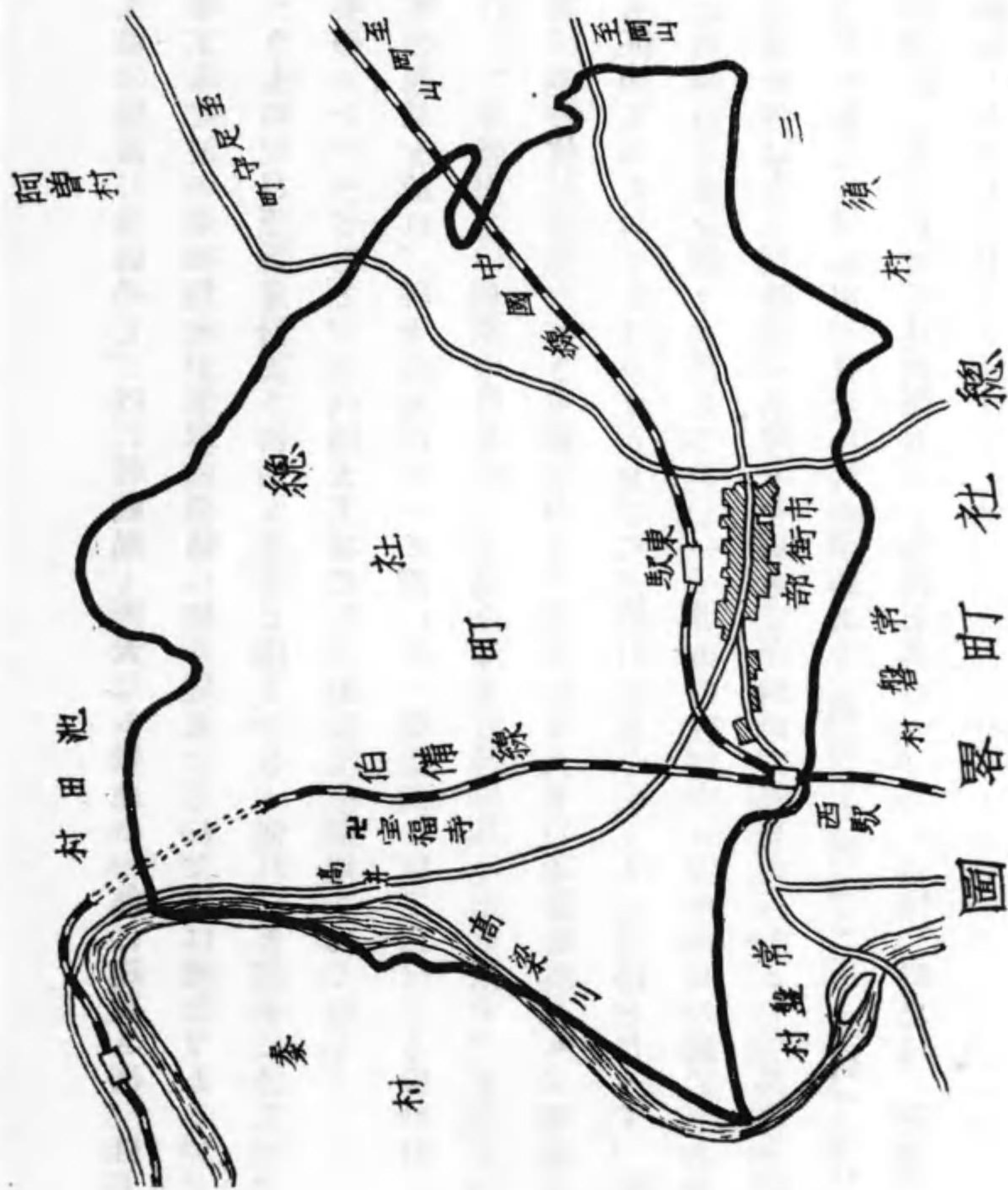
(2) の便良く、地味肥沃にして民族の發展に適し、燦然たる古代郷土文化の中心地であつたか、彷彿として偲ばれ興味深きものがある。従つて、現今に於ても、交通、通信、運輸の便殊に良く、裏日本を瀬戸内海の産業文化と結合する伯備線は町の西部を南北に向けて貫通し、岡山市を介して作洲津山に至る中國鉄道は町の北部を東西に通じて西総社驛にて伯備線と合し、町の絶えざる發展と相俟つて旅客、貨物の往來漸次頻繁となり、更に、スピード文化の高揚に伴ひ、自動車網は急速なテンポを以て擴大し、井原―岡山間は無論のこと、総社町を中心として倉敷に通ずる定期バス等附近町村にしてバスの通せざる所なく、名實共に本郡交通、文化の中心地として活氣ある躍進を續けてゐる。

かくして、此の完成せられたる交通網に沿ふて、此の附近の物産は凡て茲に集中せられ、商勢日に殷盛を極め、岡山、倉敷を始めとして遠く京阪神地方とも取引益々盛んとなりつゝあるが、輸出、移向きの物産に乏しきは唯一の遺憾とする所で、當局者は之が對策に腐心してゐる。けれ共、町内には姫井織物工場あり、最近郡是會社總

社工場の誘置にも成功し、既に乾繭場も厖大なる敷地の一部に建設され、目下操業中で本工場建設の最初豫定が業界の事情に依り變更せられた事は残念であるが、之に代るべきものが目下鋭意計畫されつゝあると聞くから、何れ近き將來に於ては、総社町産業のシンボルとして、近代的大工場としての出現を期待されてゐる。

町の西部を流れ、縣下三大川の一と謂はるゝ高梁川に依て培はれる総社町は土地肥沃にして灌漑用水の利用の自在にして完全なる近縣に其の比を見ず、不作を知らない農業は本町住民の誇るべき主業である。附近には天下の奇勝豪溪あり、耶馬溪の美觀にも匹適するものとしてハイキングに、旅行に杖を引くもの其跡をたゞす、淇井の水郷は暗紫色の水を満々と湛えて美しい。井山の寶福寺は雪舟禪師の逸話で名高く、日照山國分寺は奈良朝時代の名残りを留めて今尙地方稀有の巨刹として其昔を偲ぶに足る。此の附近には造山、日差山等の遺跡あり、福山を古戰場として喧傳せられてゐる。其他遺跡、舊蹟に於ては數限りなく散在し其の一ツツの持つ歴史は、全時に、総社町發展の歴史でもある。

(3)



要之、總社町は古來地の利に恵まれ、天與の美田を有して、吉備地方の産業文化の中心となり、交通が愈々發達すると共に町勢は日に月に進歩、躍進を遂げてゐる。觀光、遊覽地としての總社町も決して旅人の期待を裏切るものでなく、幾多の奇勝、史實に富んでゐる事を發見するのである。で、私達の仕事は、此の總社町の一絲纏はぬ全裸の姿を茲に紹介する事に依て、幾分でも、グレート總社町への飛躍を押し進める齒車ともなり、先人の努力と苦心に對して報ゆる事が出來得るならば、大膽にも、總社町の前途を卜し得たものとして小誌の目的の大半は達し得たものと信するのである。

二、總社町の沿革

(5) 總社町は其昔、仁徳天皇の皇后八田皇女の御名代の地にして、八田部、即ち、八田部郷である。總社の地名は、大化年間、當時の國廳の所在地國府の近傍に設けられ、國內神名帳に記載せる神々を奉祀し、國司之を遙拜して政務を取りしより由來せるものにして、即ち、備中總社は備中國三三四盤の神饌を奉獻するを古例とし祈年祭の節



【場 役 町 社 総】

は國幣を頒つて捧げ奉つたものである。此の宮の名稱に因み八田部が總社と稱するに至つた事は以上の史實に徴して明かである。而して總社町は七字より構成せられて居り、其中、刑部は古の刑部郷にして充恭天皇の皇后忍坂大中媛の御名代の地と謂はれ、其他の字名に井手、井尻野、福井、門田等の地名が残れるは今の高梁川が上記地域を東へ流れて足守川と合してゐた史實を物語るもので現在の十二ヶ郷用

水路は當時の河流の名残りを留むるものとして河川變遷の跡が偲ばれ、現在の位置と照し合せ感慨深いものがある。

かくの如く、總社町は其當初から國廳の所在地として、備中の中心としての華かな資格を備へて誕生したのであるが、其後永い年月の経過の間に何時しか衰微し、國廳廢絶後は僅かに其地名に依り當時の政治、經濟の中心地としての繁榮の夢を留むるに過ぎなかつたが、徳川時代に入り、商人階級の勃興に伴つて、附近部落が漸次町村として發展するに従つて高梁、成羽、新見方面との交通産業の中繼地となり、更に、井原、矢掛方面に通ずる國道と縣道との合する所として、漸次活潑さを取戻し明治二十二年町村制の實施に當りては、附近二ヶ村を合して自治制を布き、全二十九年には早くも町制を布き得る迄に至り、茲に、將來への飛躍が確く約束せられたのである。

(7) 總社町商業の濫觴は何時頃からであるか詳かでないが、併し、今尙總社町の繁華街本町に市場イチバなる地名が残つてゐる事を思へば、他の町村に時々見受けられると同じ様に、總社町も亦此の地方の物資を持ち寄り、定期的な市を立て、取引を行ひ需給關係

(8) を調節してゐた場所と考へられるのである。であるから、物資の集散地としての総社町は當時可成重大な役割を演じてゐた事が肯けるのである。

かくして、漸く發展の緒につき町制が布かれて數年後の明治三十七年十一月十五日には岡山―津山地方と結ぶ中國線總社驛が設置せられ、交通の發達は全時に町勢伸張に一層の拍車を加へることとなり、年々人口増加し、大正十四年二月十七日、伯備線の建設が倉敷―宍粟間の第一期工事を完成するや、直ちに、西總社驛の誘置に成功し山陰方面との接觸の機會が與へられ、今や、東西二つの玄關口を持つ、地方屈指の大邑として其存在を誇り、其の活氣と伸張力は驚くばかりで、人口が増加し、年々新しい家が建ち並んで行く様は他地方に其比を見ないといはれてゐる。

とまれ、其昔、當時國廳所在地として誕生して以來榮枯盛衰の歴史を秘めて流る、高梁川の流れと共に、星遷り、歳變りて幾百星霜、時代の波を押し切つてよく今日の總社町が形成せられた事を想はゞ其發展史の一つ／＼に時代の息吹きが感せられて、轉々懷舊の念を禁じ得ないのである。

第二章 總社町政の沿革

及現勢一般

一、町の構成

總社町は其の構成上より市街部と在部に二大別さるゝのであるが、之を今一層詳細に分類するならば、總社、井手、刑部、福井、小寺、門田、井尻野の七個の大字より構成せられて居り、尙昭和八年十月區制が布かれ小字を基準として左の三十七區に分割、各區に區長、區長代理各一名が置かれ、茲に純然たる自治制が確立した。

區名を擧ぐれば

- (9)
- | |
|----------------------------|
| 西總社、西大町、市成、西田町、北田町、東田町、本町、 |
| 北浦、川崎、三千坊、榮町、東驛、西宮本町、北宮本町、 |
| 東宮本町、南宮本町、井手、延清、水、東總社、諸上、 |
| 西山、刑部、新田、福井、小寺東、小寺西、小寺南、 |
| 小寺北、門田南、門田北、道路、西村、東村、溝井濱町、 |

(12)

此の表に依れば女の男に超過する事二八九名、全人口の三割五分に相當し大略女一〇〇名に付男九四名の割合となり全國の女一〇〇名に付男九八、八岡山縣の女一〇〇名に付男九八名に比すれば當町は女の數が遙かに多い尙之を前掲表の職業別人口に於て戸數に對する人口のパーセンテージから考へる時工業方面、花柳方面への他町村からの女の入り込みが想像し得るし之は總社町の發展を物語る一ツのモメントにもなり得ると考へられる。更に就業人口の割合が農業を主として商業、工業が之に續くのは町の構成を明示するもので町發展策を講ずる上に於て見逃す事の出来ない一事となつてゐる。

四、總社町政の沿革

吉備史を播けば、吉備地方の發祥は遠く建國の昔に遡り、就中、總社地方は其の中心地の一ツとして附近には之を立證する幾多の史實に恵まれてゐるが、總社町は元賀陽郡に屬し、賀陽とは、往古の加夜國の謂にして、吉備氏御友別の次子仲彦を始祖とし、代々其の子孫が國造を繼承してゐたが、大化新政に當り、從來の國造は政權を取

上げられ、其の代り、國司が任命さるゝ事となり、總社が此の國廳の所在地として發展したことは前掲の通りである。

舊幕時代の總社は元淺尾藩一萬七十石蒔田廣定公の所領にして舊淺尾村内に其の陣屋の跡がある

然し總社町の中でも八田部村は元松山藩の領地であつた。

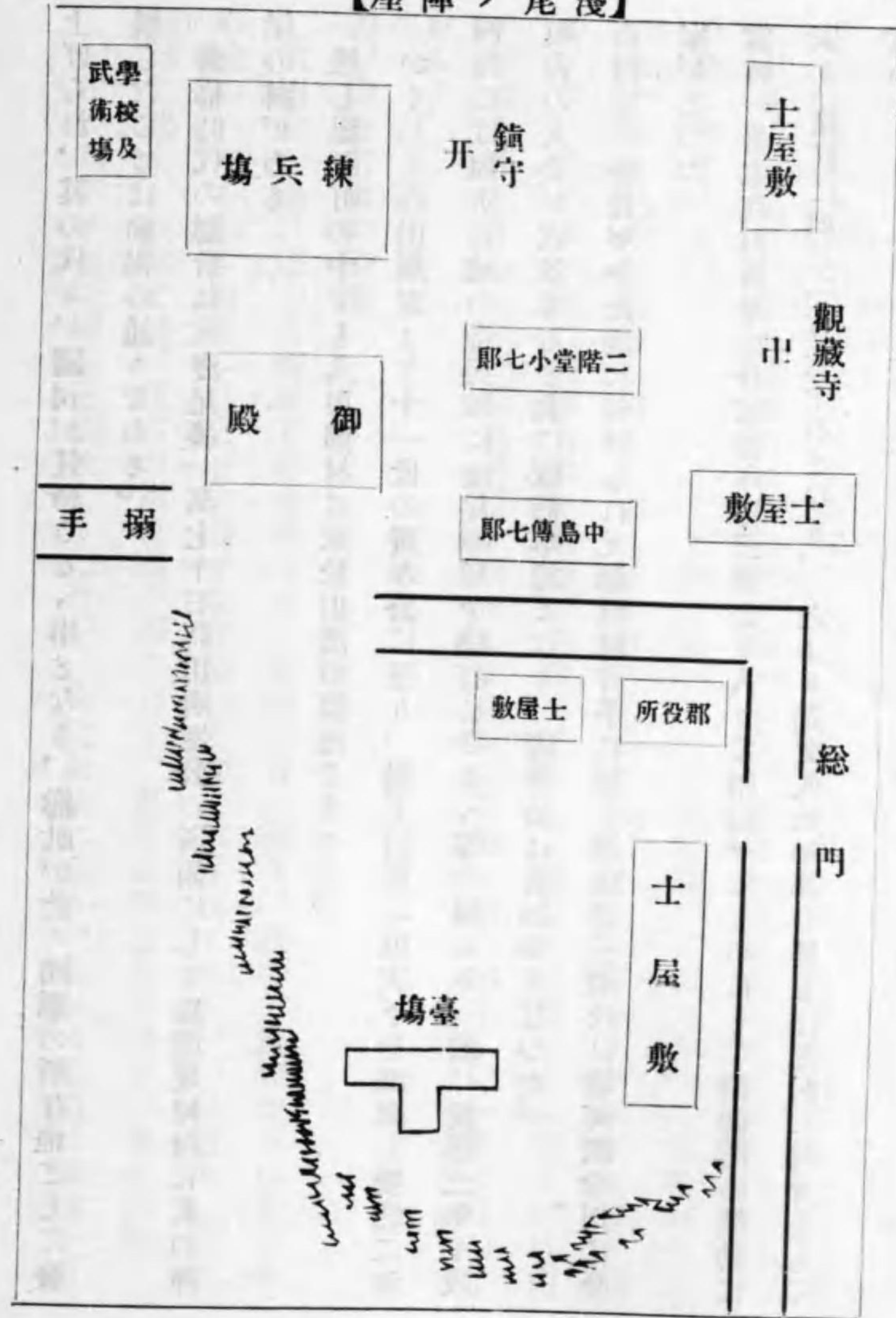
かくして蒔田廣定より十一世の廣孝公に至り、勤王討幕の聲天下を風靡し慶應二年四月には周防岩城の奇兵隊に淺尾陣屋を焼打にさるゝ等の事あり、遂に慶應三年王政復古の大業が成就すると共に版籍奉還となり、廣孝公は藩知事となつた。

蒔田家は慶長年中此地に封せられ元總社町井手に居し郡窪郡三須及び駿河國増川に分家があつた。

(13)

當時の藩主蒔田廣孝は分家郡窪郡三須より入りて相續せるものにして蛤御門の戦功に依り、諸候に列し一万七十石となり、之より先文久元年其の居を淺尾村に移せしものなり。

【屋陣ノ尾淺】



越えて明治四年には廢藩置縣の事あり、備中は一時深津縣、小田縣の管轄に歸し、總社町は當時賀陽郡に屬してゐた。更に明治二十二年六月町村制の實施に當り、總社、井手の二ヶ村を合して新に總社村となし、全二十九年二月町制を布くと全時に前村長池上達治氏町長に就任し、井尻野、門田、小寺、福井、刑部の諸村は合併して淺尾村となつたが、越えて明治四十一年二月八日に總社町と淺尾村とを廢し其の區域を以て總社町を設置し、茲に町として發展の礎石が嚴として作られたわけであるが其の間、初代町長池上達治氏より小山武吉郎、中川梅太郎氏等の歴代町長を経て四十一年合併當時は前淺尾藩主にして前淺尾村長なりし蔭田子爵が町長として就任せられた。當時の役場は現在の寶滿寺にあり、明治四十五年池上勢平氏が町長を踏襲するや銳意總社町の發展に務め大正三年には町役場を田町の現登記所へ移轉したが大正期を通じての町が目覺ましい發展の爲め終に手狭となり、昭和三年現在の地所に新築移轉し町に一異彩を放つと共に將來を約束された新市街構成の中心地となつてゐる。

尙池上勢平氏は町長就任以來現助役井頭康男氏の町長代理就任迄實に五期二十年間

(16)

の久しきに亘つて町政に參與し、町今日の隆盛を見たるは時運の進歩に依るとは云へ又氏の努力に負ふ所多大であると言へよう。更に大正十五年郡役所廢止の結果舊郡役所跡には郡内各種団体事務所が置かれ依然として郡治の中心地となつてゐる。

五、町政一斑

イ、町政機關

町役場の仕事は稅務、統計、兵事、社寺、戸籍、土地、學務、勸業、衛生、庶務其他に有轄處理し、町政執行機關としては町長一名、助役二名、收入役一名、書記九名、技手一名、其他一名なるも現在は、町長欠員中にして助役は名譽助役一名なり。各種委員としては

學務七名、土木五名、勸業一名、衛生二名、社會教育二一名、救護二二名

議決機關としては町會議員十八名にして其他行政補助機關として區長、區長代理各々三十七名、衛生組合、町農會、消防組等がある。

ロ、町の財政狀態

町の財政狀態は左の如し

諸稅負擔

國稅	金額
地租	一〇、一一八・二一
第三種所得稅	八、〇五三・五八
營業收益稅	四、六三八・八二
乙種資本利子稅	一〇〇・七〇
合計	二二、九一一・三二

縣稅

稅目	金額
地租附加稅	一四、六三九・七六
特別地稅	一、〇二一・二九
家屋稅	六、六九四・九三
營業附加稅	三、六〇六・九八
所得稅附加稅	三、二二七・二〇

(17)

(18)

都市計畫特別稅	二三七・四五
營業收益稅割	五六七・二六
營業稅	九、二六八・二七
雜種稅	三九、二六七・四四
合計	

町稅

稅目

金額

地租附加稅	一〇、一三六・〇〇
特別地稅附加稅	六六九・〇〇
營業附加稅	三、七一七・〇〇
家屋稅附加稅	三、四二〇・〇〇
營業稅附加稅	五二八・〇〇
雜種稅附加稅	七、八七五・〇〇
特別稅戶數割	一七、九七七・〇〇
合計	四四、三二二・〇〇

町費

十年度

町費	六一、一七五・〇〇
一人當	三五・三八一
一人當	七、六三七

十一年度

町費	六三、八七四・〇〇
一人當	三六・八二一
一人當	七、九七四

諸稅負擔及平均割

稅別	金	高	一月當	一人當
國稅	二二、九一・一三二		一三・二五一	二・八六〇
縣稅	三九、二六七・四四		二二・七一	五・四五
町稅	四四、三二二・〇〇		二五・六三四	五・五三三
計	一〇六、五〇〇・七六		六一、五九六	一三、二九五

(19)

昭和十一年度豫算
歲入

科目	金額
財產收入	六六六
使用料及手數料	一五三
交付金	一八三
國庫下渡金	八七五
全補助金	一五〇
縣補助金	一〇六
十二ヶ郷補助金	一〇九
繰越金	一〇八
雜收入	一八二
財產賣拂代	一三〇
町稅	四六二
歲入合計	六三八七
神	二七三
社	三〇〇
費	〇
歲出經常部	金高
神	二七三
社	三〇〇
費	〇
歲出臨時部	金高
神	三、五四
社	二、〇〇
費	〇

科目	金額
會議費	六三八〇
役場費	九、九六七
土木費	三、九〇三
小學校費	三、八九二
青年學校費	四、〇四五
幼稚園費	一、三八七
學事諸費	六五〇
傳染病豫防費	一四六〇
病舍費	一二三〇
衛生諸費	一一三〇
塵芥燒却場費	五四二〇
墓地費	五〇〇〇
火葬場費	三六八〇
勸業費	五一〇〇
救護費	一、二八〇
警備費	一、〇六〇
基本財産造成費	四七六〇
傳染病豫防費	五、二九〇
公債費	二、一六〇
基本財産積戻	一、七五七
救濟資積立	二、七二〇
造林積立金積戻	二、九〇〇
寄附金	一、二七六
補助費	一、五二六
選舉費	三、六〇〇
助成金	五〇〇〇
雜支出	六〇〇〇
統計調查費	六〇〇〇
積立金	六一、〇〇〇

財產費	三〇五〇〇
諸稅及負擔	一、三八九〇〇
公金取扱費	五六〇〇〇
兵事費	一九一〇〇
雜支費	三五〇〇〇
豫備費	一、四〇〇〇〇
公民學校費	〇
青訓費	〇
歲出經常部計	五、四二三〇〇
歲出臨時部計	一、二四五〇〇〇
歲出合計	六、六七八〇〇〇

第三章 産業

一、職業別狀態

前掲の人口の所にて示した當町現住職業別人口の統計を見れば分る通り、現住戸數を職業別にして見ると、農家最も多く、商業戸數之に次ぎ工業戸數之に次ぐ。此の三

つの職業に属する人口は全人口の八割二分に及び、當地住氏の大部分は之に依て生計を立て、あるといひ得るわけである。総人口に對する農業に属する人口の割合は四割四分、商業人口の割合は二割九分、工業人口の割合は九分である。然し茲で注目しなければならぬのは農業と不可分の關係にある副業が此の表の中には全然表はれてゐない事である。特に此の地方の副業として花蒔、蕪蒔、疊表の生産高は莫大な數字に上り、農家の大半以上が家内工業的に、或は數台の機械を据え付けて生産に従事してゐるのであつて、農家収入の大半を之に依て得る家も多々發見されるのである。

二、生産狀態

今本町生産狀態を最近の累年比較統計に就いて調ふるに

種別	昭和七年	昭和八年	昭和九年
農産物	四四一、七八四	五一六、二五六	四八九、〇九二
蚕繭	二五、九三一	三六、九六六	九、〇六四
畜産物	三、八八〇	四、七八八	五、八〇一
林産物	二、五三八	二、四五〇	二、三二二

水産物	二、五〇一	二、三六五	二、一七一
工産物	六八五、一一二	七七三、九七六	九二四、〇三七
鑛産物	五五八	五五八	四九八
計	一、一六二、三〇四	一、三三七、三五九	一、四三二、九八五

右表に於て中には著るしい価格の激減を見たるものもあるが其の年々の經濟界の實情價格の激しい變動を考慮に入れるならば、大体に於て、常町の生産状態は順調なる發展をなしてゐると言ひ得べく、特に工業生産物の躍進は目覺ましいものがあり、好調の潮に乗る姫井織物工場の發展をトップとして躍進総社町のため万丈の氣を吐くものと言つてよからう。

三、總社町の農業

總社町は之を行政上の構成より見て市街地のみでなく附近の近接諸村を合併したものであり、随つて總社町の人口の大半は之等諸村に在つて農耕に従事せるものと言ひ得べく、生産額の上から見ると農業は本町の主業として第一位に推さるべきものであらう。

のみならず、町の主体をなす市街部の繁榮は一つに懸つて此の外殻を形成する諸村の興廢にある点に留意するならば常町と農業との離れ難き關係が自ら判然するであらう。

偕て、先ず順序として最近の統計中から主要農産物の生産物の生産高を列記して見るならば左の如くである。

種別	作付反別	收穫高	價額
米	五、一〇九反	一二、九九九石	三九二、三六四円
麥	三、七八七	六、四五八石	八五、〇八〇
藺草	三六一	八一、二二四石	三二、四九〇
大豆	七五	一一六石	一、七四〇
甘藷	五三	一六、四三〇石	二、六二九
生大根	九八	六三、七〇〇石	三、一八五

右表の通りであつて常町の主業である農業中に於ても其の生産額の大部分は米、麥、藺草に依つて占められ、作付段別に對する收穫高から見ると如何に此の地方が豊穰な土壌に恵まれてゐるかを示してゐる。其他果物特に桃、梨、葡萄等の年産額は年々

(26)

壹万五千圓に及び主なる取引先は阪神地方、福岡地方であるが最近各地よりの注文相次ぎ大いに將來を期待されてゐる。

自小作關係は

自作 一四九戸

小作 二七六戸

自作兼小作 三四〇戸

となつて居り、大部分の農家は自作乃至は自作兼小作であり、地方的に見て比較的富裕である。

イ、農家組合

かくして當町の農家組合は實に三十五組合の多きに達し之等は町農會の熱心なる指導の下に農事改良、農業經營改善等々の實行に務め

一、農業の共同作業

二、農用器具、機械の共同使用

三、労力の配給節調

四、農事改良事項の共勵實行

五、農業及び生計用品の共同購入並に農産物の共同販賣

等々の目的に向つて着々と成果を收めつゝあり、農業發達のバロメーターとも稱すべき農用發動機及び電動機數も年々著しく増加し、農業形態の高度化に向つて躍進してゐる。

農用發動機及び電動機數

昭和七年 七三台

昭和八年 八〇台

昭和九年 八三台

昭和十年 不明

昭和十一年 一四五台

ロ、十二ヶ郷用水組合

(27)

総社町の農業を語る者誰一人として水利の便よく如何なる早魃時と雖も満々たる灌溉用水兩岸に溢るゝ此の恩恵を忘るゝ者は居るまい。

而して若し一度出水するとか水が不用な時季には一滴の水も下流に流れない自由にして確固たる用水の統制は地方稀有の理想的方法と稱すべく之れ實に此の十二ヶ郷用水組合に依て管理せらるゝ完全なる樋、完備せる十二ヶ郷用水路の賜であると揚言し得るのである。総社地方の土地の豊穰なるは全く此の自由にして豊富なる灌溉用水に負ふ所のもの多大であると言へよう。

服部、眞壁、三輪、八田部、三須、服部、庄内、加茂、庭瀬、撫川、庄、妹尾の十二ヶ郷、総社町外十五ヶ町村に亘る廣大なる地域を培ふ十二ヶ郷用水路は人皇第八十一代安徳天皇の壽永年間妹尾兼康が奉行福井次郎左衛門に命じて堰を作らせ用水溝を掘鑿させたに始まるもので八田部、即ち総社町は其の樋元に最も近い場所に位して凡ゆる点に於て、其の有する全部の長所と恩恵を満喫してゐるのである。現在湛井堰尻の井神社には罔象女命、水分神と共に妹尾兼康の靈を祀り永く其の徳を後世に傳へて

ゐる。十二ヶ郷用水組合の事務所は湛井にあり、町村制に依る組合にして毎年六月十五日初堰祭を執行するを例とする。尙現在役員は左の如くである。

管理者	庄 村長	内田善介
常設委員	服部村長	倉森治平
収入役		安延轍二
書 記		佐野龜治

其他各郷より選出の組合議員二十四名あり、総社町側議員は

間野文四郎。間野規矩太。仙石佐吉。山崎幸三良の四名である。

ハ、旭果物出荷組合

旭果物出荷組合は総社町小寺に事務所を置き昭和十年八月一日に設立されたもので前は丸総果物出荷組合と稱してゐたが、組織を改め組合員の統制を固り、品種を改良し、強固なる團結を以て業界の發展を期する目的を以て前者の様に改名組織變更されたもので責任ある総社町生産果物出荷は総て此の組合の手を経てゐるといふも過言で

(30)

はない。現在組合長は赤木盛一氏である。

二、總社町養蚕實行組合

事務所を町役場内に置き吉備郡養蚕組合指導の下に

一、桑園の實態調査

二、荒廢桑園の整理改善

三、涼霜害豫防施設

四、産繭の共同販賣又は共同出荷

五、諸材料の共同購入

等々の目的を達成すべく關係農家と力強く手を握り着々と實績を挙げ、農村指導の役割を果たしてゐる。

ホ、總社町農會

總社町農會は現在一三五〇名の會員を有し地方農業の指導、改良を圖る目的を以て諸種の事業又は獎勵を行つてゐる。主なるものを擧ぐれば

一、有益事業の調査、獎勵

二、農家組合の指導、獎勵

三、農業經營改善指導

四、種苗改良、作物試験

五、病虫害防除相談或は農事研究指導

六、各種原苗購買販賣の斡旋

七、農村經濟更生の指導

等々農業方面の實際的指導者としての仕事に俟つべきものが非常に多い。

役員及職員

本會の役員及職員は左の通りである。

一、會長 安原 靜 雄

一、副會長 吉井市太郎

一、技手 池上喜政

一、書記 深見元一

一、評議員 十名

(31)

へ、吉備郡農會

吉備郡農會の事務所は舊郡役所建物を利用する各種団体事務所の中にあり、縣農會或は各種關係聯合會と手を握り、地方町村農會を指導し、資本主義的機構の農村に及ぼす悪弊の芟除に務め今日農村指導に眞に實力を有し、積極的に動きつゝあるのが郡農會の姿である。

小麦の増殖奨励、共同販賣或は自給肥料の奨励に其の收めつゝある收獲は非常に莫大なるものであり、今後農村更生には郡農會の指導に俟つべきもの多大であり、其の方法、具体的活動の現れの中には將來の農村の歩むべき幾多の暗示を含んでゐる。事業項目は農事全般に亘る主なるものを列擧すれば

- 一、講習講話の開催
- 二、有益事業の調査
- 三、園藝研究
- 四、農業經營の改善指導

- 五、病虫害防除相談所の開設
- 六、農村經濟更生指導
- 七、作物試験
- 八、購買販賣の斡旋
- 九、農事研究會
- 一〇、農家組合の奨励
- 一一、種苗改良
- 一二、自給肥料改良増産 等々
- 四、總社町の商業

職業別状態よりおして農業に次いで其の戸數人口に於て第二位に推さるべきものは商業である。由來、總社町は地勢上より見て豊穰なる備中平野の中心地であり、一方高梁川の流れは北部山村の物資を運ぶに便利な所から最も適當なる商業地として發展して來た。殊に、近時交通、通信の便急速に拓け、近接都市或は諸町村との距離が時



【部一ノ通町本】

は大阪市場、兵庫を中心には、下關、萩方面に向つて伸び、殊に當地方の真産、花菱、疊表等の如き特産品の移出著しく、阪神地方、關東地方を中心に北陸、奥羽は無

論の事、遠く北海道、台灣、朝鮮方面への進出は眞に目覺ましいものがあり、數量年二万個以上に及び総額は裕に四、五十万圓を突破すると謂はれ、尙素麵類に於ても日本内地は言ふに及ばず、遙か滿洲國方面にまで進出する活況は、蘭生品と同様、姫井織物工場の綿布と共に総社町商業のため万丈の氣を吐くものといつてよからう。其他酒、醬油、繭等の如きものも相當の産額に上り、最近特に賣藥の進出も活目に價するものがある。蘭生品の原料である蘭草の産額も年々増加の傾向を辿り、生産額は年三万圓から五万圓に達するといふ。かくして、農村を母体とする之等原料の増加と副業の主業化並に農業形態の多角形的傾向と相俟つて総社町の商業は愈々活況を呈し従つて縣下稀に見る大商人も漸次輩出する氣運にある。之を一言にしていふならば、岡山倉敷の發展並に之を結ぶ交通機關の完備は総社町の産業を非常に刺激する事となり、一方特産品原料の増加と地勢的優位に併せて前記の副業の主業化、農業形態の多角的傾向は総社町商業の將來に多大の期待を持たしめるのである。今東西兩驛を通じての縣外移出物産の主なるものの概畧を列記すれば

米、	三〇万圓
麥、	三〇万圓
素麵類、	五万圓
蘭生品、	二万圓
果物、	七千圓

此の外移入品の主なるものとして肥料の三十五万圓がある。之は縣外取引、而も東西兩驛を通じた取引の概畧であるが、此の中には縣内取引並に宇野、彦崎を通ずる航路に依る移出入が含まれてゐないので之等を合すれば總社町の商取引は相當莫大な數字に上る事がわかり、其の全貌が想像し得るであらう。尙町商工業の機關としては總社商工會があり、商工業の發展に務め、各種事業、催物の指導、獎勵、各種賣出の主催等其の機能を十分に發揮しつゝある。

五、總社町の工業

從來總社町は農村を母体とする商業街として發展して來たがために工業は微々とし

て振はなかつたが近年に至り織物工場としての姫井工場の出現あり、近くは郡是工場の一部、乾繭場も建設され且又各種の家内工業が漸次近代的工業としての色彩を帯びて來、其他關係會社も次第に増加の傾向を示すに及んで地方の近代的産業街としての華々しい進出を期待せられてゐる。

工業生産物としては、姫井織物工場の綿織物を先頭に、各方面に及んでゐるが、就中廣巾綿織物を主として雲齊、小倉地、帆布等々の生産額の如きは六〇万圓を遙かに突破するといはれ、素麵の類も生産額十數万圓に及ぶといふ。疊表、莫蔭、花蔭の類も未だ家内工業の範圍を出でないが最近自動製蔭機等の發明に依り、生産の高度化に向つて進みつゝある。之等の製造戸數約四百戸に上り、年額十萬圓以上に達するといはれ農家の主なる副業となつてゐる。其他飲料水、醬油、加工用材、木製品、氷等各々二萬圓前後の生産高にして網並に編網機の生産高も略々二萬圓といはれ、尾道、堺、下關、上海方面に迄進出しつゝある現状である。

尙姫井合名會社總社工場は、大正十三年の創立にして、資本金七十萬圓全額拂込にし

て一六〇台の大巾鉄製力織機と一四五人の職工數を有する近代的工場である。更に素麴類は池上菊藏氏の一手販賣になるといつてよい。

賣藥の製造及歴史

更に今一ツ見逃す事の出来ないのは総社地方を中心とする所の賣藥の製造である。昔は封建的な家内工業に過ぎなかつたが現在では岡山縣賣藥會社、第一製劑會社、キング會社、ゼニス會社、備中、山陽、中國各賣藥會社に統一せられ販路は關西を主として其の販賣高も百三十万圓の多額に達し、免許方數も二千方台に及ぶ有様にて目覺しい躍進を遂げてゐる。尙最も注目すべき一事は、日本於ける賣藥の創始者は實に我が岡山縣人である万代常閑先生であり、富山の反魂丹も十一代万代常閑先生が富山藩主前田侯の需めに應じ製法を傳授し、松井屋源エ門をして諸國を行商せしめたのが濫觴にして、我が岡山縣の賣藥の歴史は九世常閑の時備前の宰相侯の本陣に召され反魂丹を調合献上し、之を領内に頒ちたるに始まり、爾來、全國に誇るべき優秀な製劑は光輝ある歴史と共に本縣重要な生産物の一つとなり、而も現今ではその殆んど八割

を総社地方にて占めるの盛況である。

第四章 金融機關

本町は吉備郡の首都と謂はる、だけに常に郡治の中心となり、嘗ては幾多の銀行の支店、出張所等があつたが、歐洲戰爭以後の經濟界の變動、或は經濟危機の増大に依る本店の合併に伴つて、漸次影をひそめ、現在では銀行支店としては中國銀行支店、合同貯蓄銀行支店の二行が燦として輝いてゐるのみである。然し、何れも信用ある大銀行の支店にして、貯蓄銀行と普通銀行との性質上利用者は大体に於て色別けせられてゐるが、中國銀行は主として商人を顧客として、或は縣金庫として、貸出、預金の兩方面に伸びて華々しい營業を續け、地方産業の開發或は助長に貢献する所偉大なるものあり、商工業者の燈臺として巨大なる觸手を延ばしてゐる。之に引かへ、合同貯蓄銀行は如何なる零細な金額に對しても細心の注意を怠らず、地方人の貯蓄心を刺戟し、機會ある毎に勤儉を獎勵し、主として預金營業に眼目を置き、地方金融機關として、利用者に家庭的な親しみを與へてゐる。共に其の特色を發揮して總社町發展のた

(40)

めには缺く事の出来ない心臓部である。

有限責任總社信用販賣購買利用組合

總社信用販賣購買組合は大正八年三月の創立にして資本金は四万三百五十圓である創立當時の組合員は僅か二百四十人に過ぎなかつたが、幾度かの波瀾に堪え得て今日の信用組合を築き上げた底力と一般民衆の組合に對する理解とで今日では組合員は七百九十五人となり、創立當時に比較すれば三倍以上となつてゐる。金融機關としての組合は他の銀行等に比較するならば全然独自の立場を有し、普通の銀行營業が信用と金とで成立してゐるに反し、組合はそれに生産物が加はる。従つて農家の利用が多く農村經濟に言ひ知れぬ貢献をなしてゐるのである。今其の業績を一瞥するに、

組合員貯金	八一、七三七 <small>六四</small>
家族貯金	三八、〇七五・七三
團體貯金	六、〇〇四・九八

計

一二五、八一八三三五

尙貸付金は十萬四千百一十一圓八十六錢にして如何に組合員の利用に役立つてゐるか、知れるのである。此の組合の順調なる發展は總社町へ大きな足跡を残すものとして期待せられてゐるのである。

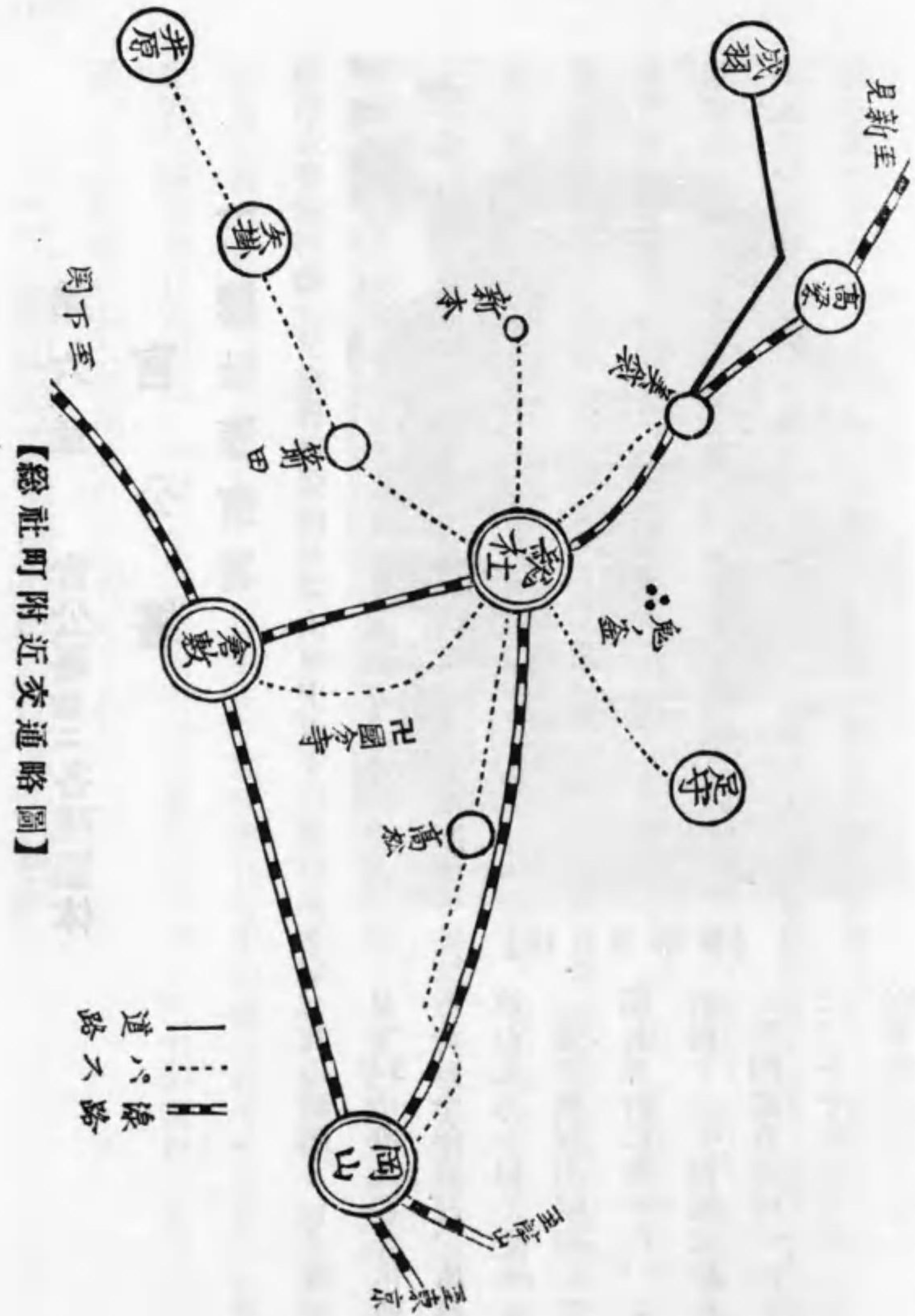
第五章 交通、運輸、其他

一般交通の根幹となす道路は町の角々に至る迄四通發達し、總社倉敷線、總社玉島港線、總社停車場線、足守總社線、上竹莊總社線、美川總社線、倉敷高梁線、箭田總社線、下竹庄總社線等々凡て總社町を中心に、或は之を通過して延々として縣下交通の幹線をなしてゐる。又鉄道は前掲の通り、中國鐵道が町の北部を東西に通じて岡山驛を介して作洲津山に至り姫津線と接続し、尙西部は伯備線が西總社驛を通じて、倉敷を起点として山陰方面に向つて走り陰陽連絡の幹線をなす。而して附近町村にしてバス乃至自動車便の通じない所は皆無である。即ち、總社、岡山間を結ぶ山陽自動車

(41)

(42) 株式會社は大型流線型の定期自動車を一時間置きに運轉して居り、總社、井原間、總社、岡山間を結ぶ富士自動車會社のバスが颯爽として走り、其の間を縫うて總社、倉敷間、總社、新本間を安原自動車商會のバスが客を満載して終日運轉すれば一方又總社足守間を結ぶ足守自動車會社のバスが白銀色の伊達姿を現はし、バスガールの叫び聲も忙し氣である。かくして、總社町の本通りは自動車、バス、トラクタ、自轉車、馬車が入り乱れて織るが如く般賑の極みである。又高梁川の流れも奥地の物資を運ぶに利用されてゐる。今昭和九年末の諸車の狀況を調査するに、自轉車、一二、九三七台、人力車、一九台、荷車、五〇三台、荷牛馬車、一七三台、にして、人力車、荷牛馬車は自動車、バス、トラクタ等々の交通機關の發達に押されて年々減少の傾向にある。以上の通り、交通機關が完備し、各地への道路が完成してゐる事は本町の誇りにして名勝、舊蹟は殆んど自動車の便があり、近年西總社驛、東總社驛では之等の交通機關を極度に利用し此の名勝舊蹟を廣く天下に紹介するため記念スタンプを備へ付ける等親切に相談に應じてゐる。尙總社、川西を結ぶ常盤橋は縣下第二の長橋である。

(43)

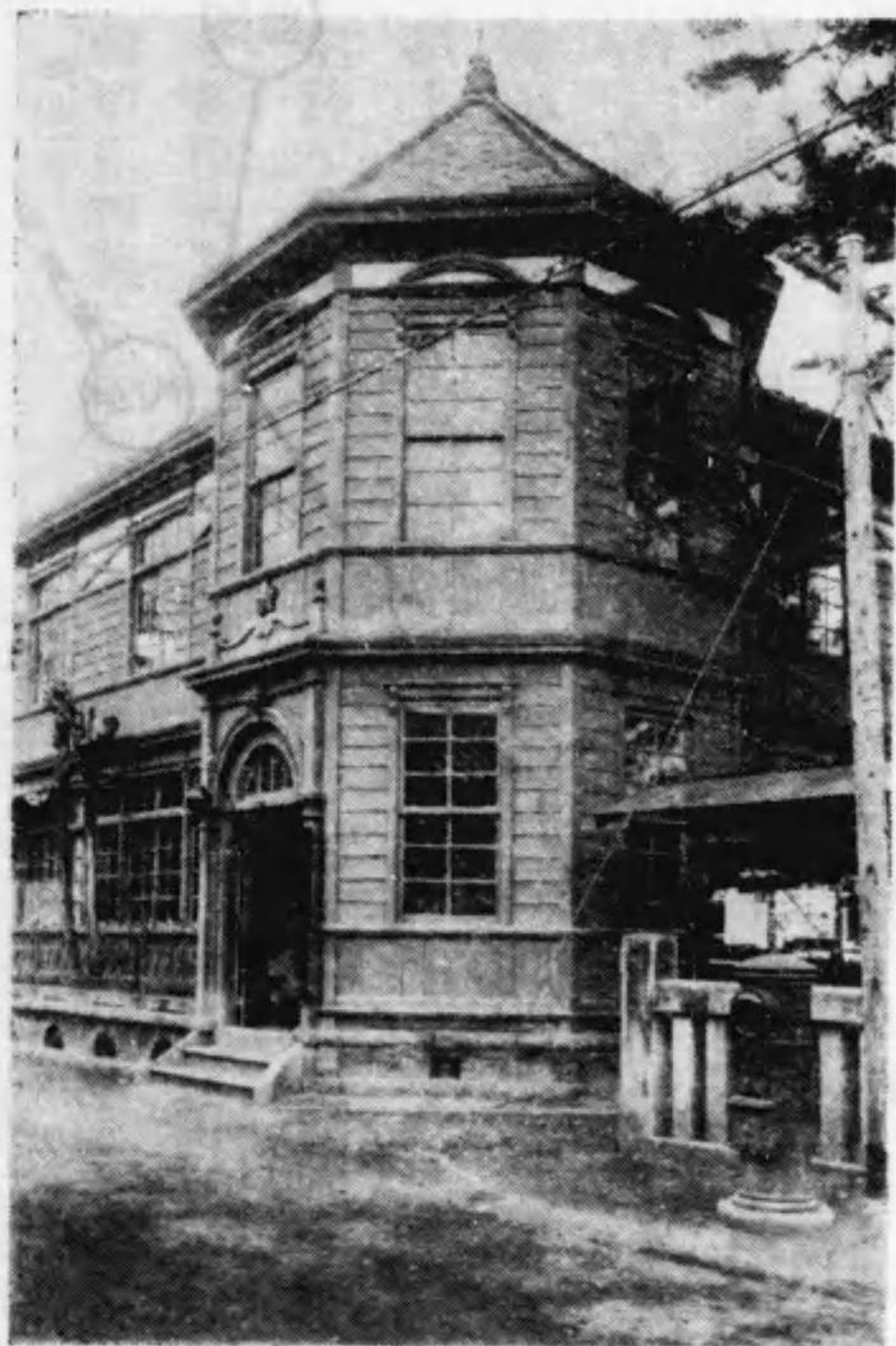


【總社町附近交通略圖】

第六章 官公署並ニ各種團體

官公署

一、總社警察署



【總社警察署】

明治九年六月第一警察署出張所が岡山東中山下に置かるゝや、其の所屬として賀陽郡足守村に第八巡查屯所が置かれ全年九月、本縣甲第九号を以て更めて第二部警察署出張所が窪屋郡倉敷村に置かれ、その所屬として賀陽郡總社村に第四巡查屯所が置かれた。全十年二月第二部警察署出張所を改めて倉敷

警察署となすと同時に從來の屯所を廢し、總社分署が設置された。越えて、明治十九年五月、警察區制の改正あり、賀陽郡には岡山警察署眞金分署を置き、全郡の大部分、都宇郡一圓、津高郡及び兒島郡の一部を所屬となし、撫川、總社、足守、早島の各交番所が設置せられ、明治三十三年四月、改めて吉備郡となり(賀陽、下道兩郡合併)總社警察署を置いて全郡一圓を管轄しその所屬として岡田村に岡田分署を置き南部十四ヶ村を直管し、北部二町十六ヶ村は本署の直轄となつてゐた。明治四十三年三月、便誼上眞金にあつた本署を總社町に移し四月一日より事業が開始されると同時に岡田分署は廢止された。大正十五年六月、庭瀬町を倉敷署管内に移すと共に都窪郡加茂、三須、山手、常盤の諸村を總社署へ移管され、大正十五年には管谷村を金川署へ移管すると同時に清音村を編入して今日に至つてゐる。初代署長は中山義通氏で十八代の各署長を経て現署長は西田義一警部である。尙現在は署長以下四十三名の署員が晝夜民衆保護、治安維持の爲に盡瘁されてゐるのである。

二、岡山地方專賣局總社煙草販賣所

総社煙草販賣所は昭和六年七月一日從來の煙草元賣捌制度を廢し政府直營となすと同時に開設せられたもので、販賣區域は吉備、都窪の兩郡に亘り、實に二十五ヶ町村の廣大なる區域に及ぶ。

昭和十年度煙草賣渡代金は十九万一千六百七十二圓の高額に達し、管轄區内煙草小賣総人員二〇七名にして、其の中、総社町内煙草小賣人數は三十三名、煙草買受代金は四万四千八百八十七圓である。

所長は河野薫氏で販賣所の開設と同時に着任せられ、専心販賣の研究に没頭せられ専賣事業の發展と相俟つて、非常な効果を收められつゝあり。其の營業成績は局内に於いても屈指の中に入つてゐるのである。尙煙草小賣人組合を設け、斯業の發展を圖りつゝあるが現在の組合長は井頭康男氏である。

三、岡山區裁判所總社出張所

當廳は、昭和五年一月十日司法省令第二号を以て岡山區裁判所足守出張所管轄中、吉備郡の中、総社町、高松町、生石村、服部村、池田村を、全日司法省令第三号を以

て玉島區裁判所倉敷出張所管轄中、都窪郡の内、清音村、常盤村、山手村、三須村及び玉島區裁判所備前出張所管轄中、吉備郡の内、秦村、久代村、神在村、を當所管轄と定められ全日司法省令第二号を以て全年一月十五日より開廳せられたものである。従つて當所管轄區域は以上の十二ヶ町村に及び専ら登記事務に當つてゐる。現所長は毛利猛氏の後を受けて前田時一郎氏が昭和十年四月一日着任、現在に及んでゐる。

四、吉備郡内各種團體事務所

総社町北浦にある各種團體事務所内には二十に近い各種團體の事務所が置かれてあり郡役所なき今日と雖も依然として郡治の中心をなしてゐる。

一、吉備郡農會事務所

産業の項にて記述せる通りにして農村指導の最高峰として郡内各町村農會を指導し連絡に務め關係各町村に二十九名の技術員を駐在せしめて目的の達成に務めてゐる。

二、岡山縣穀物検査所總社支所



【吉備郡内各團體事務所】

郡役所存立時代は其の中の一課として存在せしも郡役所の廢止に伴ひ、大正十三年四月に開設せられたもので、吉備郡全部と都窪郡山北の五ヶ村を以て管轄區域とし専ら、米、小麦の検査事務に當つてゐる。尙生産検査員四十三名、輸出検査員七名の役員があり、所長は仁木純一、河本尅、の諸氏を經て現所長平松茂樹氏に至つて居る。

産業組合
岡山縣支會吉備郡部會

大正十二年十二月七日の設立に係り、其の中に二十九組合を包轄して、産業組合の指導、獎勵、連絡に移つてゐる。

四、吉備郡畜産組合

吉備郡畜産組合は明治四十二年三月の設立にして、現在の組合員は五千人に達すといはれてゐる。現在各種事業をなしつつ、あるも其の主たるものを列挙すれば

- イ、畜産状況の調査、統計
 - ロ、家畜市場の開設
 - ハ、共進會、品評會、又は講習會の開催
 - ニ、種牡牛の獎勵、種付の獎勵
 - ホ、厩舎改築獎勵
 - ヘ、技術員を派遣し、家畜の診断、削蹄の無料施行、等々
- 尙昭和十年度末現左組合員の種類別、職業別總數左の如し

組合員種別	農	工	商	其他	計
-------	---	---	---	----	---

牛生産者	二七四三	一〇	六八	二八二一
牛飼養者	一四八一	一九	七一	一五七一
馬飼養者	二一〇		一八	二二八
計	四四三四	二九	一五七	四六二〇

五、吉備郡家畜保險組合

昭和六年九月の設立に係り、家畜保険の普及發達に務め、現在の加入頭数は一千五十頭の多きに達してゐる。

六、吉備郡養蚕組合

本組合は最初養蚕組合聯合會と稱する申合組合として誕生せしものであるが昭和六年蚕糸業組合法に依り組織が變更せられ、吉備郡養蚕組合と稱する法人組合となり、各町村養蚕實行組合を指導してゐる。

其他

七、岡山縣信用組合聯合會吉備郡支部

八、岡山縣購買販賣組合聯合會總社支所

九、吉備郡煙草耕作聯合組合

一〇、吉備郡蕃椒出荷組合

一一、在郷軍人會吉備郡聯合分會

一二、岡山縣山林會吉備支部

一三、岡山縣森林砂防歴史總社駐在所

一四、吉備郡牛馬商組合

一五、岡山縣倉敷土木出張所總社駐在所

一六、吉備郡町村長會

一七、吉備郡町村吏員自治會

一八、吉備郡統計研究會

一九、吉備郡兵事研究會（總社警察署管轄内）

二〇、岡山縣國防義會吉備支部

等々の事務所が置かれ、之等の各種団体は郡内の産業、自治、其他各方面に接觸を持ちつゝ、地方開發の爲に大きな役割を果してゐる。

五、總社郵便局

總社郵便局は明治六年二月十五日集配事務を始めて總社の土地で開始し、明治三十年四月一日より和文電報の取扱ひを開始し、全四十三年一月二十一日には電話事務並に特設電話交換事務、全四十三年四月一日には歐文電報の取扱ひを始めた。現在の郵便區域は、總社町一圓、服部村、常盤村、山手村、三須村にして、電信回數三回線、電話回數九回線、電話加入者數は二百十三名である。最一ヶ年間の通信其他の狀況を觀るに、

通常小包郵便 引受 一二五三五〇〇通
配達 一三五二四〇〇通

小包郵便物 引受 一三六七三
配達 二五九三六

郵便爲替 發行 一五五、九二一、三八〇
支拂 一四〇、一六二、七二〇

電話通話數 六八三、四九〇

保險契約受持 四、〇七四件

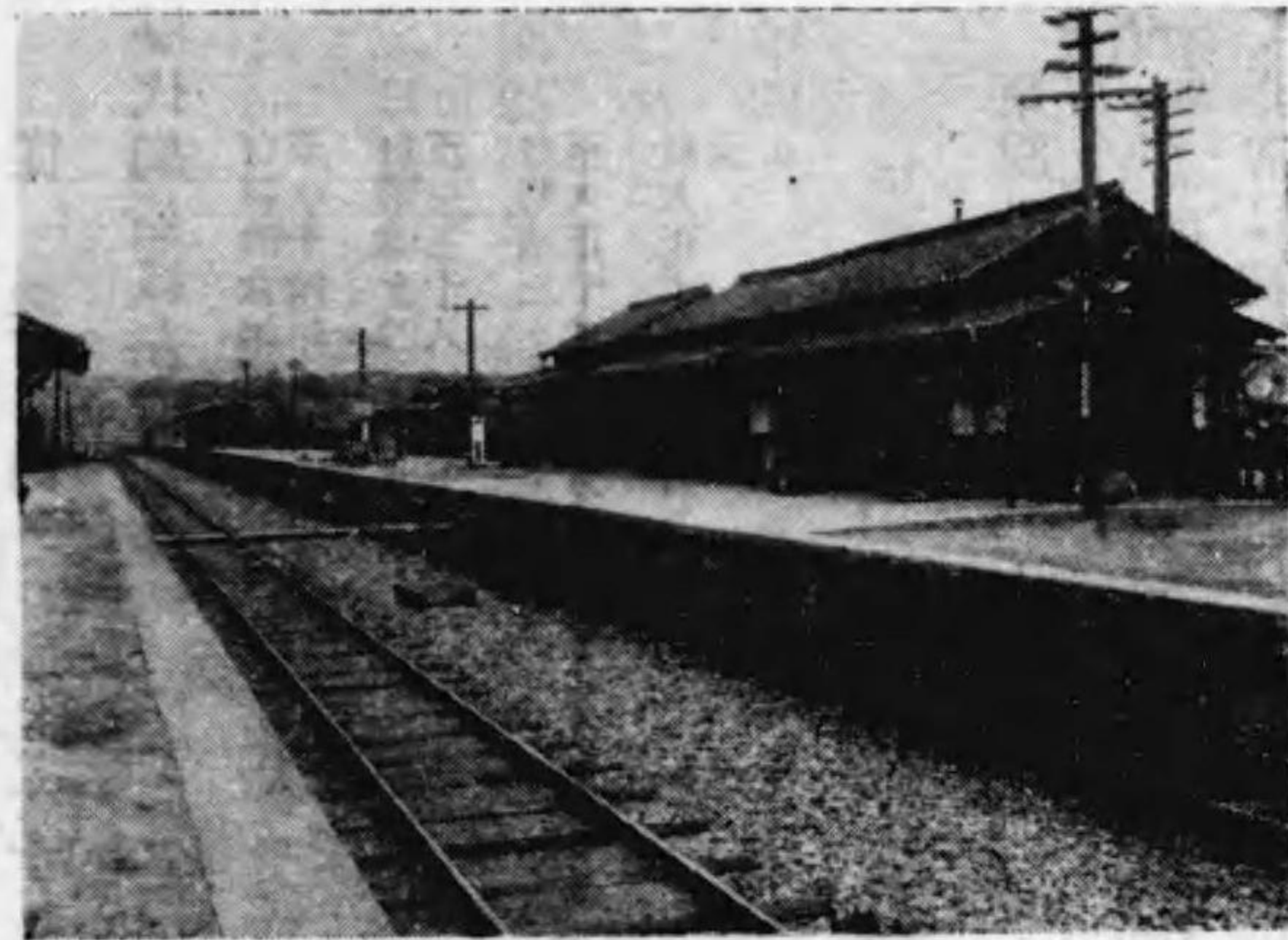
從業員 二十八人

歴代局長は左の如し

自明治六年二月十五日 至全十四年八月十六日	大森壽夫
自明治十四年八月十六日 至全三十八年九月二日	堺和守夫
自明治三十八年九月二日 至大正十二年二月二十日	中川梅太郎
自大正十二年二月二十日 至 現 在	池上博平

六、中國線東總社驛

東總社驛は明治三十七年十一月十五日中國線が満井驛迄完成せられると同時に設置せられたもので當時は總社、岡山間は無論の事、上方へ上る所の唯一の交通機關として非常な殷盛を極めたものであるが岡山、總社間の定期バス、或は伯備線の開通と全



【驛社總西線備伯】

時に西總社驛の設置を見、乗客は著るしく減少し、只米、麥、肥料等の輸出入驛として又は學生、官吏、會社員の通勤列車としての存在に過ぎなかつたが、最近山陽バスを運轉し傍係會社として協調に務める一方、津山―姫路間を結ぶ姫津線の開通に伴つて昔の繁榮を見る日も遠くあるまいと期待せられてゐる。

伯備線西總社驛

伯備線西總社驛は大正十四年二月、倉敷―粟間の第一期工事の完成と同時に設置せられたもので總社町西の玄關口である。昭和十年度中

乗客數、一七四、一八〇人 降客數、一七五、一九四人

貨物發送 八、〇六五ト 到着貨物 七、六九三ト

に於ける旅客、貨物の状態は、
旅客運賃收入 五五、〇二六四三錢

貨物收入 三万七千七百八十六圓

である。

各種團體

一、總社消防組

總社町に公設消防組が設けられたのは實に明治四十三年であつて、それ以前は親睦社と稱し各部落毎に一名の社長をおき、消防、防火、非警常備の任に務めてゐた。現在では組頭一名、副組頭三名の統制の下に、全町を十七部に分ち、部長十七名、小頭六十三名、工師一名、組員實に七百二十五名にして、機具は、ガソリンポンプ九台、腕用手押ポンプ一七台にして、形式、内容共に地方屈指の消防組としての偉客を備へてゐる。かくて大正五年十一月二十日には岡山縣警察部長より感狀を贈られ、全十一年三月五日には名譽ある眞紅の表彰旗を授與せられて一段と光彩を放ち、昭和十一年三月十九日には本町消防組創立以來の組頭山崎幸三良氏が内務大臣より表彰を受け、

(56)

歴史ある本町消防組に更に光輝を加へ燦として輝いてゐる。全氏は又消防協會、消防義會の役員の職にあり、又副組頭として全氏を補佐し本町消防組の今日あるを得せしめた江口陸藏氏は在職大正元年より現在の永きに及んでゐる。

本町消防組は創立當初より毎年舊正月の休日を利用して初出式を舉行し、機具の點檢、放火競走、消火競走等々傳統的な威勢のいゝ所を見せ見物人も多數詰めかけ盛會を極めてゐたが近年では國內、國外狀勢の變化に適應して、率先して、單なる放水競走、消火競走のみに止らず、種々な非常時を假想して、防空演習を行ふ等團体的行動の訓練に務め、武器を持たない軍隊、捕繩を持たない警察としての訓練をなす等非常な効果を收めつゝあり、警備費等も二千圓に及んでゐる。

現組頭 山崎幸三良 (創立當初ヨリ現在ニ及ブ)

現副組頭 江口陸藏 (大正元年ヨリ現在ニ及ブ)

全 小西壽男

全 石田國鹿治

二、帝國在郷軍人會總社町分會

帝國在郷軍人會總社町分會の創立或は其の後の沿革の詳細は不明であるが明治四十四年三月十月、帝國在郷軍人會規約の發布と同時に創立せられたといはれ聖旨を奉戴して軍人精神を鍛練し、軍事能力を増進するを以て本旨とし延いては社會の公益を圖り、風教を振作し、恒に國家の干城國民の中堅たるの實を擧ぐるを以て目的とし、常に率先して此の目的遂行のために各種事業を行つてゐる。

特に滿洲、上海兩事變突發に際してはいち早く銃後の任務の遂行に當り、又昭和八年二月には分會の指導、斡旋の下に國防義會を結成して國民皆兵の實を擧げ、尙昭和八年二月、故陸軍歩兵中尉池上秀夫君が古北口の華と散るや直ちに建碑委員會の中心となつて各種團體に働きかけるなど消防組、青年團、婦人會等と連絡を取り着々と目的に向つて進んでゐる。現在、正會員は三百三十名にして

現分會長 野砲兵少尉 池上末吉

副 長 工兵少尉 藤田德二郎 歩兵伍長 石田國鹿治

(57)

三、總社町青年團

總社町青年團の濫觴は消防組と同じく、吉備郡が尙賀陽郡と呼ばれてゐた當時親睦社と稱するものが官廳の徳憑に依つて出來たが何等統制されたものではなく窪屋郡では清風社と稱せられてゐた様な有様であつて、總社町に於いても各町村内に親睦社が出來たが一般には世話方と謂はれて夏祭に神燈を献じ、千歳樂を擔いで暴れ廻り、火事に飛んで行く位のもので寧ろ一般からは敬遠せられてゐた様な状態であつた。然し諸外國との往來が繁くなるに従つて西洋文化の影響を受けて非常な注意が拂はれる様になり、全國的にも漸次青年團としての形を備へて來て明治三十年には免も角修養本位のものとして出現した。かくして當局者に於いても種々青年團の發展策が考究せられ、當時本郡長なりし草加康男氏は最も熱心に向上、發展を圖られ、各郡に魁して慶地嶺に於て第一回郡青年聯合大會を開催せられた。之等四圍の事情に刺戟を受け遂に明治四十四年、時の總社校長柳田靜一氏の奔走に依り成立を見たもので各月に亘つて役員會を開いた。その後幾度かの盛衰の時日を経過して青年團今日あるを見るわけで

あるが先輩の苦心は美事に實を結び現在では各種團體の中で最も活潑な活動を続け、會員も三百名に達し、全町を二十部に分割、各部に部長一名を置き緊密な連絡の下に着々と事業を遂行してゐる。時計塔の建設、國旗掲揚台の寄贈等は其の事業の一部であり講習會、講演會、一夜鍛練講習會等を隨時開いて團員の修養に務め、又各種補助金を出して各部の施設、經營の助成、指導をなしてゐる。昭和十年五月には岡山縣聯合青年團長より施設、經營の宜しきを得成績優良なる故を以て表彰せられた。役員は

現團長 伴 史 朗

副團長 森 田 俊 夫

石 田 君 夫

四、總社婦人會

本町婦人會は明治三十六年八木美作夫氏知新高等小學校在職當時主唱して吉備婦人

(60)

會を作り、會員は總社、淺尾、常盤、清音、三須、山手、服部の數ヶ町村に亘つてゐたが暫時にして衰運に傾き、四十四年六月、柳田靜一、草加様子、駒井虎太諸氏の盡力に依つて内容を改め再び活動状態に入つてゐたが又々中絶の止むなきに至り、後大正十一年春、龜川鴻基氏新に別個の婦人會を企圖されたが當時隅々吉備婦人會の復興が策せられてゐた時であり兩者協議の結果舊會員を中心として再組織することとなり名稱も總社婦人會と改め大正十二年一月六日は盛大なる創立總會を當時の春鷺高等女學校の講堂に開いた。當時會員は三百余名にして間もなく四百名近き會員を有する有力なる団体となつたが數年後には又々退會者相次ぐ状態となつたので全町の婦人を以て會員とし大いに會の發展を圖るべく努力した結果目下は會員八百名に激増した。事業としては、兒童健康相談所を開設し或は優良兒童の表彰を行ふ等兒童に温い慈愛の手をさし延べると共に御大典紀念事業として御眞影奉安殿を建設し、各種義捐金を募集する外名士の講演、講習會に依り精神を修養し、或は家事、育兒一般の研究を行ひ婦人として、母としての修養に移めてゐるのである。

役員

創立當時は幹事制にして、顧問及幹事、各部落毎に地方委員が置かれた。

當時の顧問

- | | |
|------|-------|
| 郡長 | 寺坂頼甫 |
| 春鷺校長 | 田野口竹二 |
| | 龜川鴻基 |
| 町長 | 池上勢平 |
| 小學校長 | 中島嘉一 |

- | | |
|-------|------|
| 初代會長 | 池上淺野 |
| 初代副會長 | 藤田倉 |
| 現會長 | 藤田倉 |
| 現副會長 | 柳本邦子 |
| | 中島靜子 |

(61)

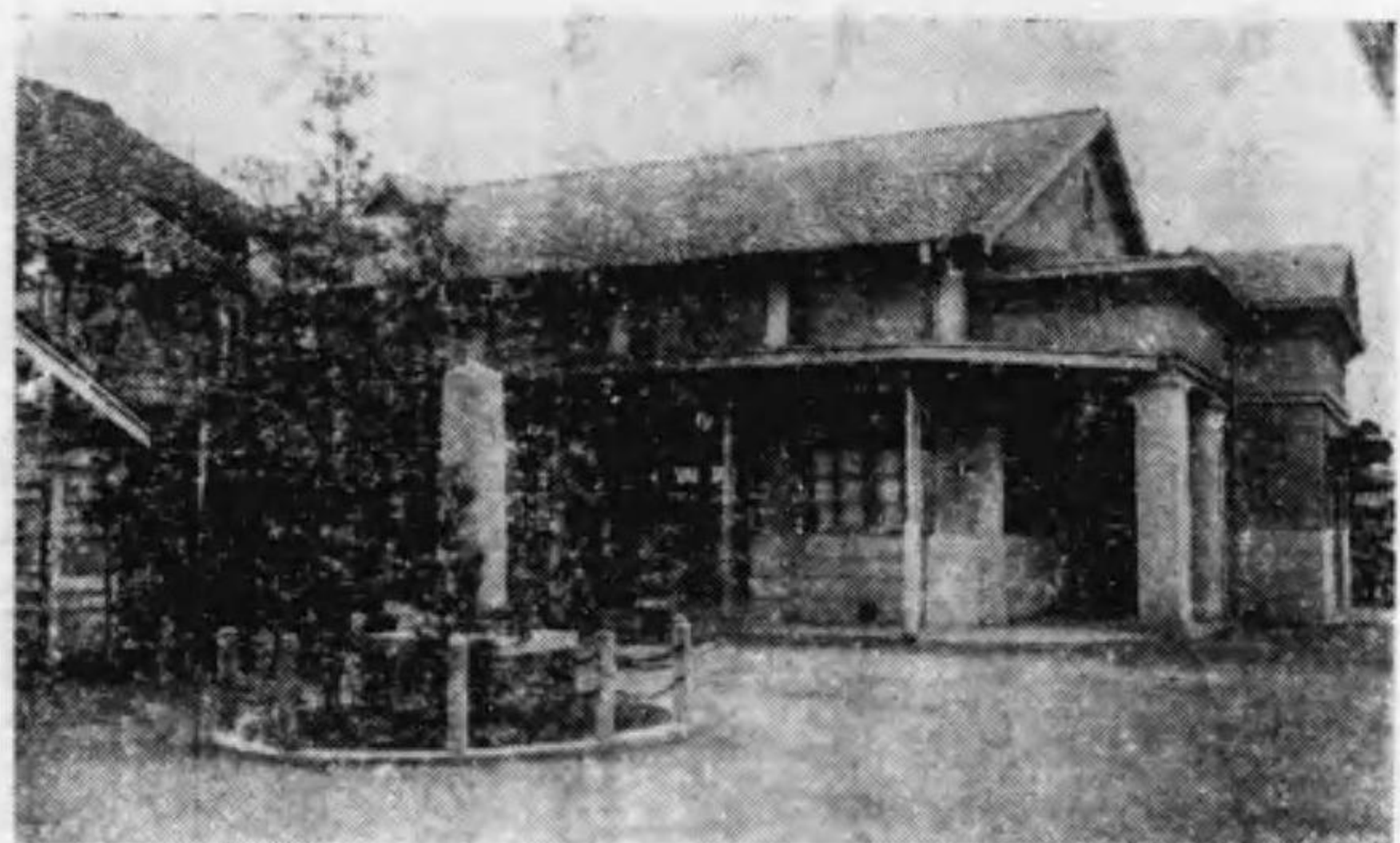
五、總社町女子青年團

総社町女子青年團は大正十三年五月二十日、総社處女會として総社小學校に於て發會式が舉行せられたのであるが昭和三年五月、総社町女子青年團と改稱し當町内居住の女子にして満十五才より満二十五才までの者を義務的に入團せしめ、春秋二期には總會を開き、講習會、講演會を催し、或は見學旅行に赴いて見聞を廣める等青年女子の資性向上に務める一方、農繁托兒所を開設し、出征軍人並に遺族の慰問をなす等機會ある毎に各種事業を行ひ、各區ともよく統制を取りて之を指導し町婦人會、消防組、青年團とも絶えず連絡を保ちつゝ、良き協力者として活躍してゐる。尙昭和十年五月五日には福井支部が岡山縣聯合女子青年團長より成績優良の故を以て表彰せられたが之も本團の指導よろしきを得た賜といへよう。

現團長は初代團長、中島嘉一氏の後を受けて大月於達女氏である。

第七章 教育、社會施設

一、總社尋常高等小學校



【校學小等高常尋社總】

本校は明治四十一年、総社町と淺尾村が合併すると同時に、明治元年に設立せられた淺尾尋常小學校、明治二十年の創立に係る知新高等小學校の三校が合併し、新に本校を大字總社に、分教場を大字井尻野に設置し九月一日より總社尋常高等小學校として開設せられたものである。爾來二十九年間卒業生を出す事、高等科一千九百九十三名、尋常科四千百十五名にして校舎の増築、設備の充實は教育の實績と相俟つて校運日に月に隆盛に赴き、昭和五年十一月十六日陸軍特別大演習の砌、畏くも聖駕を迎へ奉るの光榮に浴し、其の御跡には聖跡紀念碑を建て、由緒を傳へてゐる。

現在生徒數は、男、六三二名、女、五八四名、計一二二六名、職員數は三十一名にして教

(64)

育方針としては

- 1、皇室を尊崇し敬神崇祖の念を篤くし恒に一死以て君國に奉ずるの純忠の精神を練磨すると共に公德を重んじて協同の前には私を滅し隣保相愛感恩奉仕の精神を確立すること。
- 2、知育は素よりなるも德育体育に特に重きを置き學業成績不良兒童及び知能優秀兒童の操行に對し細心の注意を拂ふこと。
- 3、貧困兒童及び學業成績遲進兒童並に病弱兒童に對して絶大の慈愛を以て之が助長救済の誠を致すこと。
- 4、武道教練を重視し質素を尙び剛健を旨とし殊更に困苦欠乏に堪へる修練を積ましめ勤勉力行百難襲ひ來るも莞爾として之に對し醇行にして中正正義を行ふに千萬の敵あるも吾行かんの意氣を持つ明朗性堅實性ある日本道德の實踐者を養成す。
- 5、卒業生の職業指導に遺憾なきを期すると共に社會教育中特に男女青年團の指導に留意す。

6、海外發展に關する教育を重視す。

7、農家組合との連絡を密接ならしむ。

歴代校長及勤続年限左の如し

八ヶ月	垣見秀男
二年九ヶ月	柳田静一
十八年二ヶ月	中島嘉一
自昭和五年五月 至現在	塩飽敏太

二、總社町立總社青年學校

(65)

本校は大正十二年四月、總社町立公民學校を總社尋常高等小學校に併設せるを濫觴とし、大正十五年七月には總社青年訓練所を併設して其の成果見るべきものあり、昭和十年一月には文部省よる奨励金の交付を受け、昭和十年四月、前記公民學校、青年訓練所を廢止し、總社町立青年學校が設立されて現在に至つてゐるが昭和十一年二月

には岡山縣より表彰狀並に賞金を交付せられた。

現在の生徒は男子九二名、女子五四名、計一四六名にして校長は總社尋常高等小學校長之を兼任し、専任教諭長田憲一氏以下十名左記教育方針、訓育方針の下に日夜専念せられてゐる。

一、教育方針

一 教授ノ方針

- 1 教授ハ常ニ生徒ノ心理ニ立脚シ郷土ノ實際ニ即スル様留意ス。
- 2 教授ハ生徒ノ個性ニ立脚シ既習知識ニ基キ研究慾ヲ旺盛ナラシムル様指導ス。
- 3 教授ハ常ニ各科ニ聯絡統合アラシムル様工夫シ之ガ應用體驗ニ導キ實社會ノ活用ニ留意スルコト。
- 4 女子生徒ノ洋裁並茶道花道、家事教育及蔬菜、花卉、栽培指導ニ特ニ重点ヲ置クコト。
- 5 商業科生徒ニ對シテモ簡易農業ヲ實習中心ニ教授シ商人トシテノ資質向上ニ努ム

二 訓育方針

- 1 昭和五年陸軍特別大演習ノ砌大元帥陛下ノ行幸ヲ忝ク致セシ不磨ノ光榮ト當町出身清水宗治公及ビ嚮導隊長故池上秀夫中尉ノ精神ヲ訓育ノ中心トシ常ニ地下千尺ニ埋モルモ國家地方興隆ノ礎石タラントスル大丈夫ノ氣魂ヲ培養スルコトニ努力ス。
- 2 立憲自治ノ公民的訓練ニ努ム。
- 3 海外發展ノ雄志ヲ養ヒ之ガ實行上ノ指導ヲ行フ。

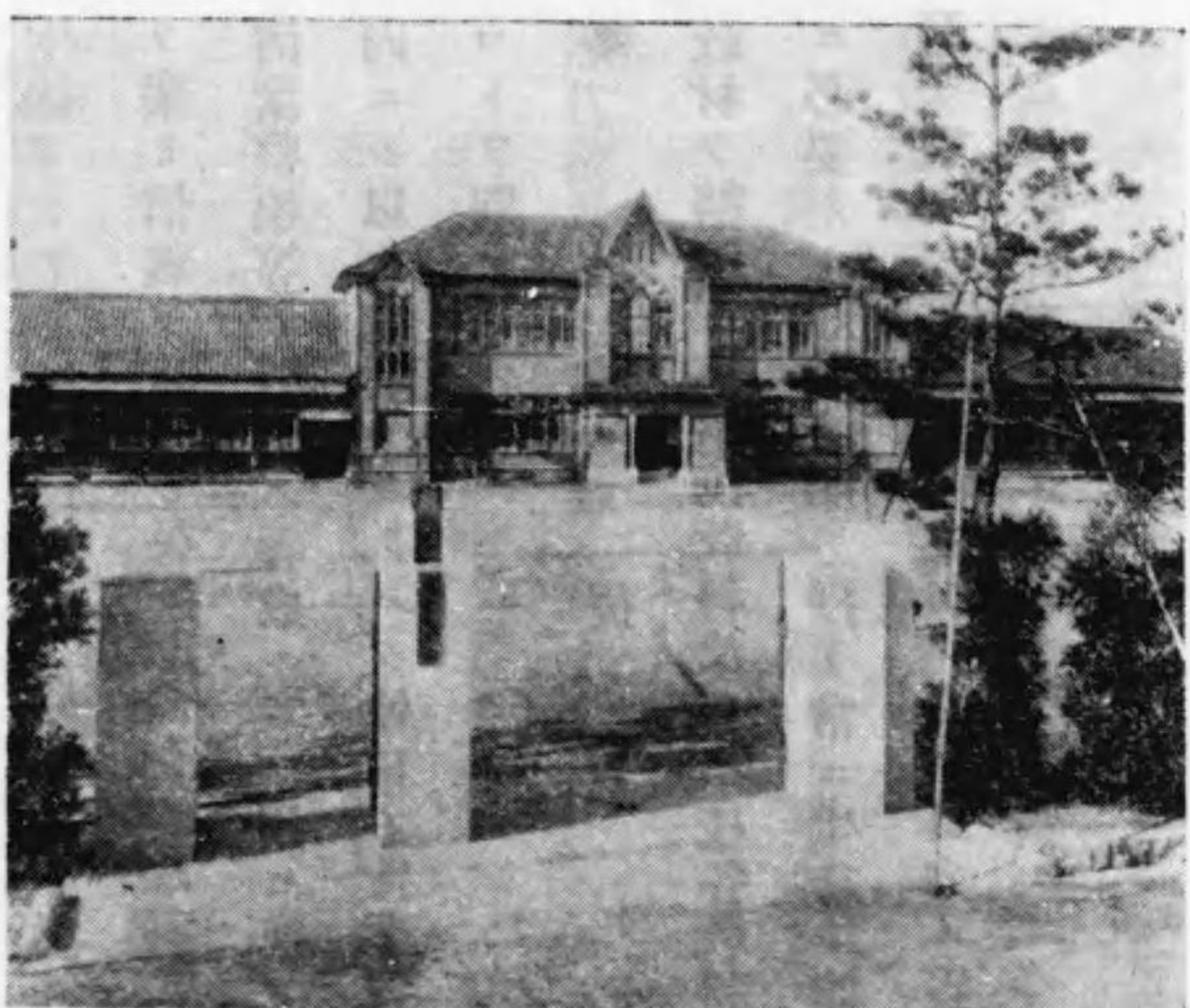
三、總社小學校附設幼稚園

本園は明治二十三年六月總社町、淺尾村學校組合立申義尋常高等小學校附設幼稚園として設立せられたのが前身であるが全四十三年三月廢園せられ同年六月當時の總社町名譽町長なりし前藩主蒔田廣孝子爵に依りて設立せられ當町名譽助役たりし淺野米三郎氏が園長となり私立幼稚園として存在してゐたが大正四年三月を以て再び廢園と

なり、全年五月更に其の後を継ぎ町立認可を得て全年九月に開園、総社小學校長中島嘉一氏園長となり昭和五年全氏の退職と共に後任校長植飽敏太氏園長となり益々發展し終に昭和十年五月堂々たる新園舎を改築落成した。現在の園兒數は百五名にして職員四名熱心に保育に當つてゐる。

四、岡山縣總社高等女學校

本校の前身たる春鷲女學校は横田養一氏の篤志に依り明治二十四年都窪郡常盤村大字中原に創立せられたる春鷲學舎に濫觴し明治三十八年組織を改めて春鷲女學校と改稱し、全四十年學舎を今の總社町に移轉し、大正六年に至る迄地方女子のため普通教育を施したが全年四月より組合立實科高等女學校を設立し、元の春鷲女學校の校舎校具全部を無償にて譲り受け、同年四月愈々開校認可の指令に接し五月一日を以て授業を開始したものである。更に大正八年五月、總社町外十四ヶ町村學校組合立春鷲高等女學校と改稱し本科、實科、補習科を置き大正十二年修業年限を五ヶ年に延長、昭和二



【校學女等高社總縣山岡】

年三月補習科を廢した。終に昭和三年岡山縣へ移管、岡山縣總社高等女學校と改稱し、内容、外觀共に堂々たる女子教育の殿堂として町内外に誇るに足る。現在學級數一〇、生徒數五一一名にして職員は校長を初めとし教諭一七名、書記二名、囑託一名、校醫一名、計二十二名にして左記教育綱領に依り生徒の徳性を涵養し、知能を啓發し、身体を練磨し、溫良貞淑有爲有能の女子を養成すべく専心されてゐる。宜なるかな。年々志望者は増加し、童心に入學を競ふ有様であつて、本校の今日あるは全く田野口校長の久しきに亘る熱と努力に據るといへよう。

教育綱領

一 訓 育

生徒ヲシテ常ニ温良貞淑ノ婦徳ヲ涵養スルコトニ努メシメ輕佻浮華ヲ斥ケテ質實勤勉ヲ樂ミ信義ヲ重ンジ公德ヲ尙ビ特ニ家ヲ齊フルニ必要ナル敬愛秩序節約等ノ諸徳並ニ清潔整頓等ノ習慣ノ養成ニ意ヲ用ヒ進ンデ我國民道德ノ大本タル忠君愛國ノ精神ヲ鞏固ニシ以テ淑女トシテハタ他日ノ良妻賢母トシテノ徳操ニ於テ缺クル所ナカラシメンコトヲ期ス。

二 教 授

教材ヲ精選シ小學校教科及ビ本校各教科ノ聯絡統一ニ留意シ女子ニ適切ニシテ實生活ニ必要ナル知識技能ヲ授ケ常ニ生徒ノ態度ヲ緊張セシメ自學自習ノ精神ニヨリ豫習復習ヲ重ンジ實驗實習ニ努メ以テ實力ノ養成ヲ圖リ且ツ生徒ヲシテ將來自ラ進ンデ研究スルノ習慣ヲ養ハントス。

三 體 育

常ニ衛生ニ注意シ合理的體操ニヨリテ身體ノ均齊圓滿ナル發達ヲ遂ゲシメ競技運動ヲ獎勵シテ四肢軀幹ノ動作ヲ敏活巧緻ナラシムルト共ニ眞ノ運動精神ヲ理解セシメ肉體的並ニ精神的の生活ノ能率ヲ高メントス。

附 現下ノ時局ニ鑑ミ一層健康ニ留意シ學徳ノ修養ニ努メ以テ善良ナル日本婦人タランコトヲ期スベシ。

歴代校長及勤績年數左の如し

自大正六年四月廿五日	滿 谷 報 一
至全 年十一月十八日	
自全 年十一月十九日	田 野 口 竹 二
至 現 在	

五、總社町濟世會

(71) 本會は昭和八年五月、縣の憐愍に依り設立せられたもので事務所を總社町設場内に置き、評議員、理事、幹事等によつて各種事業を遂行し、防貧事業、救貧事業、教化事業、生活改善、保護事業等々の目的のため機會ある毎に活動を續けてゐる。

六、總社町立庶民金庫

本金庫は一般庶民の救済、金融を目的とする質屋として昭和八年度に開設を見たるものにして昭和十年度の業績に依れば貸口數、千八百六十口、点數、六千五百五十三点、貸出高、九千八百七十一圓八十三錢にして毎年利用者の増加に伴ひ昭和十一年度に於いては三万一千圓の豫算を計上して一般庶民の利便を圖る事となり總社町唯一の實際的社會施設として異彩を放つてゐる。現在委員三名を置き月二回會合検査をなしてゐる。

七、總社町衛生組合

本町の衛生施設としては總社町衛生組合があり最近の建設に係る完備せる塵芥焼却場を擔任し、塵埃の取除け、下水溝の掃除に移めると共に傳染病の豫防一掃に注意し、各戸に宣傳ビラ、印刷物を頒布する等町の衛生全般に亘つて、警察署、役場と連絡を保ちつゝ、目的を達成してゐる。

尙町としては社會施設の一端として隔離病舎を建て傳染病の蔓延に備へてゐる。

第八章 社寺、宗教

一、神社

縣社 總社宮

縣社、總社宮は總社町大字總社にあり、社格は式外縣社にして大名持命、須世理姫命、相殿、神祇官齊戸、八柱大神を祭神として祀れるものにして、其の由緒は大化年



【宮社總社縣】

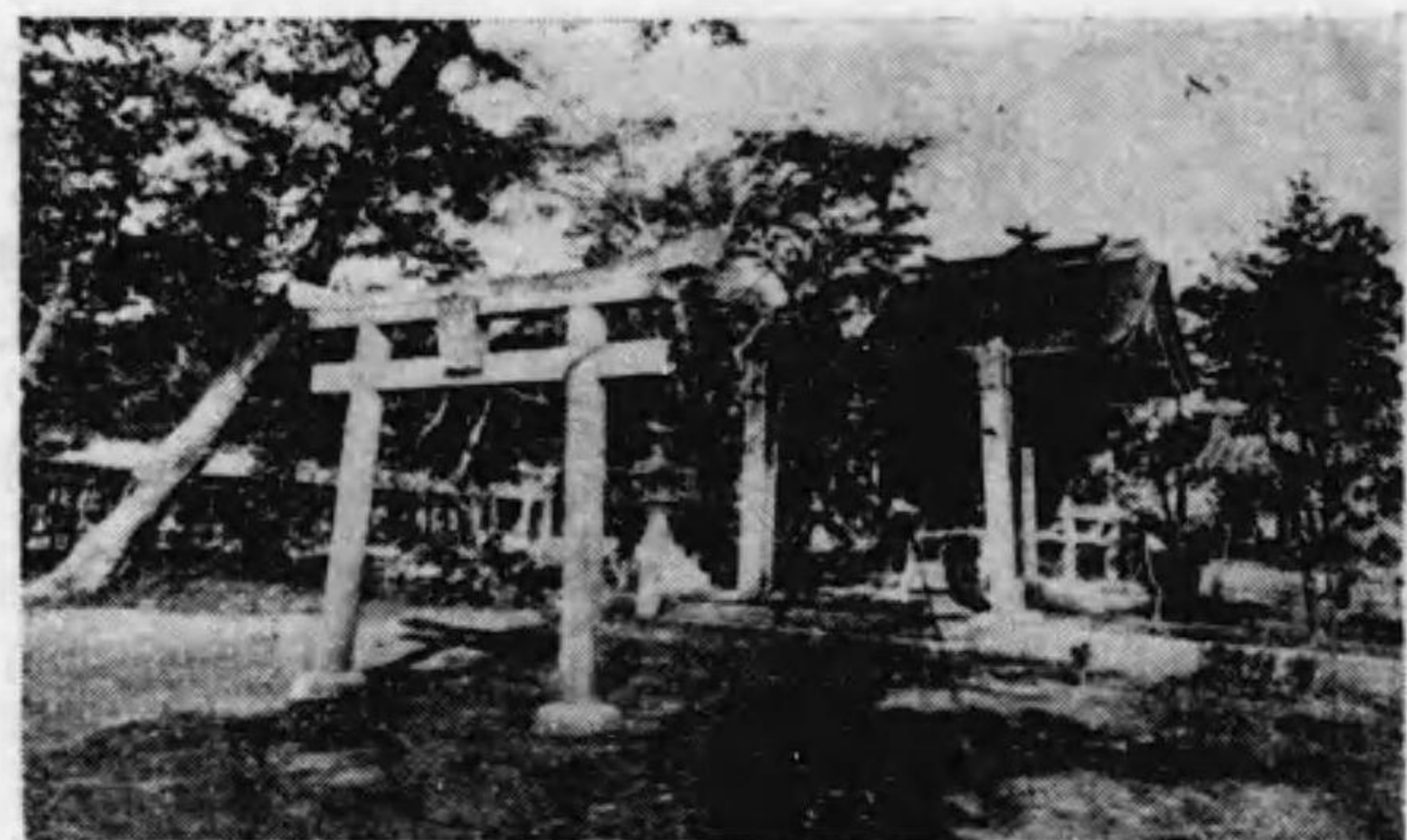
間に遡り、總社の地名は茲に發祥すると謂はれてゐる。社傳には、備中國内大小の神祇、即ち、官社十八社、田社二百八十六社の三百四社の神祇を奉齊せる由記載せられ、毎年一月二日、十月十八日、十九日には此の三百四社と相殿、

八神社及び其の末社、十二社を合せて三百二十四盤の神饌を奉献するを古例として存続してゐる。総社は嚮にも記せる通り國司の遙拜せるものにして、國司下りて國府を清水村に營みたる時近傍に沼田神社ありて社地平濶にして祭儀を行ふに便利な所から茲に総社が新築せられたといひ、備中守祈年祭を修行の時は國中、官社十八神の神主、祝部を召して國幣を頒ち、田社の神主、祝部をも召して神供を給はつた。其の當時は神領等も相當多かつたが國府廢絶後も永録、天正中迄は其の名残りが殘存してゐたといふ。其の後天正十年兵燹に罹り本殿、幣殿、末社、御朱印、寶物悉く焼失し、尙幾多の變遷を経て現存の社は貞享四年卯年、國中を勸進して再造せられたものである。當時は八田部村、清水村、井手村、刑部村、阿曾村、金井戸村、福井村七ヶ村の産土社であつた。其後明治五年、堀安道氏の建議に依り縣社に列せられ全四十年五月、神饌幣帛料供進神社に指定せられ

建物坪數 百五十四坪四合

境内坪數 六千二百五十三坪

氏子總數 一千百戸
社 司 親晴一氏



【社 神 田 沼 内 式】

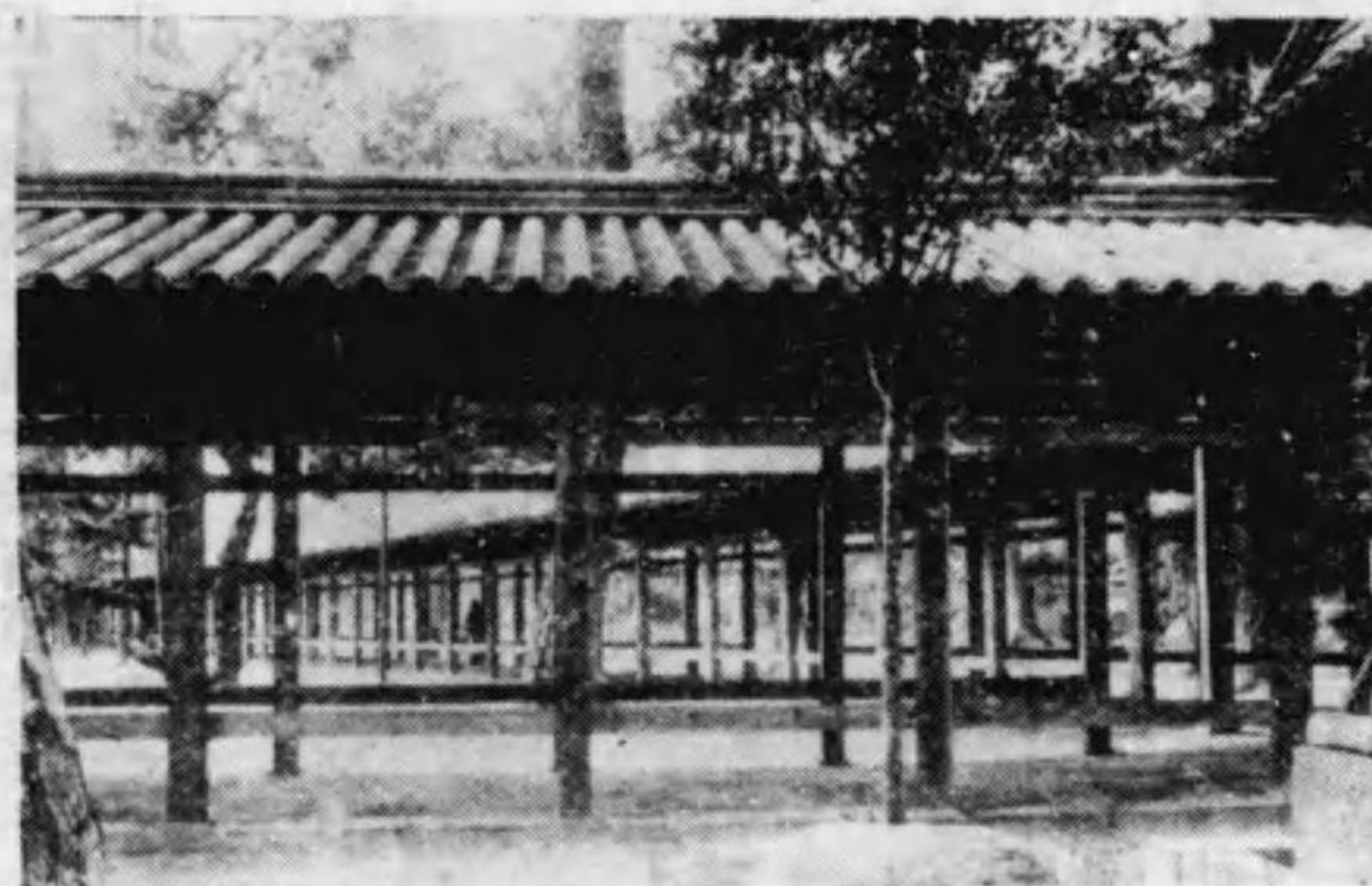
にして地方稀有の宏大なる社宮である。尙総社宮境内には別社として沼田神社、大神神社、古記の末社十一社、不載古記の新末社九社が祭つてある。

二、村社式内 沼田神社

沼田神社は総社宮境内にあり、祭神は大年神、相殿大物主命、少彦名命、菅原神にして延喜式神明帳所載の神社といはれ創立の年月は天正の兵燹に罹りて古書焼失のため不詳なるも上古は現在の長良山より苑郷(現在の岡田、有井方面)に至る間は一面の海であつたが後漸次開墾し膏壤沃野となし祈年の爲めに一社を建立し大年の神を祭りし由にして今総社の

(76)

北なる総社の攝社神明社附近の田の字に、上沼、中沼、下沼といふ地名あり、総社の南端に小沼といふ所あり、又境内の池を沼田池と呼んだ古傳あり、國司遙拜所とし



【廊廻宮社総】

て総社が茲に建てられて以來神祇官の祭儀が嚴重となり沼田神社は末社にでも入るべきものを今に至る迄別社とあがめらるゝは古の名残りを留むるものといはれてゐる。尙燼余の小狗犬二頭あり素質頗る古稚にして勸請の年代を想像するに足る。

三、御崎神社

一、鎮座地 総社町大字小寺字庚砂

一、社格 村社 式外

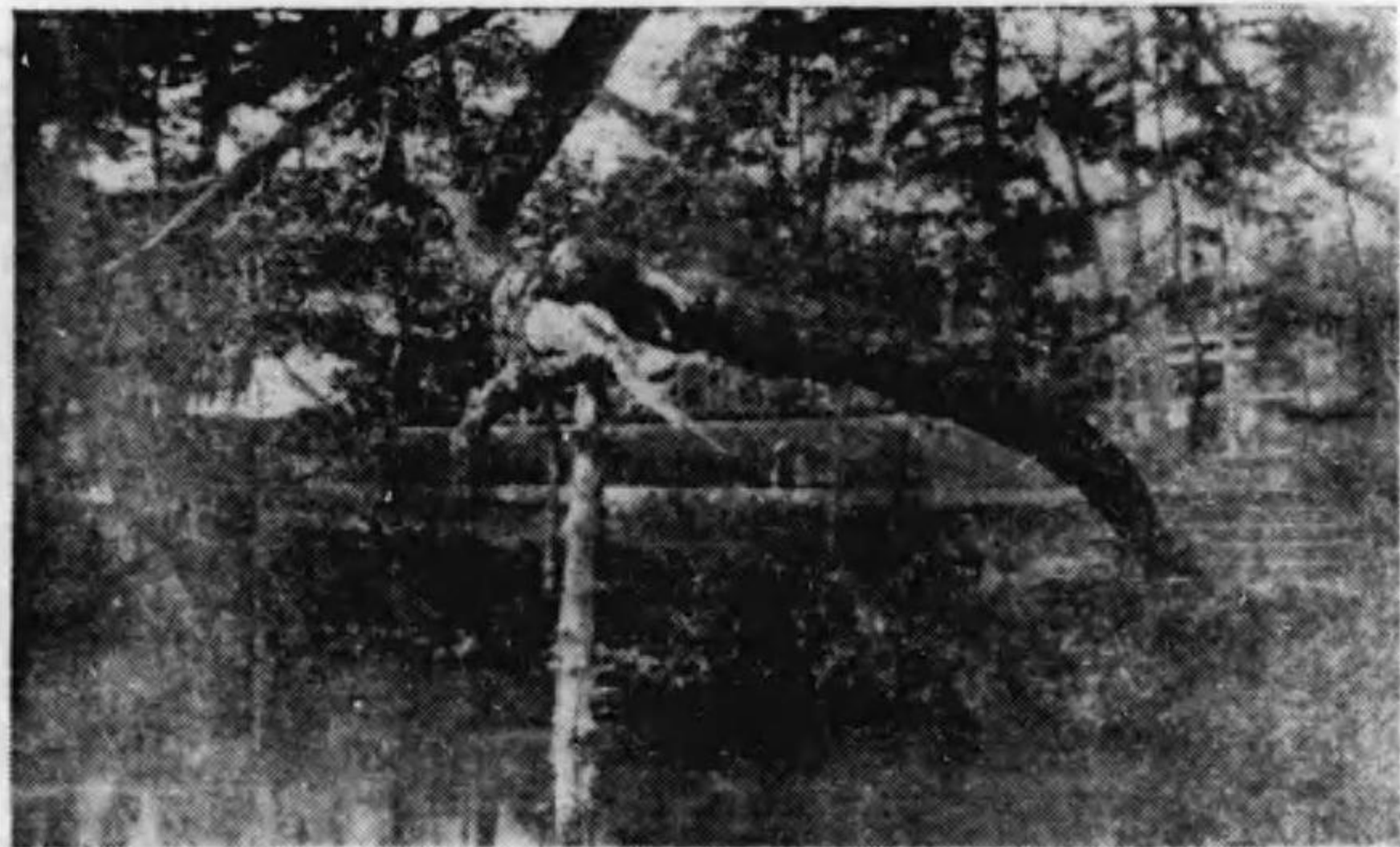
一、祭神 吉備武彦命、天御中主命、相殿、

若武吉備津彦命

一、由緒 當社は創立年月日は不詳なるも此の

(77)

古郡神社は総社町西山にある式内村社にして吉備武彦命を祭り、延喜式神明帳所載の神社である。服部郷の古圖に宮山あり、宮山の東に古郡の里あり、古郡内に古郡と



【社神崎御】

地、開墾の時より舊小寺村、門田村の氏神として田甫の中に鎮座してゐたのを慶長十四年の頃現在の山麓に遷し舊社地を御供田とした。舊藩主蒔田家に於ても祈願所として崇敬し、紋付幕を奉納した。大正三年五月村社淺尾神社と合祀す。淺尾神社は經山城主、二階堂政行、鎌倉より奉遷し此の地に鎮祭し、妙見宮と稱して氏神として累代崇敬せられてゐた。又藩主蒔田家に於ても氏神として四時參拜幣帛を奉獻し神主には家祿四石を與へられた。現神職は社掌角田久徳氏である。

四、古郡神社

いふ田畠ある所より古郡神社の神田と稱せられ、又古郡と國司が任命せられた時郡家を國府となし、此の古郡家に因む名前であらう。扱て此の古郡神社は正長元年の大風に倒れ久米村御崎社へ假に奉遷してゐたのを嘉永四年亥七月木下家の支族、豊臣利成朝臣に願事して西山宮山の舊地に社を造營し奉遷したものである。

五、青木神社

一、鎮座地 總社町大字井尻野字免田

一、社格 村社 式外

一、祭神 句々廼馳命

當社は建物坪數九坪五合、境内坪數六十坪、氏子總數六十戸にして、勸請年月は不詳なるも上野伊豆守崇敬の社にして元文元年六月、社領田畠四反の寄附あり。天正の頃荒平城主川西三郎左衛門之秀も毎年八月十八日、全十一月十八日、幣帛を奉りて崇敬厚かつた。慶長八癸卯年十月、當時の社増本覺院昌道再建し、寛文年間昌仙社殿を造營す。又明治十七年、之を改造して今日に至つてゐるのであるが井尻野西村の氏神

として崇敬せられてゐる。

六、井神社

一、鎮座地 總社町大字井尻野字溝井

一、社格 村社 式外

一、祭神 罔象女命、水分神と共に妹尾兼康の靈を祀る

【社神井】

一、由緒 勸請年月不詳なるも、人皇第八十一代安徳天皇の壽永元年、領主妹尾太郎兼康、領地に水利を拓き旱害を除かんとして、當社に祈願し、奉行福井次郎左衛門に命じて工を起し、高梁川を堰きて樋を造り溝井溝を開鑿せしめ、全二癸卯年八月、工を竣る。報賽の爲め社殿を改築し、又當社の掟を定む。爾來用水井堰守護神として十二ヶ



社

郷中、各領主、安藤長門守、蒔田備中守、松平伊豫守、木下肥後守、万年七郎右衛門花房左京、板倉頼母、松平豊後守、戸川助七郎、総高四万六千三百三石六斗八升の内より毎年十三石八斗余の寄附をなしてゐた。元祿元年、各領主高割を以て社殿を造營し、又兼康の徳を追慕して當社境内に兼康神社を創建し、現在當神社の相殿となつてゐる。明治十七年二月、社殿炎上して寶物及び舊記の大半を焼失したが明治二十一年六月、十二ヶ郷水利組合より寄附をなし之を改造した。更に明治四十二年、本縣訓令に基づき全組合に於て基本財産の造成を謀る事となり毎年二百圓宛寄附してゐる。建物坪數三十七坪、境内坪數、二百七十五坪にして、毎年十月十八日、十九日を祭日と定め、十二ヶ郷の村民は用水守護、五穀成就の神として厚く崇敬してゐる。

六、五 社 神 社

- 一、鎮座地 總社町大字井尻野字寶福寺谷
- 一、社 格 村社 式外
- 一、祭 神 加茂大神、石清水八幡神、春日神、日吉神、稻荷神

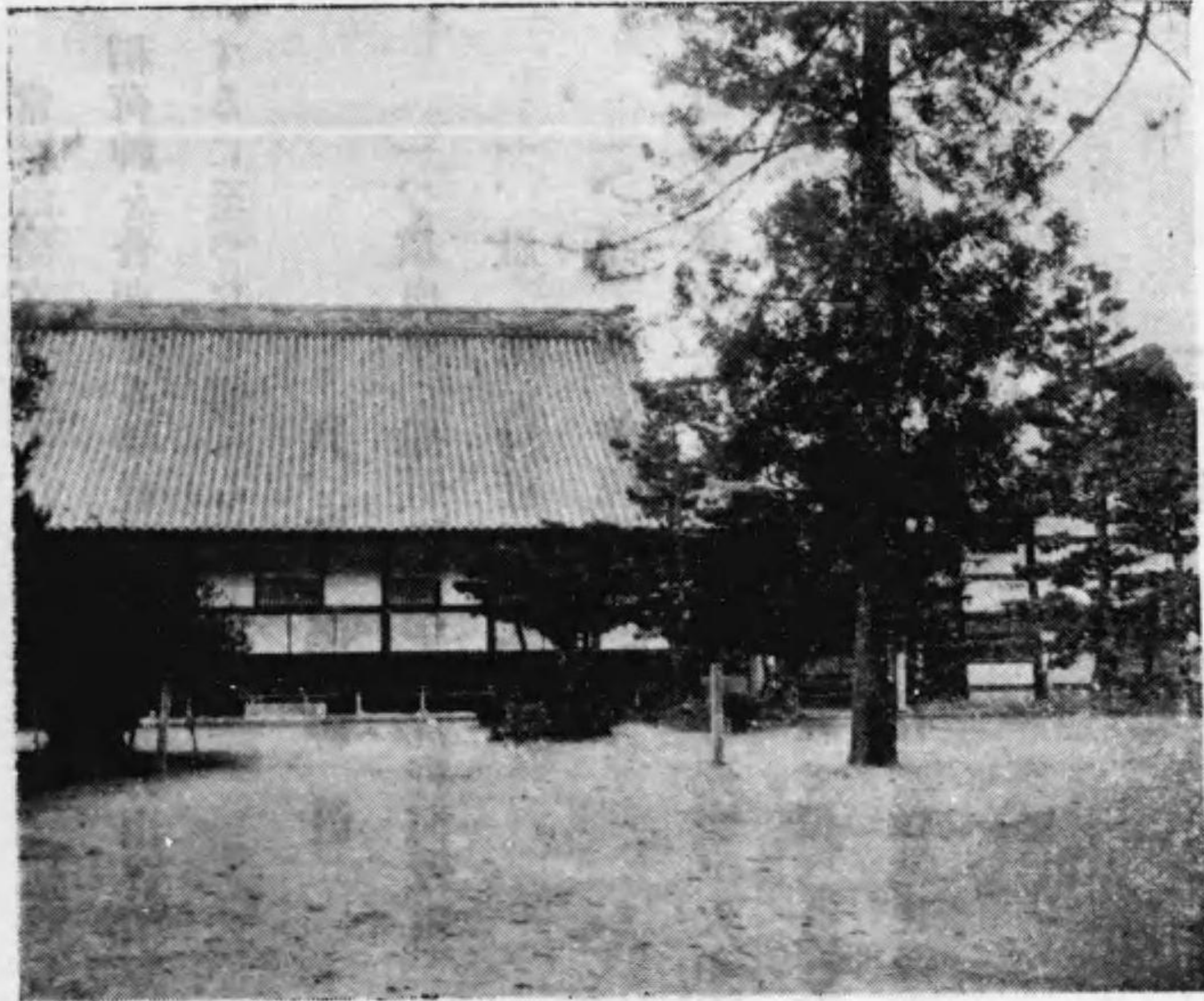
當社は割立不詳にして古く采遠宮と稱せられ、加茂大神、石清水八幡大神、春日神稻荷神を合祀せる神社にして、元井山寶福寺の鎮守であつたのを後世氏神として崇敬するに至つたと傳へられてゐる。

八、天 滿 神 社

- 一、鎮座地 總社町大字井尻野河原田
- 一、社 格 村社 式外
- 一、祭 神 菅原神

社傳に據れば、本村、村木氏の先祖が大和國郡山より當所へ移住の時、天兒屋根命を鎮祭して天神社と奉稱してゐたと傳へられ、其後、延寶三年、村木仁兵衛、藤原正信、本願主として社殿を修理した。後世に及んで菅原神を相殿に齋り、祭神となつたともいはれるが詳かでない。

二、寺 院



【寺 福 寶 山 井】

一、井山寶福寺

井山寶福寺は総社町井山に在り（洪井）及京都東福寺に因む名稱で作備臨濟禪の本山とも稱すべく、元平安時代の山上伽藍の名残で天臺宗の古刹であつた。創祖は日輪大阿闍梨であるが第八十六代、後堀河天皇の貞永元年、鈍庵和尚が新に伽藍を再建して法道に精進したが之が即ち寶福寺開山の祖といふべき人である。時に臨濟禪は榮西によつて傳へられ數十年後、辨圓は九條道家の請によつて東福寺

を起し天下禪風を慕ふ時代であつたから、鈍庵も亦辨圓に教を聽き其の高足、玉浚・無夢を延いて井山の二世及三世とした。茲に至つて天台宗の井山は禪宗の法域と化した。鈍庵は四條天皇の御不豫御快癒を祈つて功あり遂に寶福護國禪寺と號して國家鎮護を祈るべき旨の宣下を賜つた程である。當寺は東福寺と本末一体の關係があつて其住職は屢々出でて東福寺の管長に座つたものである。昔は塔頭子院五十五宇を有し末流三百余寺、寺邑三千石を領し境内も東西十町、南北二十町に亘る一大禪林であつた。當山の住持には次々と碩學大徳が現はれ二十四世大機、七十二世象海、七十四世大休、八十二世九峰等は何れも劣らぬ高僧である。今の住職は開祖より八十四世で前任雪巖の法嗣である。尙山域に盤若院及び満足庵址あり、三重塔は山内第一の古建築で特別保護建造物である。

二、穠雲山天仲院

本院は舊井山寶福寺の境内にありしものにして秀巖和尚の道場なり。慶長年中貨各和尚により現地、井尻野西村の地に移され、其の當時の記に依れば境内は東西三十四

(84)

間、南北六十間であつた。寛永年間大伽藍を増築し、越えて天保年間楞山和尚に依り改築せられ現在及んでゐる。

三、其他

寶滿寺

萬福寺 (日照山)古義真言國分寺末寺 本尊、地藏尊

極樂寺 (妙高山)真言宗國分寺末寺 本尊、藥師

松尾寺

南之坊 (日照山)古義真言國分寺末寺 本尊。愛染明王

報恩寺 (二階山)慶長年中、惟仲寧和尚の開基、井山寶福寺末寺

本尊、正觀音

善根寺 (大法山)井山寶福寺の末寺にして文永中、玉漫慧瑠和尚の開基に

係る。

觀藏寺

般若院

清雲寺

法城寺

等々の寺が多數あり、之等の中には相當由緒あるものも含まれてゐるが何れも兵燹炎上或は明治年間の大水害等々のために過去帳、古記録等を散失したるもの多く、今は尋ねるに由なく唯古老の口傳を聞いて過去の法風華かなりし時代を偲ぶの外ない。

三、宗教

金光教總社教會所

本教會所は明治四十二年三月、布教を開始し、全年十一月、金光教總社教會所として設立せられたもので教會長森定虎吉氏の熱心なる布教に依り歸信者多く現在では、

教徒 一五戸 七六名

信徒 一五二戸 六七四名

(85)

(86)

來信徒 八二戸

一〇〇名

の多數にして月並祭、春季大祭、春秋靈祭、教祖大祭、大坂式の諸式舉行して嚴かに祭典を行ひ非常な御繁昌である。

黒住教總社教會所

本教會所は昭和五年新築せられたもので信者は三百余名に達し、熱心なる來信者相次ぐ有様にて毎年三回祭典を行つてゐる。教會所長は吉富利七氏である。

天理教總社教會所

總社町には二ヶ所に天理教宣教所があり、老若男女の別なく紺の法被も凜しく「日の寄進」と稱して神社、佛閣等の掃除をなして美化作業を行ふ等努力をいとわす燃ゆる様な信仰を以て布教に努力してゐる。

信者は總社地方を中心に相當の數に上るといはれてゐる。

黒住教天心講社

總社町の宗教として今一つ見逃す事の出来ないのは都窪郡淺原に布教所を有する天心講と稱する講社の存在である。數年前より非常な御發向で毎月天心講の受持を定めて開講し、祈禱、祈念を行ひ會する者は講所に入り切れない程で講員は當地方だけでも數百名の多數に及ぶといふ。

第九章 名勝、舊蹟

前掲の通り、總社町を中心とする此の附近一帯は天然の勝景に恵まれ、吉備文化の發祥地にして古來東西交通の要路に當る所から歴史に名高い古戰場等も少くない。之を詳細に紹介するには國史と郷土史の離れ難き關係を遺漏なく記述しなければならぬが茲では比較的有名なるものを畧記して其の責を塞ぐ事とする。

一、湛井の水郷

豪溪の奇岩を洗ふ横谷川の流れが高梁川と落ち合ふ所、明治橋を下へ數町、東岸は巨巖累々として權現岳の天險が翠綠と共に道を壓して迫り、清流ゆるやかに流れて一

(87)

大水郷をなす。此の水郷はは十二ヶ郷用水路の樋元に當り、堅固なる水門を控へて満々たる清流明鏡の如く澄み渡り、波靜かなる水面に岩影と共に搖影する小舟の姿も閑かなる風景であるが、夏の宵、鮎獲りの篝火が三々五々川面に映え或は河瀬の音に月影は千々と碎けて、絃歌さんざめく屋台船の雪洞涼を追ふて搖れるも亦楽しい眺めである。總社町々一泊して涼を漁る者打ち寛いだ姿で一度は遊んでいゝ水郷である。

二、總社宮境内

吉備郡内に於ても縣社總社宮の境内程廣大なる神域を有するものは稀であらう。數十間の廊下が本殿に通じ老檜、老松翠々として技を張り、老杉天に聳えて清々しい。境内には尙神池あり、緋鯉真鯉が餌を漁りて集るも面白く、二つの中ノ島には細い石橋を架して辨天様を祀り、岩は苔蒸し、大木は靜かに其の影を池中に落して小舟を浮ぶるあたり、景趣又風雅である。秋の頃、黄ばみたる落葉一陣の風に吹雪き或は紅葉尙樹間を彩る物寂びたる風景は我々の心の底の神性を呼び醒すかに思はれる。數年前

迄は本殿の三方は笹茂り、雜木繁茂して鬱蒼たるグロであつたが最近町の有力者池上菊藏氏が巨額の自費を投じて之を伐採し、堀を修理して稚魚を放ち、亭を建て木を植えて公園として面目を改めるに至つた。今數年後苔蒸し、移植の若木が茂り、刈込まれたる枝が繁茂する時茅茸きの本殿の屋根が樹間に陰顯し、神域としても公園としても申し分なき神々しさと落ち付きとを取り返す事であらう。毎年夏になると境内祭神の祭りが殆んど毎日續き、涼みがてらの參詣者引きも切らず、夜店の瓦斯の臭氣に童心は煽られ、各種催物は黒山を築きて、夏の總社宮境内こそ無限の歡樂郷と化し、賑やかなる極みである。

三、秋葉山

秋葉山は總社町の北西にある海拔二五〇米の山にして老松鬱々として山上石段の盡くる所、秋葉神社が祀つてある。頂上眺望頗る良く、俯瞰せば總社町の全景は山麓に迫り、附近町村は指呼の間に點在し、更に見渡せば展望愈々廣く拓けて東は遠く稻荷

(90)

山奥ノ院を望み、南は遙かに瀬戸内海が霧の中に煙りて、兒島灣、玉島沖を一望の中に集め得て心氣自ら浩然、井山―豪深間を結ぶ絶好のハイキングコースである。

四、豪 溪

豪溪は総社町より約一〇軒、池田村槇谷川の上流にあり、深造岩の花崗岩が槇谷川



【溪 豪】

の急流に洗はれ、永い歳月の風雨の洗禮を受けて出来たものであると謂はれ、耶馬溪、寒霞溪の美觀にも匹適するものとして廣く喧傳されてゐる。事實、豪溪程優れた自然美を背景に、その奇勝を天下に誇るもの縣下に稀である。

實に巒嶽は巍然として聳え、奇巖、奇峯相次いで天を摩し、清流

岩を噛みて奔流となり、圭峯、雲梯峯、天柱峯等の群峯が、一たび奇峯をなして清湍に迫れば奔流飛沫を擧げて激流と化し、其間翠綠點綴し、秋の頃紅葉乱れて朝陽に映え、全山錦繡を纏うた如く、山路一曲して回顧すれば一瞬にして全景を異にし、その美觀けだし壓巻であり、いふばかりない。

此の地は古來幾多の文人墨客杖を引き、就中、画聖雪舟の最も好んだ所である。雪舟画法の幽遠、閑寂さは此の奇勝に影響さるゝ所多大であるといはれてゐる。全所には阿開利増信の閣基にかゝる天中山あり、更に前面の崖壁に刻まれた雄渾なる「天柱」の二大文字は文政年間備前の儒者武元登々庵の感激の筆になるものである。

鸚鵡石

豪溪への途中華表の近くに鸚鵡石といふ石標あり、其の表面に前中約言持豊の「言問は、此處より問へよ足曳の山彦ならぬ答をぞせん」の句が刻まれてあるので名高い。

五、雪舟禪師之碑及寶福寺三重塔

(91)

雪舟禪師の碑は雪舟の幼時鼠の逸話で名高い井山寶福寺境内にあり、大正十五年の建立に成り、上段圓内の肖像及び中段宋育王山の全景を示す繪は共に雪舟の筆になり下段の文は藤井高尙の撰、書は頼山陽で所謂三逸の碑と稱せられ、洵に由緒深い、地方稀有の記念碑である。尙同じ寶福寺境内に三重塔があり、龜山天皇の弘長二年北條時頼の建立にかゝるもので中には四天王及び大日如來を安置し、天正三年の火災を免れ、今では境内唯一の最古建築であり、特別保護建造物に指定せられてゐる。

六、新山及其の附近

新山は南の福山と相對して總社町より指呼の間に聳え、平安朝山上伽藍の地で元二十有余の精舎があつた所であるが、今は全部平地に分散し、總社附近の寺は茲より移されたものが多い。現在では總門址寺跡等に依り、鐘の音が韻々として山を越え谷に略して里人の心底に響き渡つた當時の豪壯さを窺ひ得るに過ぎず、尙當時使用せられた巨鍋は「鬼の釜」と稱されて今に至る迄残存してゐる。



【碑ノ舟雪聖畫、内境寺福寶山井】

此の附近には「鬼の城」といふ山あり、吉備津神社の社傳に依れば韓土百濟より溫羅といふ強賊來り吉備冠者と稱して茲を居城とし、岩屋山の地に籠りて西國の貢船を掠め、万民を苦しめ、遂に吉備津彦に誅伐された由緒深い地である。

七、經山城址

經山は新山の手前にある標高三六九米の高地にして四方阪路峻險にして戰國時代大内義隆茲に城塞を設け、中島大炊助元行城代と爲り、鬼ノ城、岩屋等に出丸を築き當國屈指の要害地であつた。元龜年間、攻め寄せた尼子勢の大軍を中島大炊助小軍を以てよく防戦之を支へ毛利方のため万丈の氣を吐いた古戰場である。新山より經山に至る此の附近一帯はハイキングコースとしても險峻なる阪路を攀じ、谷を渡りて、以上の史跡と傳説を探ねつゝ古を温むる最適の健脚コースである。

八、淺尾城址及桃山の花見

總社の市街地より僅か北に片寄つた淺尾村内に元淺尾藩の城址がある。なだらかな

丘陵ではあるが眺望は非常に良く、西は白銀の様に白くうねる高梁川の流れを距て、遠く山田、新本の村々がクツキリと浮き出て美しく、南は福山々麓に沿うて走る國道を掌の内に見晴す事が出来、縣道に沿ふて竝ぶ村々の家も一眸の中に點在し、實に、淺尾藩内は無論のこと此の領土に入る要所は一顧の中に收め得る平地の要害地とも言ひ得よう。

そして、城址とおぼしき個所には尙土圪の一部が残り、今は尋ぬれど石語らず、草木黙して寂として聲なしと雖も、想ひは自ら明治維新の風雲に及び、大砲の音に人馬の足音は乱れ、鬨聲の中に凄慘な劔戟の音を聞き、草木ために血腥き淺尾陣屋焼打りの當時を追想し、愕然として心のときめきを感じるのである。即ち、慶應二年四月、長藩主戰論者高杉晋作等に屬する石城奇兵隊の脱走者等は立石孫一郎を頭主として大島郡安下庄に着船、更に海路を東上して連島に上陸し倉敷代官所を焼打ちした勢に乗じて淺尾に迫つた同勢百余名の一行は井山の寶福寺に滯陣して南追手口より雪崩れ込み、郡役所、觀藏寺に火を放ち、尙一隊は北、西の谷より大砲を打ち込みながら攻め

込んで各所に火を放ち鬨聲を擧げて斬り込んだ。不意を喰つた淺尾藩では、炎々と天をこがす猛火の中に、池上金之丞は手兵に下知して自ら大砲を以て應じ、荒木數之進安原新治郎は敵軍の中に斬り込んだが衆寡敵せず遂に灰燼と共に恨を飲んで淺尾の土と化した。之が有名な淺尾騷動である。

尙現在では其の一部を切り開き數百本の桃樹を植えて、春風駘蕩として山野に遍く頃満開の花紅、雲か霞か感ふばかり、終日花見の客に賑ふのである。

九、垂乳根の櫻

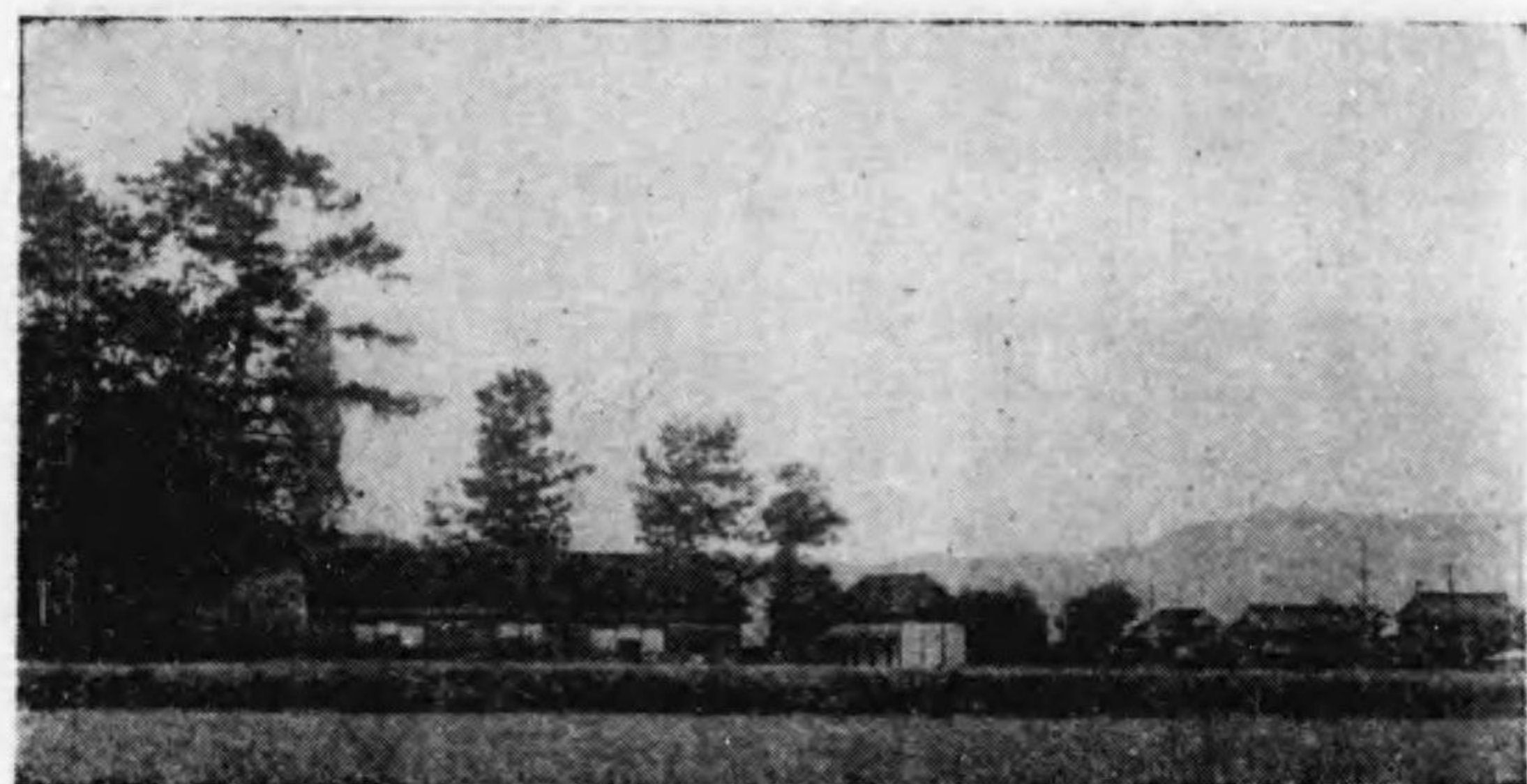
町の西南一里、伯備線清音驛にて下車すれば約二丁、清音村輕部神社の境内に有名な垂乳根タラシキの櫻がある。樹幹の圍り八尺と言ひ、京都祇園の櫻にも似て、無數の細技絲の様に垂れ下り、満開時雪粉の様な眞白き花が雪洞に映ゆる風情得も言はれず、谷間に續く若木の櫻も互に其の艶を競ひて一入の興趣を添へ、遠近を問はず杖を引くもの絶えず、花見時の賑々しさは又格別である。

一〇、服部山城址

長良山にあつて後醍醐天皇の延元元年大江田光信が吉野朝に屬して初めて築城したものであるが足利軍の爲に陥られ、細川氏の臣上野盛之が之を守つてゐたが後光信の孫彌屋康光再び之を奪ひ、親光の時に至つて足守冠山の城に移り、後宇喜多氏の有に歸し、其將戸川秀安が暫く居城してゐた所である。昭和五年に秋季特別大演習の砌、畏くも大元帥陛下の野外統監部が此の山頂に設けられ、今此の聖跡に記念碑が建てられてゐる。

一一、備中國府遺趾

吉備郡服部村大字金井戸にあり、備中國府は既に総説に於て記せし通り、備中國府の所在地にして、國司の政務を執りし役所である。所謂、御所の地が古の國府の跡であり、大化改新の時は假應舎が三須村にあつたが後清水の地に移され、更に現在の地に置かれたもので其の管轄區域は窪屋、郡宇、淺口、小田、後月、賀夜、下道、英賀、



【趾遺府國中備】

哲多九郡の廣範圍に亘り、現在其の後には國府遺趾の碑がある。延喜式曰、備中國府在賀夜郡、距京師行程上九日、下五日、海路十二日、管九郡七十二鄉即鄉孝云、今八部鄉有國府名曰北國府、南國府按其間所謂御所地即古國廳址也、址西十余町有總社明神、祀備中國古社三二四蓋歷代國司所尊宗也、御所今属吉備郡服部村余就而觀之方可三丁南沿大達、東西北三面繞以濠、濠幅三十間、地形劃然合古條里制焉、夫吉備者天下之雄鎮方大化改新與倭京東國築紫竝爲四大政區然備中國府實爲其本據天武朝有大宰石川王、文武朝有總領小野小足治焉、爾來閱歲七百、歷代國司無慮五百有余、咸忠良恪勤敷化施德、文武盛名顯於一世矣、嗚呼亦



【寺分國中備】

隆乎哉、頃郷人胥謀欲四至勒貞眠永照遺跡徵文
於余乃記其梗概云爾。

一一、備中國分寺

都窪郡三須村上林にあり、附近一町ばかりの松林の中に多數の礎石あり、國分寺尼寺の跡といはれてゐる。又附近には黒媛塚と傳稱する皇塚あり、巨大なる刳拔式の石棺にして、高貴な方の古墳と史料せられてゐる。備中國分寺は奈良朝時代の遺跡にして聖武天皇の天平九年の創立に係り、當時七堂伽藍を造營し、全十二年六月には七層の塔を建立して墾田一千町を附せられたと傳へられ、八宗兼學の道場で其の規模宏

大、輪奐の美を極めたものであつた。今は日照山國分寺と稱せられてゐるが元は金光明四天王護國寺と稱へたが後日照山鎮護國土院といはれた。爾來世の推移と共に次第に衰亡の一路を辿り、遂に後醍醐天皇の延元元年足利直義の大軍を率ゐて福山城を攻めた時兵燹に罹つて全山烏有に歸した。後に後村上天皇の正平年間に四國より僧伴僧正が來り可惜名寺の荒廢を慨き勅允を仰いで舊址に堂宇を再建し結構の宏壯の美を誇つたが小松天皇の應永四年又々劫火に見舞はれ、寺は同村門庄に移轉された。土御門天皇の應仁二年又々兵火に遭つてより、總社町清水の萬福寺境内に移され、正親町天皇の天正年間には専ら清水宗治公の一菩提寺の如き觀を呈してゐたが東山天皇の寶永四年堂宇再興に當り領主蒔田相模守廣蕃は工を援けて本堂其他を清水の地から現在の場所に移し、五重塔の如きは往時の七重塔の豪壯さに比すべくもないが今尙地方屈指の巨刹として其の昔の面影を偲ぶるに足る。そして今國分寺と日上の間に散在する、尼寺、大門、中の塔、觀蓮台、塔の窪、遊塚、三門市、西蓮寺等の地宇は當時の遺跡と稱され、寺内には行基僧正の作になるといふ本尊藥師如來を祀り、聖武天皇御宸筆

の經偈、弘法大師筆の五大尊像、智證大師筆の虚空藏画像、清水宗治の願文等を秘藏してゐる。

一三、三須村作山及其の附近

元來吉備地方に於ても總社町を中心とする此の附近一帯は最も文化の早く拓けた所であり、就中三須村作山方面には到る所山嶺といはず平野といはず數限りなき古墳が散在し、豪族の移住割據の多かつた史實を立証してゐる。取りわけ三須村作山の古墳は大和地方の高貴の諸陵に劣らぬ豪壯なもので、兆域三町に四町、高さ前方十一間後方十二間、瓢形式三段になつて居り、中段には埴輪圓筒の類が列べてあり今尙殆んど完全な姿を存してゐる。果してそれが何者の墳墓であるか詳かでないが吉備民族が如何に勢力を有してゐたか想像し得るのである。又近くの加茂村、日差山等にも古墳群があり、日差山は又古戰場である。

こうした史蹟と遺跡とを跋渉しながら昔からの古い傳説を探して歩くのも亦興味深い事である。

一四、福山城址

福山城址は總社町の南、山手村にあり、標高三〇〇、北は吉備平野を眼下に見下ろして遙かに伯耆の大山を望み、西は蜿蜒と流れる高梁川の流れを脚下に見て遠く笠岡方面に迄視野は拓け、南は倉敷、藤戸の古戰場を距て、兒島連峯起伏せる間に遠く四國の五劍山を望み得て、瀬戸内海、兒島灣の波浪又一眸の中にあり、東は展望愈々拓けて岡山平野は一個の箱庭といふべく、道路、橋梁手に取る如く、従つて古來山陽道を扼する要害の地と謂はれ、南北朝以來戰端開かれる毎に常に敵味方爭奪の中心となつた。山は平安朝時代山上伽藍の遺址で福山寺と呼ばれ、備中誌に従へば、一山十二坊の寺院あり堂塔伽藍完備せる堂々たる法林であつた。福山城は此の寺院を利用したもので延元々々年、足利直義の大軍が反逆の旗を吉備の平野に進めて東上せんとするや、時の城將、大江田式部大輔氏經寡兵よく防戦に務め遂に敗れて全山灰燼に歸した蓋心

地下に眠る由緒ある城址である。嗚乎、日月遠く距つて城塞の姿今は無く、岩は苔蒸して全山聲なく深々と眠り、松韻徒らに寥々として、法燈盛んに輝き鐘の音韻々として絶えず、或は篝火の影に馬を進めた當時は再び見るべくもないが、想ひ起せば六百年前、僅かな手兵を率ひて福山城に據り、雲霞と寄せる足利軍に、敢然と盡忠の血を流して利あらず、遂に炎々と燃ゆる城を捨て、三石迄落ち延び、逆臣尊氏をして鴻鶉の勢を成さしめ、建武中興の覇業終にならなかつた氏經の心事に想到するならば、誰か滂沱の涙を禁じ得ようか。今は保勝會の手に依て立派な觀光道路もつき種々設備が整へられてゐる。

第十章 先哲、遺賢

一、先哲、遺賢

吉備眞備

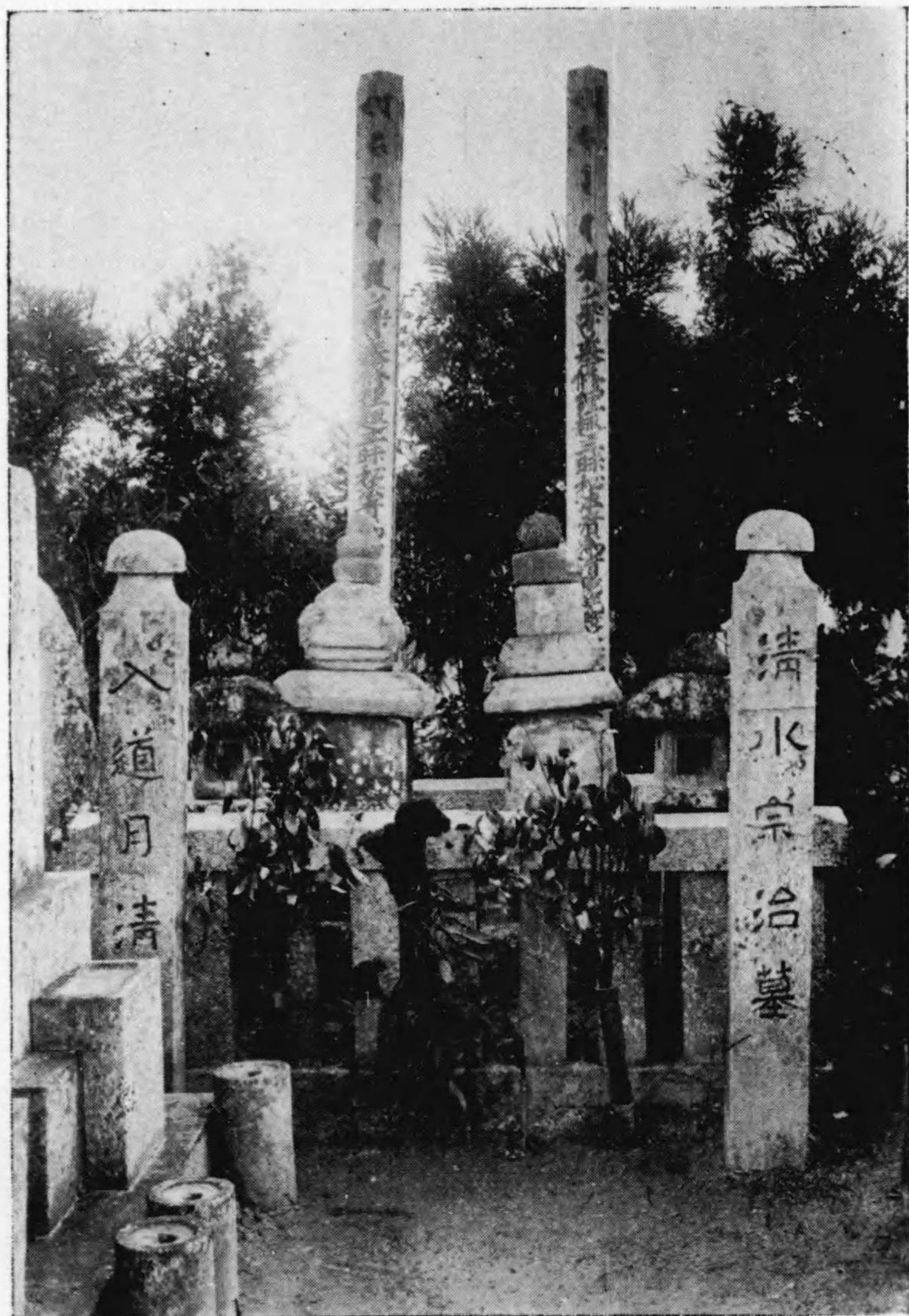
吉備公は吉備郡箭田村の出身にして大吉備津彦命の裔である。靈龜二年、年二十四

にして遣唐留學生となりて入唐し、經史を研究し、衆藝を修む。天平七年歸朝の上唐禮一三〇卷を献上し、正六位大學助に任せられ、急速に累遷して、第四十八代稱徳天皇の天平神護元年勳三等正三位に叙せられ、翌二年、從二位右大臣に擢んでられ、景雲の初近江の穀二千斛を賜はり、尋いで帝其の第に幸せられて正二位を授けられ、實に當時として異數の出世であつた。其の後、帝不豫にして眞備に敕して中衛左右衛士府の事を司らしめられたが左大臣藤原氏と意見を異にし、遂に上書して職を辞し、寶龜六年、歳八十三にして薨す。箭田村に吉備公の墓あり、附近の吉備寺は平地佛教の名残りにして吉備公と因縁淺からざる寺である。

清水宗治

清水家は吉備津神社の社人にして平家の侍、難波經遠の苗裔にして世々賀陽郡八田部郷清水に居住せるものにして、宗治の父、備前守宗則は八田部郷八千石を領知し、初め大内氏に後元利元就に属して三村家親に與力した。宗治は天文六年に生れ長左衛

門尉と稱し幸山城主石川久隆の女を娶つて室となした。正親町天皇の天正十年夏、羽柴秀吉潮の如き大軍を率ひて中國平定の旗を進めて西下するや、秀吉の勸告を斷乎として斥け「輝元、隆景累年の懇意淺からず、十數國を領する毛利家に譜代の良臣も少からざる處に、義昭公と信長郷と御争の天下境目の守護を不肖の我等式に頼まるゝ儀、家の面目、死後の名譽之に過ぎず、貞女は兩夫に見えず、忠臣は二君に事へすと承る。させる武功は遂げずとも、信長郷御身方に參せざるを以て、將軍義昭公へ御忠節、輝元への志に仕る」と宗治萬死を決し、眇たる高松の孤城に據り、よく戦ひ、遂に歴史に名高い水攻めの奇計に遭うて城兵の困苦を見るに忍びず、敢然と敵軍環視の中に美事切腹し果てた。古川古松軒いふ「古老の傳へるに、宗治容姿美しく、身の丈高くして音吐大なる人なりと(中略)山林に隠れ居たる領地の民等、宗治の死を聞き、慟哭して嬰兒の母を失ふが如し、是を以て見れば宗治は義勇のみならず、又撫民の志深かりし人なりけむ」と。宗治の墓は総社町清水、清水山總持院万勝寺趾、備中清水家累代の墓地にあり、大正十三年、畏くも宗治公に對して從四位の御追贈があつた。



【墓ノ治宗水清、跡院持総】

蒔田廣孝

蒔田廣孝公は蒔田家中興の祖である廣定より十一世の裔であり、備中淺尾藩最後の領主であつた。分家三須より入つて相續したもので名は鏝太郎又は權佐といひ、文久三年蛤蛤御門の戦功に依り一万石の封領を賜はり、元治の變に禁裡を守衛して功あり勲賞を蒙つた。明治維新後侯籍に加はり叙爵せられて相模守に任せられ後総社町長を勤められた事がある、

妹尾兼康

妹尾兼康は本姓は紀、考諱は兼門、保元の乱に際し、軍功を以て備中東南部の半國を領し、妹尾の莊に居て遺封を繼いだ。兼康は天性剛毅にして武技に精通し、土工測量の知識に富み、後白河、高倉、安徳の三朝に勤仕し、尙當時の執政者平清盛の寵遇を得て機務に參劃し、音戸の瀬戸の開鑿、攝津福原の防風島の築島には何れも其の監督、設計の任に當り、特に、此の領内備中の地域が、當時灌漑用水不便にして早魃を

來たし常に農産物の被害を蒙る事多く、兼康は終に之が救済法として灌漑用水路の溝渠開鑿を企て、治承元年、溝井に堰堤を設け、高梁川の水を吉備の平野へ導いた。それが現在の用水路であり、其の後地方民は旱魃を知らず、潤澤する所の耕田六十八ヶ大字の廣大なる地域に及ぶ。治承四年九月木曾義仲北國より起り、西上して關を犯さんとするや平維盛の部將として征討軍に参加し、各地に轉戦し軍功あつたが篠原岳の戦に賊將倉光成澄の爲に捕はれ、楚囚の身となり壽永二年、越後を遁れて領地に歸り機を得て同族を擧げて義軍を造り、屋島の行宮に赴き、安徳天皇を擁護し奉らんとしたが偶々今井兼平等の追兵と會し奮戦して敗れ、備中板倉にて戦死した。享年六十二歳。

僧 大 休

總社町井山寶福寺の住職にして開祖より第七十四世である。六歳にして出家し慧防と名付け後日向に行き古月に參して大事を成辨し、徹禪師と共に熊野に行く。途中駿

河の白隱和尚の事を聞き其の門を叩いて參禪し、大いに修行を積み、東上して東福第一座に轉位し大休といつた。一條准三后の知遇を受け、後寶福寺の住職となり、六十歳にして遷化した。

二、先覺者、遺烈

古川 古松 軒

古川古松軒は名を平次兵衛といふ、享保十一年、下道郡新本村に生る。既に倜儻にして大志あり、獨學、經史百家に通じ最も地理に精通して兼て觀測をよくした。常に周遊を好み、山川、港灣、神社、都邑、交通等万般に亘つて究めざる無き有様であつた。天正三年西遊して九州に入り、西遊雜記七卷を著はし、全八年、巡檢使に隨行して奥羽を巡り東遊雜記十卷を著はし歸郷して信濃漸を發行す。寛政中松平定信意を海防に注ぎ、其の五年、定信に謁し諮問に従つて指画應答す。六年幕府の命に依り、江戸附近の地理調査を命ぜられ、武藏五郡の圖及び四神地名録一卷を作り之を献上した。

本邦有数の地文學者であつたが文化四年十一月病歿した。

池上 秦川

秦川名は淳、字は眞郷、誼三と稱す。吉備郡秦村の人で岡田藩の佐野氏に師事し、弱冠豊後の廣瀬談窓の門を叩きて詩及經史を學ぶ。安政五年、淺尾藩池上殖寛の後を承け其の女を妻として池上姓を名乗つた。文學教授、郡宰、權大属に歴任し明治六年大藏省の辟に應じて租稅志を編了し、累進して三等屬となり明治十九年歸郷し晴耕雨讀、専ら、山水風月を友とし詩を賦した。秦川人と爲り謙和にして端麗、勤勉克く職を奉じ、詩は冲澹、文は簡雅、師傳を失はず。

池上秀夫中尉

池上秀夫中尉は總社町井手の出身にして去る滿洲事變突發と共に出征し、獨體隊を組織して其の隊長となり、連日の討匪行を續けて惡戰苦闘、遂に長城線の占領に成功



【碑忠表尉中上池】

し、花々しい戦功と共に名譽ある戦死を遂げた武人の鑑である。今總社宮の側に美事な碑が作られ、末永く其の戦功を記念してゐる。建碑趣意書に曰く、

趣意書

回顧ス昭和八年四月古北口ニ獨體

隊長ノ勇名ヲ轟カシ續ク激戰ニ敵膽ヲ寒ガラシメタル故陸軍歩兵中尉池上秀夫君ハ岡山縣吉備郡總社町ノ人ニシテ資性寡言實行ヲ重ジ能ク部下ヲ愛ス偶々滿洲事變起ルヤ擢ラレテ軍ニ從ヒ旭日ニ白ク獨體ヲ畫キ裏面ニ北白川宮殿下ヨリ賜フ所ノ御紋章入ケテ各地ニ轉戰シ衆人ノ刮目スル所タリシガ万里長城ノ堅壘ニ肉迫スルニ及ビ先驅シテ皇軍ノ精華ヲ發輝シ更ニ勇躍シテ城南ノ強敵ヲ一蹴セントシ不幸流彈ニ中リ兩脚踏

跟心頭忽チ火ヲ發シ立所ニ目前ノ一人ヲ斯リ力盡キテ共ニ疊岩ノ間ニ倒ル飛彈急雨ノ如シ暫クシテ半身ヲ起シ渾身ノ力ヲ陣刀ニ托シ逃走ノ敵ヲ睥睨シテ之ヲ抛ツ而シテ君復タ起タズ時ニ歳二十又五君身ニ五創ヲ被リ拳銃眼鏡刀室皆飛散ス其奮戰ノ狀憶フベシ嗚呼此ノ壯烈偉勳後人ノ龜鑑トシテ當ニ千載ニ傳フベシ。

窪津義雄中尉

窪津中尉は淺口郡玉島町の生れにして中尉六歳の時父母に隨ひて其の居を総社町の隣村常盤村溝口に移す。中尉人と爲り孝友にして情誼に厚く、幼時より學を好み武を嗜む。明治三十三年九月、陸軍中央幼年學校に進み、後陸軍士官學校に入學、軍校にある事前後七年、士官學校を優等第一位にて出で銀時計の恩賜を辱ふした。明治三十七年日露の國交破るゝや直ちに膺懲の軍に加はり出征し諸所に轉戦して屢々功を立て數次の重傷にも屈せず軍に従うて前進し、遂に奉天の激戦に猛烈な十字火を蒙り、玉書の中に護國の鬼と化し散落した。

石田聯隊長の弔詩

嗟君殉戰奉天原

想起彈痕又血痕

每聽凱歌空涕淚

空聞聲裡弔忠魂

龜山石屏

名は博綱、學は文仲、鈍齋と號す。備中八田部の巨族龜山直綱の次男にして兄虎藏の死後家を嗣いだ。人と爲り風流にして書画を好み、家に澤山の書畫を藏してゐたので訪人、墨客其の名を知らない者はなかつた。後八田部が松山藩の領地となり、博綱は用達として士籍に列せられ祿百石を賜つた。天保八年四十七歳で歿した。

堀安道

賀陽郡総社の人、通稱和助と稱し六友居と號した。安道幼にして學を好み遊戲に耽らずして讀書に日を送り、長ずるに及んで藩主特に佩刀を許し之を旌はす、慶應中家を弟安郷に譲り自らは鉛槧を事とした。明治新世となり、選ばれて総社祝師となり、

四年縣命を奉じて管内の宮社を考証し頗る明確であつたといはれ、是の年知事を初め縣官多數を招して祈年祭を總社の地で行つた。總社宮が縣社に列し、沼田神社又官社に列するを得たのは安道の建議によるといはれ、四十七歳にして歿した。

安原玉樹

總社町の人で中原正徳の女にして安原正常の繼室となり、婦徳高く、文學を好み、和歌に通じ、書に秀でてゐた。

池上大檢校

隣村、都窪郡常盤村の出身にして名を伊之助、失名の爲め音樂を研究し、箏曲に秀でてゐた。明治三十年、岡山高等女學校の箏曲教諭となり後就實女學校教諭を兼ね大檢校に進み和氣島庸山等々と研究會を起し斯道のため盡瘁せられたが四十二歳を以て歿した。

薄荷の歴史と秋山氏

薄荷を我が岡山縣に最初に傳へたのは總社町門田の人秋山熊太郎氏にして江戸より僅少の種根を持ち歸り試植したのを濫觸とす。爾來繁殖して取卸油を製し、菓子商及賣藥業者に販賣した。其後漸次後月郡、上道郡方面に擴がり現今では其の生産額全國第二位を占め本縣の主要産物となつてゐる。其の慧眼驚くに足る。

三、郷土の先輩

満谷國四郎

明治七年總社町に生れ、上京の後小山正太郎の不同舎等に學び、明治三十一年、明治美術會創立十年展に「林大尉の死」を出品して明治大帝御買上の光榮に浴し、現在帝國美術會員、大平洋畫會員である。

藥師寺主計



【氏計主寺師藥】

總社町の出身にして明治三十六年岡山中學校を卒業し、更に第六高等學校を経て東京帝國大學工學部建築科を優秀な成績を以て卒業し、夙に學生時代より頭腦明哲にして將來を囑目せられ、特に關西財閥の雄、大原孫三郎の寵愛薄からざるものがあつた。かくて明治四十三年陸軍省より聘せられて陸軍技師に任せられ、更に選ばれて建築術研究の爲め歐米各國に出張を命ぜられ銳意斯學の視察研究を遂げて歸朝し、大正十三年、高等官二等に陞叙せられて勅任技師に任せられた。其後間もなく倉敷絹織株式社の創立と同時に大原氏に聘せられ常務取締役として今日に及んでゐるが、其の間極度の不況時代を氏獨特の手腕を以て切り抜け克く大原氏の要望に應へ、倉敷絹織をして日本斯界の最高峰として注目せしめる迄發展せしめたのは全く氏

の力に依るといふも過言であるまい。總社町出身者にして事業界に名士の數少き中に最も將來を期待せられてゐる一人である。

清水八百一

總社町清水の出身にして十四、五歳頃は農事に従事してゐたが生來剛膽にして野心満々たりし氏は苦學して暫時閑谷中學校に學び外人教師の認むる所となり其の師と共に横濱にありて勉學中、明治三十三年頃偶々外務省の留學生に選ばれてウラジオに留學して露語の研究に没頭した。其の後書記生となり更に累進して領事となり、チーフを振り出しに各地に轉任し、チ、ハル領事の時滿洲事變勃發し、當時チチハルは敵軍の包圍の中にあつたが生來の剛膽、沈勇は克く其の間に處して居留民保護の重任を果たし、身の危険をも顧ず最後迄領事館内に踏み止つて活躍せられた。其の後漢口總領事に榮轉し、日支問題多端の折柄よく重責を果され、現在は官を辞し、新京に於て事業界に雄飛せられてゐる。

池上勢平



【氏平勢上池】

同氏は都窪郡庄村の生れで儒者池上誼三氏の養子となりて池上姓を繼いだもので初め岡山中學校に學んだが病のため果さず犬飼松窓翁に師事して漢詩文を修めた。明治二十九年總社銀行に奉職し全三十三年郡會議員に推された。以來淺尾村會議員、所得稅調査委員、總社町外一ヶ村學校組合議員、衛生委員、同組合長を歴任し、更に三十七年郡參事會員、總社町會議員を経て明治四十五年總社町長に就任し、爾來現助役井頭康男氏町長代理就任迄實に五期二十年間の久しきに亘つて町政に參與し、一意専心町の發展策を講じ遂に今日の隆盛を見る。之實に同氏多年盡瘁の賜と言ふべく、其の功績は町政史の中に燦として輝いて消滅しないであらう。現在で

は町政界を隱退せられたけれど、尙岡山縣農工銀行の重役であり、依然として町の長老として財的に、政治的に隱然たる勢力は覆ふべくもない。

第十一章 總社町の名産

高粱川の鮎

總社町の名物の中で重きを加へるもの、一つとして高粱川の鮎がある。あの清澄なる流れの中に棲み、氷の様な清湍を突き切り、苔のみに依て成育するといはれる潑瀾とした鮎の香りと味は又格別である。此の若鮎の芳香の中に川魚料理の粹は盡きると言ふべく、又此の味覺こそは眞夏の味覺の尖端を行くべきものと誇稱して尙足らないのである。

瓊乃柚

瓊乃柚は、垂仁天皇の御代、田道間守をして非時香果を常世の國に求めしめたとい

ふ古典より思ひつき發明せられたもので橘柚を原料とし、風味頗る高く、寒暑、長期の保存に良く堪え其の味變せず、体裁優美にして高雅なる菓子であり、名聲は古くから縣下に聞えてゐる。各種博覽會に出品して褒状を受け、陸軍大演習の砌、畏れ多くも天覽を賜つた。家庭用、贈答用として申し分ないもので、白眉として推さるべきであらう。

養老糖

養老糖も古くから總社の名産として廣く喧傳せられて居り、其の淵源は遠く元祿の頃に及び、大石良雄松山の城に至る時旅宿し、いたく其の味を愛で老を養ふに足るものとしてかく名付けたと傳へられて居り、以て其の味の如何に風雅に富んでゐるか想像し得よう。之又各種博覽會に出品して褒状を受け、大正天皇又皇太子殿下にあらせられる時岡山縣へ行啓の砌、御買上の光榮に浴し郷土名物としての名聲を高めた。

宇治羊羹、カステラ饅頭、雪舟饅頭

宇治羊羹、カステラ饅頭共に其の起源は古く、特殊な製法と嚴撰せる材料とに依り、其の甘味、風味共に他の名菓の追隨を許さず、依然として總社町名産の名を失はず、名菓としての地位を確保してゐる。雪舟饅頭は近年に至つて出来たもので寶福寺の雪舟に因み記念土産物として適當である。養老糖と共に家庭用、贈答用として診重されてゐる。

第十二章 娛樂と慰安



【座壽社總】

娛樂機關の比較的少い地方に於て最も大きな慰安を地方民に與へるのは活動寫真館乃至は劇場であらう。我が總社町は人口の割合が農業に従事せるものが多く又附近も全部農村であり工場等の數も少い所から常設館はなく其の代り劇

(120)

場が二ヶ所にある。然し随時活動寫真も公開して居り芝居や活動寫真が殆んど毎日續き唯一の娛樂機關となつてゐる。

總社壽座

壽座は總社町川崎にあり、活動寫真に、芝居に、各種催物に殆んど閉館の程もなく見易い劇場として古くより親しまれてゐる。場内も相當廣く設備もよく行届いてゐる。



【總社劇場】

總社劇場

榮町通りより東驛に突き抜ける大道に沿ふて總社劇場がある。最近の建築に係り堂々たる外觀は地方として稀である。之も壽座と同様活動寫真、芝居等を随時開いて優秀映畫の上映室内設備の完備と

相俟つて觀客層に充分の満足と與へてゐる。

第十三章 旅館、料亭、カフェー

(121)

昔から其の土地の興亡は花柳界の盛衰に依つて知られると言はれるが恐らく總社町程地方に於て花柳界が繁榮してゐる土地はなからう。凡ての点に於て旅人の旅情を慰め、充分な慰安と休息を與へるのは旅館であるが現在總社町には幾多の旅館、料亭があり、設備は充分に完備して他の都市に比較して、其の規模に於て、其のサービスに於て何等遜色は無い。カフェー、飲食店も多數あり、春夏秋冬其の季に相應しい裝飾をなし美形互に其の美を競ひ、艶を争ふて脂粉の香、屋内に充ち、ネオンサインの輝きに其の情緒は得も言はれない。尙當町には檢番二軒あり、藝妓は互に妍を競ひ、紅燈の下、夜更けて歡を盡して嬌聲静まり、紅裾乱れて醉歩を運び、或は絃歌風に流れて濛ふあたり、靜かに佇む一二の影、裾香楚々として行人の眼を引き情緒纏綿として果てしない。

ハイキングコース案内

寶福寺、豪溪コース(鉄道省指定)

徒歩距離 十五軒

所要時間

五時間

汽車賃

岡山ヨリ 西総社、四十三錢

倉敷ヨリ 西総社、十八錢

自動車賃

豪溪—豪溪驛間 片道五十錢

西総社驛下車、田圃道を細き流れに沿って行けば、約二軒古松蒼然たる中に大伽藍の
 蔓陽光にかやけるを見る。これを臨濟宗寶福寺にして、雪舟の幼時を過せしところ
 境内に特別保護建造物三重の塔あり。數百年の世のうつろひを漂はせて懐古の情をそ
 ぐり、又之に隣つて雪舟禪師の大石碑あり、雄渾なる筆蹟は頼山陽の揮毫にかゝる。
 緑蔭ほの暗く閑寂四方にひろがりて禪味の身邊を去來するを覺ゆ。少時こゝに憩ひて
 小徑を辿り行けば高梁川の満々たる清流に出で歩を進め行けば、横谷川の高梁川に落
 合ふところ明治橋懸り、道を右して上り愈々豪溪口にさしかれば、巒嶽は巍峨とし
 て天を摩し、萬仞の懸崖豪壯を極むる下、溪流鏘々として山谷に反響し笙簫の音を思
 はしめる。新緑萌え出で、奇岩緑を吐くとき、或は紅葉絶壁に映ゆる頃訪れば、こよ
 なき景趣に恍惚として忘我の神秘に打たるゝであらう。歸路は豪溪驛迄バスを利用す
 るを便とする。

ハイキングコース案内

寶福寺、豪溪コース（鉄道省指定）

徒歩距離 十五軒 所要時間 五時間

汽車賃 岡山ヨリ 西総社、四十三錢 倉敷ヨリ 西総社、十八錢

自動車賃 豪溪—豪溪驛間 片道五十錢

西総社驛下車、田圃道を細き流れに沿って行けば、約二軒古松蒼然たる中に大伽藍の
曇陽光にかゞやけるを見る。これぞ臨濟宗寶福寺にして、雪舟の幼時を過せしところ
境内に特別保護建造物三重の塔あり。數百年の世のうつろひを漂はせて懐古の情をそ
ゝり、又之に隣つて雪舟禪師の大石碑あり、雄渾なる筆蹟は頼山陽の揮毫にかゝる。
綠蔭ほの暗く閑寂四方にひろがりて禪味の身邊を去來するを覺ゆ。少時こゝに憩ひて
小徑を辿り行けば高梁川の満々たる清流に出で歩を進め行けば、横谷川の高梁川に落
合ふところ明治橋懸り、道を右して上り愈々豪溪口にさしか、れば、巒嶽は嶺峨とし
て天を摩し、萬仞の懸崖豪壯を極むる下、溪流鏘々として山谷に反響し笙蕭の音を思
はしめる。新緑萌え出で、奇岩緑を吐くとき、或は紅葉絶壁に映ゆる頃訪れば、こよ
なき景趣に恍惚として忘我の神秘に打たる、であらう。歸路は豪溪驛迄バスを利用す
るを便とする。

總社商工會

附、總社商工會名鑑

一、總社商工會の沿革

總社商工會の始まりは大正十三年頃井頭康男、岡一十夫の諸氏が發起して計画したに濫觴するものにして、當時縣會議員なりし藥師寺清三郎氏を會長に薦し漸くにして創立を見たるも草創當時の常として幾多の難艱に逢着し往苒時日を経過してゐたが大正十五年に至り商工會再建の氣運濃厚となり井頭良吉氏等の奔走に依り時の町長池上勢平氏を會長に推し、副會長に井頭良吉氏が任じ商工業の開發指導に務め種々な事業を遂行した。爾來幾多役員の變更を見て今日に至つてゐるが其の間各種事業へ獎勵金交付、講演會、優良店員の表彰に務める一方郡是會社分工場の誘置に成功する等大事業を着々と遂行してゐる。商工會が今日の姿に迄發展し得たのは創立當時の町長池上勢平、具體的活動に主として全力を傾倒された副會長井頭良吉、並に現會長仙石佐吉諸氏の絶えざる努力の賜であつて商工會功勞者として特記すべきであらう。

(1)

二、事業並に施設

(2)

本町商工會は左の

- 一、商工業ノ發達ニ必要ナル方案ヲ調査スルコト
 - 二、商工業ニ關スル意見ヲ行政廳ニ開申スルコト
 - 三、商工業ノ狀況及統計ヲ調査スルコト
 - 四、博覽會、共進會等ノ出品斡旋及商品販路ノ開拓ヲ圖ルコト
 - 五、商工業ニ對スル功勞者又ハ優良店員ヲ調査シ之ヲ表彰スルコト
 - 六、商工業ニ關スル紛議ヲ仲裁スルコト
 - 七、商工業ニ關スル弊風ヲ矯正スルコト
 - 八、其ノ他必要ト認ムル事項
- 等々を極力實行する事に依て商工業の振興を圖らんとするものにして既に實行し來つた事業としては、

- 一、各種講演會の開催
- 二、一般商取引の改善に資すべきビラ、ポスターの作成

- 三、營業純益金申告に當り豫備申告書を作成配布し申告の正確と均衡を期す
 - 四、商工業發展の一助として各種事業の援助
 - 五、産業狀況の視察
 - 六、顧問辨護士を聘し一般會員の法律的指導と啓發に務む
 - 七、名所入りスタンプの調製並に宣傳ビラの頒布
 - 八、各種陳情運動
- 等々であるが就中郡是會社分工場誘置の成功は其の一事のみにて商工會にとつて一大事業の完成であり同時に商工會將來の發展に多大の示唆を與ふるものと言つてよからう。

三、初期以來の商工會役員

初期役員

(3)

會長 池上勢平

副會長 井頭良吉

(4)

副會長 福屋 七郎兵衛 幹事 高谷保太郎
 理事 池上 菊藏 全 水畑吉太郎
 全 牧野 隆治 全 平川 忠一
 全 龜山 快一郎 全 親 晴一
 會計 永田 仙太郎 顧問 池上 博平
 幹事 仙石 佐吉 全 藥師寺 清三郎
 岡野 三龜男

昭和六年一月十九日役員改選の結果左記の通り當選就任す。

會長

池上 勢平

平川 忠一

副會長

昭利六年六月就任
仙石 佐吉

片山 正平

理事

常務 井頭 康男

會計

池上 二郎

岡野 三龜男

江口 陸藏

妹尾 極市

難波 雅雄

龜山 好治

前島 市五郎

佐々木 要

川上 義一

馬場直三郎

高谷 彌吉

幹事

高谷 彌吉

幹事

吉井 丈夫

水畑 吉太郎

新谷 岩市

三谷 唯二

親 修三郎

池上 基太郎

坪井 五三郎

小西 壽夫

大久保 秀太郎

平田 正市

深見 聰一

友杉 林三郎

小川 源一

池上 常太郎

荒木 始一

岡野 三龜男

淺野 間千虎

難波 雅雄

佐伯 市太郎

高谷 彌吉

加藤 實治郎

三谷 唯二

昭和九年六月二十日役員改選の結果左記の通り當選就任す

會長

仙石 佐吉

川上 義一

副會長

佐々木 要

馬場直三郎

理事

常務 井頭 康男

龜山 好治

會計 池上 二郎

平川 忠一

妹尾 極市

親 修三郎

(5)

昭和六年十二月辭職
昭和七年三月辭職
昭和六年二月辭職
死亡

(6)

昭和九年七月二十日評議員改選の結果左記の通り當選就任す
評議員

副會長	前島市五郎	小西美夫三
理事常務	井頭康男	妹尾柁平
會計	池上二朗	松永壽男
副會長	井頭康男	小林藤三郎
理事	新谷岩市	佐伯市太郎
常務	池上二朗	大月義男
會計	龜山好治	小野剛三
		池上基太郎
		井上彦市
		渡邊武雄
		池上文一
		片山正平
		坪井五三郎
		吉井丈夫
		深見聰一
		竹川貞一
		黒田武一

(7)

現在役員左の通りである

會長	仙石佐吉	親修三郎
副會長	井頭康男	前島市五郎
理事	池上二朗	新谷岩市
	妹尾極市	頓宮金之介
	川上義一	榮田友太郎
	馬場直三郎	加藤實次郎
	龜山好治	妹尾柁平
	平川忠一	松永壽男

評議員

荒木始一	淺野間千虎
池上常太郎	景山淺次
平田正市	小西美夫三
大田周太郎	佐伯市太郎
小池祥一	平田正市
新谷岩市	新谷岩市

昭和十年二月七日死亡
昭和十年十二月十八日辭職
昭和九年十月十日死亡
昭和十一年一月十一日
理事就任ノタメ辭職

小林藤三郎
 大月義男
 小野剛三
 池上基太郎
 井上彦市
 渡邊武雄
 池上文一
 片山正平
 坪井五三郎
 吉井丈夫

深見聰一
 竹川貞一
 黒田武一
 栢野一
 荒木始一
 池上常太郎
 大田周太郎
 小池祥一
 淺野間千虎
 景山淺次

會計を通じて見たる

四、商工會の現状

今商工會の現況を會計を通じて見るならば

昭和九年度歳入歳出決算書

一金六百五拾九圓八拾七錢也

歳入決算高

一金四百四拾六圓四拾九錢也
 差引殘金貳百拾參圓參拾八錢也
 昭和十年度歳入歳出豫算書
 一金四百八拾壹圓也
 一金四百八拾壹圓也
 差引殘金ナシ

歳出決算高
 翌年度へ繰越
 歳入豫算高
 歳出豫算高

今九年度決算書と十年度豫算書を各科目に依て比較して見るに

歳入之部

科 款	項 目	額 度	
		十 九 年 度	十 年 度 豫 算
一、賦課金	一、會員割	一六〇〇	一〇〇〇
	二、營業割	六〇〇	四〇〇
二、補助金		一六〇〇	一六〇〇

(12)

合計	五、雜支出	一、雜費	六、豫備費	一、豫備費
	五	五	一四	一四
	〇	〇	〇	〇
	七	七	一	一
	七	七	四	四

更に昭和九年度總社商工會特別會計歲入出決算書に依れば

一金參千壹百參拾圓拾錢也 歲入決算高
 一金參千八拾參圓參拾貳錢也 歲出決算高
 差引四拾六圓七拾八錢也
 之の詳細を示せば

歲入之部

科	款	項目	決算額	附記
一、事業獎勵金		一、事業獎勵金	三、〇〇〇	總社町事業獎金
			〇〇	

(13)

合計	二、繰越金	一、前年度繰越金	三、雜收入	一、雜收入
	三六	三六	一四	一四
	〇	〇	一〇	一〇
	六	六	四	四
	六	六	〇	〇
		前年度繰越金		一時預金利子

歲出之部

合計	一、償還金	二、元金償還	三、〇八三	附記
	三三	三三	〇	池上菊藏 二、〇〇〇
	〇	〇	〇	松原菊藏 一、〇〇〇
	三	三	〇	池上菊藏 六六、六六六
	三	三	〇	松原菊藏 一六、六六六
	三、〇八三	三、〇八三	〇	
	一	一	一	
	一	一	一	
	一	一	一	
	三、〇八三	三、〇八三	三	

總社商工會名鑑

東驛前 電話一四七
 田町 電話一〇九
 西大町 電話一二五
 榮町 電話一三九
 田町 電話一〇三
 門田 電話三三
 西驛前 電話七二

中國合同電氣株式會社總社出張所
 中國銀行總社支店
 總社花萬株式會社
 岡山合同貯蓄銀行總社支店
 備作製絲生繭取扱所
 姫井台名會社總社工場
 那是製絲株式會社總社工場

食糧品の部

米麥、雜穀

米穀、肥料 北田町 電話二二五
 全 福井
 米穀 田町 電話四二
 米穀、肥料 本町 電話一三三乙
 精米、米穀 門田

妹尾 柁平
 片岡 傳次
 小橋 一太郎
 矢吹 林太郎
 秋山 立一

精米、米穀 田町 電話二〇二
 全 川崎
 米穀、薪炭、酒 北馬場
 精米、雜穀 宮本町 電話二一一
 精米、肥料 宮本町
 精米 門田 電話二〇四
 雜穀、薪炭 井尻野
 雜穀、薪炭、雜貨 三千坊
 雜穀 西宮本町 電話二四一
 雜穀、薪炭、酒 南馬場
 素麵、麵類製造 西宮本町 電話一四五
 東宮本町 電話二四五

鮮魚、蒲鉾

生魚 東宮本町 電話一〇四
 生魚 本町
 生魚 井尻野

江口 永次郎
 友杉 林三郎
 野瀬 幸一
 榎野 スガ
 藤原 要一
 小西 壽夫
 小野 鉄次郎
 平田 俊一郎
 仙石 茂平
 守屋 鹿一
 深見 聰一
 池上 菊藏

石田 代治
 吉富 輝雄
 北村 三郎

(16)

生魚 田町 矢吹辨太郎
 蒲鉾 西大町 福武源治
 生魚 田町 小西嘉多治
 生魚 本町 池上保平

海産物、乾物、相物

乾物、相物、海産物、蔬菜 東田町 電話一八八 平井屋 淺野 荒藏
 乾物、日用品 本町 電話一一一 喜多屋 山本 哉一
 海産物、紙、砂糖、疊表 本町 電話二二三 平富 渡邊 富平
 全 本町 電話二九 桃井手屋 三谷 唯富 二平
 乾物、海産物、相物 榮町 電話二〇八 スミヤ 松尾 治平
 乾物 北馬場 宮本町 電話一三二 水内屋 中川 與吉
 乾物、荒物、相物 東宮本町 清水出張 小林 狸三郎
 乾物、荒物 榮町 電話一〇七 谷本屋 片山 熊治
 乾物、海産物、荒物 門田 電話六二 西山 準治

(17)

酒、醬油、酢

酒、セメント、炭 榮町 電話三六 シゲヤ 田邊 篤一
 醬油釀造、各種油、炭、塩 榮町 角藤田 藤田 力太郎
 醬油、桃 榮町 秋山 留五郎
 酒、醬油 田町 山室 留五郎
 醬油釀造 北國府 國府 一太郎
 醬油 南馬場 三宅 近太郎
 酒、酢、醬油 榮町 新谷 野 順壽
 醬油釀造 井尻野 神野 繁太郎
 酒 西驛通り 松本 繁太郎
 酒 川崎 電話五〇 難波 長次郎
 酒 南馬場 山縣 順次郎
 酒 西大町 電話一七二 河西 軍次郎

菓子、飴、餅

饅頭製造 榮町 電話五八 平川本店 山本 富藏
 菓子製造 榮町 電話五八 平川本店 山本 富藏

菓子 本町 電話 二三六
 堅パン製造 田町
 饅頭製造 南馬場
 菓子 宮本町
 菓子、煙草 東宮本町
 菓子、煙草、オサ 榮町
 菓子製造 西驛通り
 菓子 西大町
 全 西驛前
 全 西驛通り
 菓子、飲食店、自動車待合所 電話 二三六
 菓子、飴 西驛通り
 菓子 田町 電話 二二三
 菓子 東田町 電話 二三四
 菓子、餅 本町
 菓子製造 本町 電話 一一四
 菓子、古雜誌 榮町
 菓子製造 宮本町

白神孫 一
 仁熊宇三 郎
 加藤國太 郎
 藤原實太 郎
 三垣茂三 九郎
 光畑誠 一
 小野寅 吉
 小宮鶴太 郎
 頓宮金之 逸
 頓宮金之 介
 江尻友 吉
 平田重 造
 釜谷廣治 郎
 中尾知 孝
 井上彦 一
 三谷與一 郎
 葛原定太 郎

豆腐

飲料水、氷、茶

茶、文房具、茶器 西大町 電話 二三二
 ラムネ、アツプル製造 西田町 電話 三四
 氷、玩具、魚釣道具、ラムネ 榮町 電話 四七
 製氷 北馬場 電話 一四八

月仙堂 妹尾極市
 朝日鑛泉株式會社
 平田松一
 新谷岩市

鳥獸、肉、牛乳

牛肉、鶏肉、豚肉 西田町 電話 五六
 牛乳 田町
 牛肉、鶏肉 西宮本町
 養鶏業 東田町 電話 四八
 田町
 郡役所道 電話 二一七
 宮本町

景山熊男
 坪井斐雄
 江口陸藏
 森川イノ
 佐伯市太郎
 片岡珠夫
 池上和平治

煙草、保險

(20)

煙草、化粧品
煙草、桃製造
煙草、菓子
煙草、保險代理店
保險代理店

淇井
田町
西驛前
西田町
宮本町
電話一五八
電話三一

間野化
渡邊石太郎
横田定太郎
井頭康吉
仙石佐吉

化粧品、雜貨、裝身具の部

時計、貴金屬

時計、眼鏡、蓄音器

宮本町

時計、貴金屬

田町

時計

時計、貴金屬

木町

田邊夫美
神崎義男
杉山新助
栢野桂

小間物、化粧品、裝身具

化粧品、モスリン

榮町

電話一四三アラキ本店

化粧品、小間物

田町

荒木富夫
森脇彰

化粧品

化粧品、小間物

宮本町

電話二一三

ベニヤ

横田太一

毛糸

毛糸、煙草

田町

本町

古市佐一

帽子

糸

糸

本町

北馬場

田町

安延轍二

永田作造

仲達敏郎

加藤喜代市

和洋雜貨、洋服

洋品雜貨

洋品雜貨

洋服

洋品雜貨

洋品町貨

雜貨

雜貨、半物仕立

(21)

洋服業

東田町

電話二五七

大月義男

本町

田町

本町

本町

田町

田町

田町

田町

田町

田町

田町

田町

電話六八

電話二一四

アルキ屋

吉富八郎

木口増太郎

小林藤三郎

山本太一郎

池上文一

林恒三郎

難波覺治

大月義男

(22)

雜貨、祝儀用品
洋品雜貨
洋服
洋服
雜貨

本町 電話一三五
榮町
田町
郡役所道 電話二一九
本町

野瀨玉惠
坪井五三郎
井頭宗一
江口茂一
片岡常

履物、傘、提灯

履物
履物
履物
履物
履物
履物、武道具
履物、材木
履物
履物
履物、煙草

田町
田町
田町
本町
榮町
宮本町
東總社驛道
宮本町
宮本町
南馬場

アメリカ屋
サクラヤ
横田猪之助
劍持兼太郎
小西始枝
多田岩吉
劍持甚藏
深見潤平
難波輝太郎
最相霞
森長喜一
中川清三郎

(23)

家具用品の部

壘、壘表、花筵、莫座

花筵、壘表問屋
花筵、壘表問屋
花筵、壘表問屋
花筵製造
花筵製造、蘭草賣買
花筵、壘表
花筵、壘系
壘製造
壘製造

井手 電話一六六
西宮本町 電話六三
東宮本町 電話一〇
諸上
清水
延
清水
宮本町
刑部

吉本鞍太郎
深見升平
栢野馥
角谷寛一
最相太一郎
池上常太郎
平井源右衛門
西岡一惠
中田亮一

足袋製造
下駄製造
履物
傘、提灯製造

田町
清水出張
田町
宮本町

江口正雄
最相麟一
樋口辰四郎
藤井徳之助

疊製造

西驛道 建具、家具類、娛樂品、指物

建具、タンス、嫁入道具 榮町 電話一五三
 建具、タンス、嫁入道具 本町
 指物 田町
 指物 田町
 洋家具類、建具、指物 稻荷町
 指物 井尻野
 和洋家具類、指物 西宮本町
 ラヂオ、電氣器具 本町
 全 田町
 電氣器具 田町
 玩具、切手 榮町
 製綿、布團、蚊帳、精米 榮町 電話七〇
 表具 本町
 生花、切花 田町

淺沼信次

大久保秀太郎
 高杉留吉
 高本忠太郎
 神崎卯太郎
 野上武男
 大田周太郎
 小坂嘉男
 山下延由男
 高山朝太郎
 高橋品吉
 高塚民
 松永豊太郎
 水畑直吉
 森信辰夫

金屬、機械、器具類の部

金屬、機械、器具

農具、發動機 門田
 鍛冶 東田町
 鐵工、發動機 門田 電話二四九
 金物一式 本町 電話一五七
 鐵力細工 宮本町
 鐵力細工 井尻野
 金物一式 本町 電話一三六
 銅、鉄仲買 門田
 鐵工鍛冶 川崎
 鐵工業 田町
 鐵力細工 田町
 金物一式 西大町
 金物、左官材料 田町
 鐵力細工 本町
 金物、左官材料 東宮本町

秋山廣造
 木口玉
 元林貢
 水畑吉太郎
 平賀伊四郎
 村木滿三
 小野剛
 赤木藤太郎
 松尾喜三右衛門
 長谷井鉄雄
 渡邊茂
 加藤實次郎
 渡邊代次郎
 安延馬之丞
 寺尾政一

鋸目立、大工道具
 金物
 左官用具一式

宮本町
 南馬場
 宮本町
 電話二四三

西郡屋
 山室喜義
 荒木始一
 風早孫市

自轉車、自動車

自轉車、附屬品、特許品 本町 電話一三四
 自轉車、附屬品 濱井
 全 田町
 全 榮町 電話二二八
 全 旭町
 全、ガス熔接 東宮本町
 ハイヤー 東宮本町 電話五九
 門出 電話一六〇
 貨物自動車 西驛道 電話七一
 ハイヤー、定期バス 本社驛道 電話二二二
 トラソク、ハイヤー 本町 電話二二二
 自轉車、附屬品 西田町 電話一三四

梶谷正爾
 小池伊平
 栗坂久藏
 清水傳高
 平田一
 横田庄太郎
 宮崎猪太郎
 秋山唯一
 安原始一
 難波慶治
 梶谷寶一
 井頭龜太郎

日用雜貨荒物の部

荒物、農具 田町 電話二一六
 雜貨、履物、陶器 本町
 荒物、日用品 田町
 荒物、漆器 本町
 荒物、日用品 本町
 籠製造、荒物 宮本町
 油、薪炭 濱井 電話二二〇

小林音治
 渡邊武雄
 平田政四郎
 馬場直三郎
 水畑純平
 熊澤庄八
 前島市五郎

教育學用品、印刷の部

教育學用品

新聞、書籍、雜誌、文房具 本町 電話六一
 文房具、煙草、額縁 榮町
 文房具、書籍 宮本町
 文具、紙 宮本町
 文房具、藥賣買 北馬場

尚文館
 荒木楠太郎
 森脇勢鬼一
 高杉冬子
 曾我雅一
 梶田勘三郎

文房具
宮本町
文房具、學用品
宮本町

活版印刷、寫真

活版印刷	東宮本町	電話一六一
活版印刷	本町	電話三七
活版印刷	西宮本町	電話二三八
活版印刷	榮町	電話二〇五
寫真	西大町	電話二〇五
寫真	田町	電話五二
寫真	東驛前	
和洋紙	本町	

吳服、半物仕立、古着、骨董の部

吳服、衣服

吳服、反物	川崎	
吳服、株式	宮本町	電話一五一

矢吹宗次郎	小田與之吉	黒田武一	山崎幸三	親修三郎	栢野金三郎	中山宮次郎	栢野光治	青淵正二	福屋七郎兵衛	加藤健男	池上二朗
-------	-------	------	------	------	-------	-------	------	------	--------	------	------

吳服、反物	本町	電話二五
吳服	宮本町	電話二一〇
全	本町	電話二二九
全	榮町	電話二五〇
全	田町	電話一二八
全	本町	電話六五

半物仕立

半物仕立	田町	かめや	龜山好治
半物仕立	田町	高田屋	平田覺一郎
半物仕立、小供服	榮町	むらきや	小西十七三
半物、雜貨	本町	まつや	片山正平
學生服、半物仕立	宮本町	はだや	景山淺治
半物仕立、電氣器具	宮本町	はしもとや	荒木喜美惠
半物仕立	田町		白神紋吉
半物	洪井		

矢吹鶴太郎	村木樂治	深井品次郎	岡純平	竹川貞一	森容惣三郎	原田貞四郎	小池祥一
-------	------	-------	-----	------	-------	-------	------

(30)

古着

古衣、骨董

全

田町

古物

田町

書畫、骨董

田町

電話一四九

大森作一
池上美代吉
三宅狼太郎
川上義一

藥品の部

藥種賣藥

田町

電話一二七

全

榮町

電話一三〇

淺野間千虎
岡上純子

賣藥業、切手販賣

宮本町

電話一五

池上秀三

藥種賣藥

本町

電話一五

佐々木要

全

門田

電話一五

佐伯忠雄

賣藥業

門田

電話一五

秋山石五郎

全

天原

電話一五

小西良一

全

井尻野

電話一五

吉田靜太郎

全

本町

電話一五

龜山彌左衛門

全

福井

電話一五

龜山彌左衛門

賣藥業

田町

全

井尻野

電話一五

大月保太郎

全

小寺

電話一五

村木英夫

全

小寺

電話一五

吉富荒次郎

旅館、料理、カフェーの部

旅館、料理

旅館、料理

田町

電話一二〇

旅館、割烹

田町

電話一四

植木屋 榮田友太郎
高塚屋 岡野三翁男

全

田町

電話一四

森本屋 坂井繼一

宿屋、飲食店

宮本町

電話一四

米屋 横田良一

旅館

東驛前

電話一四

竹亭 竹政藤十郎

宿屋

西大町

電話一四

鈴木政一

旅館、割烹

榮町

電話一七

君乃惠 吉井丈夫

旅館、料理

旭町

電話一七

平田吉之助

宿屋

西驛前

電話一八

角田祐三郎

(31)

料亭 料亭

全 全 全

本町 東驛前 南馬場 北浦 宮本町

電話二〇 電話一三〇 電話二四七 電話六六

萬壽家 菊園亭 守野 竹 安民 一 惠 男 大黒屋 黒田 修カ 富田屋 石田 小銀

カフェー、飲食店

飲食店 カフェー

満井 田町 田町 田町

電話五三 電話二一九 電話一〇二

松美家 岡崎 永壽 市の家 沼本 虎熊 七福 宮原 喜久 小池 留吉

飲食店 全 全 全 全 全

北馬場 洪井 榮町 榮町 田町 田町

第一食堂 春屋 近藤 池上 佐太 大熊 友吉 坂口 勘次 一寸屋 大賀 初

飲食店 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

西驛通 田町 西驛前 中村

池田カメノ 難波友三郎 白神津多野

全、仕出し 飲食業 全 全 全 全 全

東宮本町 榮町 西大町 宮本町 西大町

電話二五三 電話二二七

平野屋 昭和食堂 杉森 季奴 坪井 徳次郎

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

宮本町 西大町 西大町 宮本町 西驛前

電話二〇一

内田勝次郎 神野鶴次郎 間野由子

カフェー、旅館、仕出し カフェー

宮本町 西驛前

電話二〇一

藤原 鉄治 難波 徳藏 木口 喜三郎

理髪、銭湯の部

理髪 全 全

本町 南馬場 本町

榎本 大助 内藤 千代 横田 菊市

理髮
錢湯
全

田町
榮町
田町

請負業の部

京染、洗張

南馬場

製瓦業

宮本町

土木建築請負業

宮本町

製瓦業

田町

建築請負

諸上

電話一四〇

全
全
全
全
全
屋根職

川崎
川崎
北馬場
井尻野

前田文七
三谷彌一
竹原金治郎
大口力太郎
萩野安平
金丸善吉
加藤近松
加藤市平
西林兼十郎
藤井春太郎
金岡教太郎
徳満岡次郎

安田三郎
宮崎爲太郎
中村利吉

石工業
全

田町
宮本町

其他の部

運送業
製網業
株式店
株式店
材木
全
天産物
薄荷
靴製造、修繕
製紋、洗張
蹄鉄
牛馬商
全

東驛前
稻荷町
宮本町
榮町
北馬場
溝井
西驛道
北浦
田町
宮本町
田町
井尻野
田町

電話八
電話二一八
電話二四八
電話二〇八
電話二〇九
電話二七
電話二四
電話一八
電話二一

長野岩平
小川丈市
難波雅雄
野上林五郎
横田克己
吉田多麒
傳明寺玉
中島義一
伊丹喜之助
延原喜市
久保木富太郎
水平田定一
水川坂二
坪井一男
高橋平市

(36)

陶漆器
會社員

田町

電話 一一三

宮本町

清水

刑部

井尻野

井尻野

洪井

榮町

電話 一四六

秋吉

近藤

清水

萱原

村木

堀榮

小池

清水

田友

藤英

水清

原正

木正

榮正

池高

水邦

吉二

紀二

豐一

士一

治一

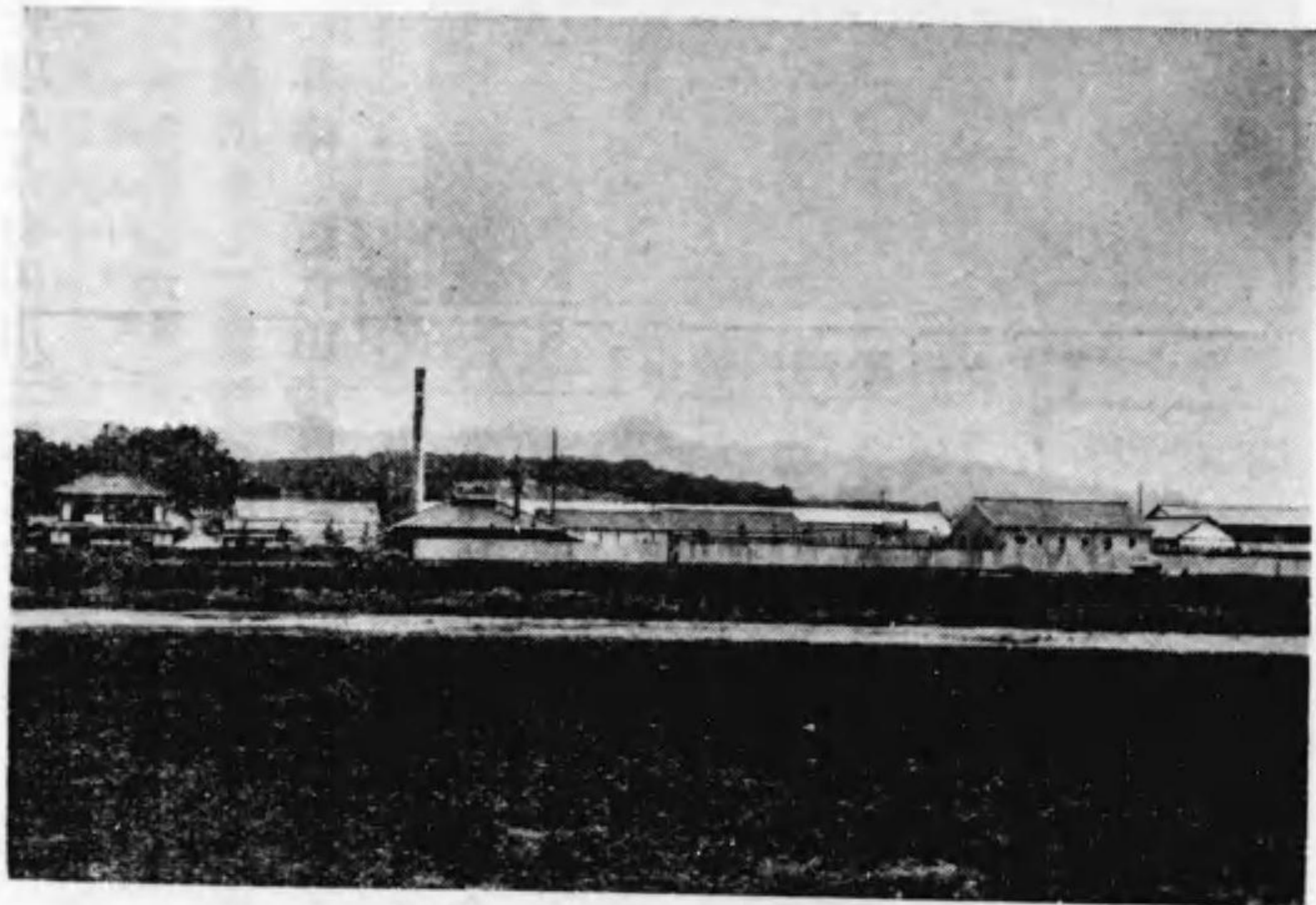
治一

治一

姫井合名會社總社工場

(門田 電話三三番)

姫井合名會社總社工場は本社を東京市麴町區丸ノ内二丁目に有し大正十三年十月資本金七拾万圓の全額拂込を以て創立せられたものである。工場内には大巾鉄製力織機一六〇台を備へ雲霧、小倉地、綿ネール、帆布、防水布、其他綿布類の製造及加工品の販賣を主とし社運の隆盛に伴つて生産額は年々増加し、年生産額は二二五、〇〇〇ヤール、六十万圓を遙かに突破すると言はれ、販路も東京、大阪の主要都市は勿論内地の重要都市を初め遠く關東州、滿洲國方面に迄及ぶ盛況にして其の偉客は總社町産業を表象するものとして誇稱するに足るものがある。



【景全場工井姫】

(37)